明治三十八年五月一日發行(毎月壹回)
明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可



(電話本局六〇七番)
東京 女子文壇社發兌

高等化粧水



フイテルミン

定價一本金二十五錢　三個入七十五錢

皮膚を美麗滑かならしむるのみならず、にきび、そばかす、顔の小じは等の生ずることなく又白粉下として使用すれば本邦在來の鉛製白粉と雖も中毒を起すことなし

（改良すき油　柳糸香）メラセリン……一個五十錢
（改良びん附　玉椿）コラキン……一本二十錢
（改良水油　花かつら）チイトリシキン……一本四十錢
（ふけ取香水　花たちばな）ラウリン……一本六十錢
（あか取香油　春風油）アチモシン……一本四十錢
（ひげ油　住の江）プロチミン……一個三十錢
（うがひ水　しのゝめ）エオチン……一個三十錢
（福原ねりおしろい）……一個廿五錢

▲衛生齒磨石鹼　大廿五錢　小十五錢

新製發賣　旅行携帶用衛生齒磨　本品は高尚なるゴム器入一個三十錢

（總て美麗なる三個箱入に有之御進物用に適す取次は至る處に有之候）

洗浴化粧エリノイン（花の露）

は高尚なる芳香藥及び軟和劑の配伍しあれば朝夕の盥漱及洗浴に際し此の液をたらし用ゆれば如何なる水と雖ども皮膚肌色を損ずる患なく、色を白くし殺菌消毒の効力有る衛生上必要の逸品なり定價一瓶八十錢



衛生材料　藥品器械　處方調劑　調製本舗　東京新橋出雲町角　電話新橋三二四番　福原資生堂

青年文士の良友

秀才文壇

每月二回一日十五日發行

▲定價一冊送料共拾壹錢〇六冊六拾三錢

第五卷拾號……五月一日發兌

本誌創刊以來茲に第五週年册を累ぬる事五十有餘號此間本誌が着々内容の進捗を圖りつゝある事は愛讀諸君が已に認めらるゝ所なれども尚是を以て足れりとせず册數の增加に供へ頁數增加、英文欄新設益々讀者の好伴侶たる實を擧げんと欲し又々第五卷第十號より

▲歐航廿四題（水彩密畫）中村不折筆

を每號挿入する事とせり、滿四年佛國に留學し練磨研讃の功空しからず大陸繪畫競技會に第壹等金牌の月桂冠を得て新に歸朝せられたる大家の筆が如何に本誌の光彩を添ゆるかを諸君に報ずると共に大に他方に向つて誇る所ならん乎

大刷新

發行所　東京市小石川區指ケ谷町一三三　文光堂

賣捌所最寄になくば直接發行所へ御注文を乞

（注意）——此目次を熟讀順次内容閲覽を乞

第壹巻　女子文壇　第五號

目次

百聞は一見に如かず

●第一、二、四號＝賣切欠本なり

女子文壇

發行忽品切　◀第三號要目▶　（増刷出來）

▲水彩密畫
○春の郊外（石版九遍刷）……三宅克己
▲寫眞口繪
○故中島歌子女史舍中十五六年前の面影
（裏面刷込○谷中の朝霜　弘田ゆき子、三宅龍子）
○歐洲風俗（佛國最近流行の婦人帽裝）
○梅と櫻（山中古洞先生大野靜方先生筆）
○名家肖像［久保文學士、中内文學士、津田梅子女史、三輪田眞佐子女史、矢島揖子女史
○女性と文學……（社說）
▲名家文壇
○俗謠茶話……文學士　志田素琴
○月　香（承前）……文學士　久保天隨
○國文評釋（竹取物語三）……文學士　中内蝶二
○もとのしづく……三宅花圃
▲家　庭
○「はな」と婦人……前田曙山
○理想の家庭……池田朝村
○鳩翁道話を讀みて思出のまゝ……矢田鶴之助
○婦人と宗教……内村鑑三
○日本婦人の衣服……長井博士夫人
▲女流小影
○三宅花圃女史　○津田梅子女史
○三輪田眞佐子女史　○矢島揖子女史
其他才媛淑女の手に成る▲美文、消息文、雜文、小說、圖畫、新體詩、はがき文、短歌、俳句皆懸賞詞文豐富
○本號より▲津田河井女史「英文」新設

●第三號殘本僅少＝早く求め玉へ

最近批評一班

▲讀賣新聞評　四號より表紙を一變すると共に内容にも改良刷新した處少くない記者は只一意投稿家のために親切ならんことを思うて居るといふから諸嬢練文の好侶伴であらう。

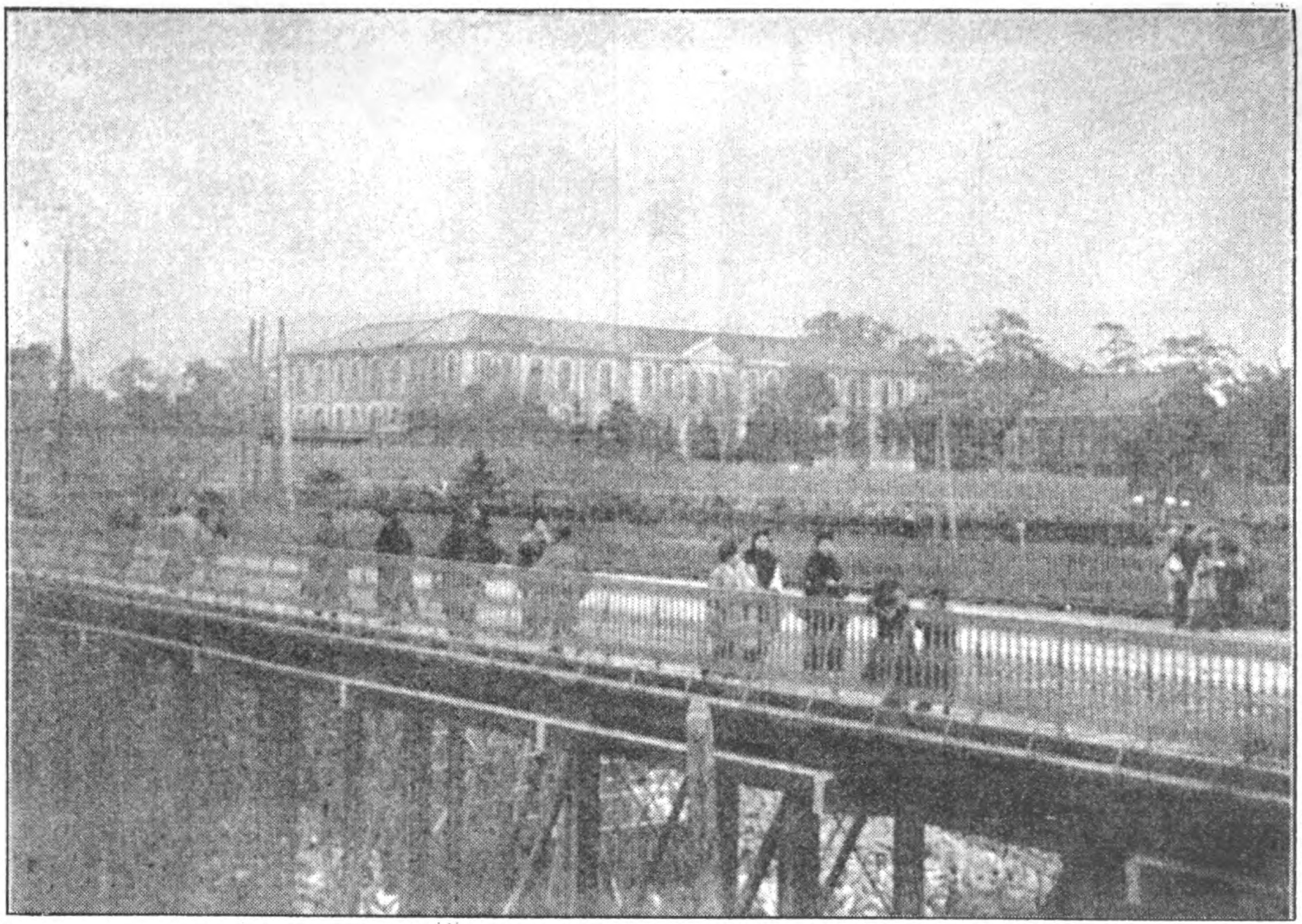
▲日本新聞評　毎月一回一日發行の雜誌にして國文評釋、作文作歌法、家事經濟等の數篇をかゝげ懸賞文を甚だしく集めたり俗受けのよき雜誌なり

▲貿易新報評　學校以外の文學の修養は應に本誌の目的とする所なるべく學課以外の趣味の誘導は應に本誌の主義とする所なるべし、收むる所の名家文壇家庭欄等皆この主義目的に相應する論文講義を集め全集の十分の八は普く投書家の修練場に供したり。投稿の選者は鹽井雨江、廣津柳浪、尾上柴舟、佐々木信綱、巖谷小波等孰れも斯道の名家。

●第四號は發行旬日を出でず賣切の盛況なり

女子文壇は類のない雜誌
發行部數も非常に多い
評判々々





（社員本年四月撮影）

お茶の水橋より「東京女子高等師範學校」を望む

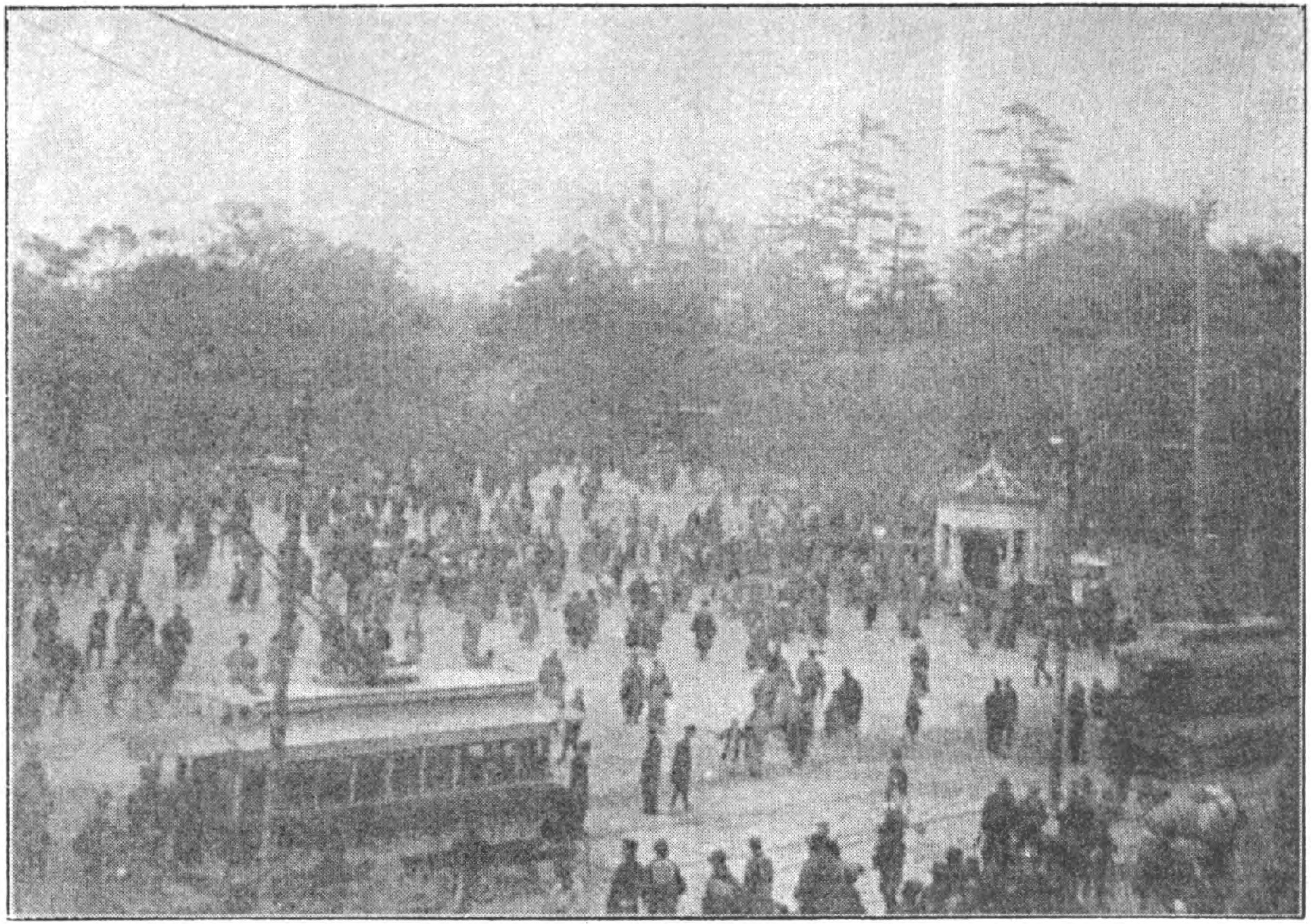




獨逸伯林交際場裡貴婦人






（社員本年四月撮影）

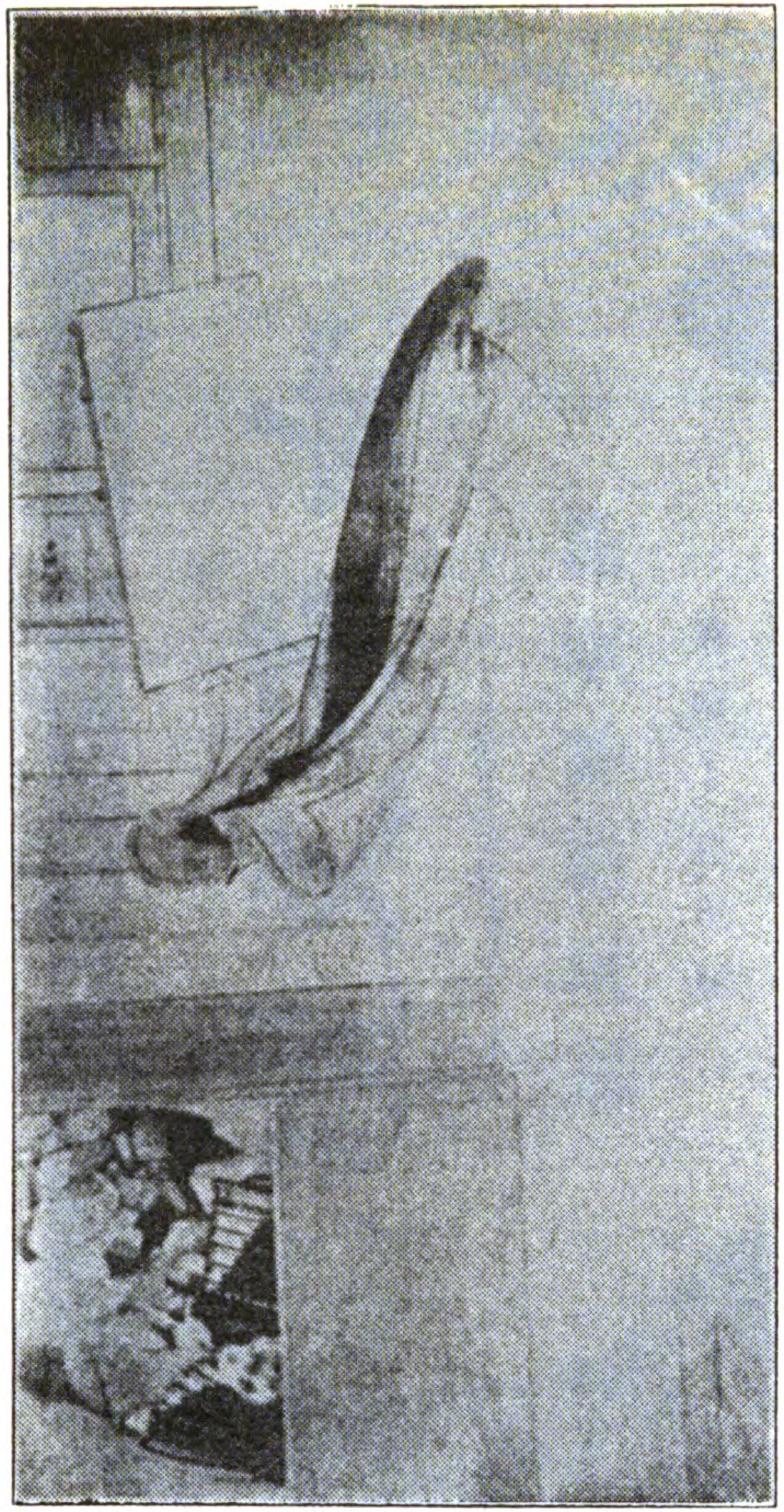
上野公園の賑（櫻花爛熳）



横笛（鏑木清方君筆）



女院落飾（高田鶴仙君筆）



小宰相（鰭崎英朋君筆）

女子文壇

第壹巻第五號

五月一日發兌

女らしき思想



男女の區別を根本的に嚴重に分けやうとするのは、學問上の問題て、隨分やかましい議論も有るてせう只吾人の女らしい思想と謂ふのは、女子の經驗とか、女子の境遇とかに伴つて起る一つの優美な詩的な思想を指すのて、女には女として發展さすべき特性のある如く、必ず女らしい思想を發揮することも出來る理由てす、今の若い女子は、男子の歌ふ處男子の想ふ處ばかりならつて、却つて女と謂ふ自分の本性を忘れて居はすまいか。女子には女子特殊の教育は施されるに相違ないけれども文學上から現今の女子を觀察するに一番出ないのは女らしい作家てす、文學は教育ばかりて成功するものてなく、自個の天分を最も善く自ら養ふことが必要て、てないと文學的作物の上に女らしい感情が現れない。古今を通じての大作「源氏物語」には紫式部が女らしい思想を遺憾なく發揮されてある、又「枕草紙」には清少納言が、ともすれば、女らしくない方に逸れやうとした傾向が著しく見えて居る、流石は一代の閨秀、清女てあつたから好かつたものゝ、若し彼女にあれだけの文才がなかつたならば、只欠點の多い男勝りに止まるのてす。猶近い例は一葉の作物「にごり江」にせよ「たけくらべ」にせよ、觀察と云ひ、筆致と云ひ、善く女らしい處が見えて居る。



歌の糸口（前號のつゞき）

大和田建樹

三、その言葉

繪畫は目を喜ばすべき美術なり。その畫がゝんとする處の思想。いかに優美高尙なりとも、運筆これに伴なはずして拙なき時は。誰かは善き畫なりとして見るものあらん。

音樂は耳を喜ばすべき美術なり。その歌ひ若しくは彈かんとする處の思想。いかに優美高尙なりとも。その節その手これに伴なはずして拙なき時は。誰かは善き音樂なりとして聞くものあらん。

されば繪畫に貴ぶべきは筆づかひなり。音樂に貴ぶべきは音の出しかたなり。これと同じく。歌の思想を傳へんとするに。最も貴ぶべき要具たるものは言葉なり言はんとする處いかに高尙なりとも。歌はんとする處いかに幽玄なりとも。言葉づかひの拙なからんには。如何でか眞のよき歌なりとは稱へらるべき。「花さかば告げんと言ひし山里の。使は來たり馬に鞍置け」と言ひてこそ歌なれ。「權兵衛から花が咲いたと言うて來た向ふの車夫を呼んでくんねい」などよみたらん日には三文の直打もあるべからず。

故に言葉を撰擇して用ふべき必要おこる。左に注意すべき點を示さん。

一には。なるべく上品なる言葉を用ひて。俗語を避くるやうにせよ。

前章にいへる「なんぞいな」「餅もくひたし」などの如きを俗語といふ。「氷が張つて寒い」といはずに。「氷むすびて寒けかりけり。」「雨に着物をびしよぬれにした」といはずに。「雨に袂をぬらしけるかな」といふべしと言ふなり。

人の顔を「つら」といひ。腰かくる事を「尻かくる」といふなどは。古は品よき言葉なりしかども。今は下品になりたるなれば。古言なりとて學ぶべからず。

二には。音調に氣を附けて。音便、拗音、人音、ぱぴぷぺぽの音、詰音の類を。なるべく避けよ。

音便とは。「花さきて」を「花さいて」といひ。「風さむく吹く」を「風さむう吹く」といふ類をいふ。古歌にも。

今も猶ゆきて見てしが桃の花
　さくや深谷の水のみなかみ（千蔭）

空遠くあがりもゆくか夕雲雀
　野澤の水に影のかすめる（春海）

とこそよみたれ。「ゆいて」「遠う」とはよみてあらず。

拗音とは。「きや」「しや」「ちや」「ひや」「みや」「りや」「きゆ」「しゆ」「ちゆ」「ひゆ」「みゆ」「りゆ」「きよ」「しよ」「ちよ」「ひよ」「みよ」「りよ」および「くわ」の音をいふ。「きやく（客）の訪ひ來て」は。「人の訪ひ來て」と直さるべく。「しゆぬり（朱塗）の鳥居」は。「あけの鳥居」とも直さるべく。「くわし（菓物）は。「くだもの」ともせらるべければ。避くるをよしとす。されど。「さゝんくわの花」「きしや（滊車）の煙」「ひやくはち（百八）の鐘」などは。直しても面白かるまじければ。前後のつゞけがらにて。優によみ入れんもよかるべし。

人音は。固有の國語なる「む」音より轉じ來れる。「花やさくらん」「雪のふりけん」などの類のを意味するにあらず。漢語洋語または俗語より出でたるものを指すなり。たとへば。「寶劍」「喧嘩」「ラムプ」「ポンプ」「あんた」「知らん」など言葉を、出來得べくは避けよと言ふなり。漢語洋語の事は次の章にいふべし。漢語洋語を撰擇する時に。「ん」音を一つの條件に加ふべきを忘るべからず。但し。「すゐせんの花」「だんの浦波」など。よみ入れて優美に聞ゆべきは此限にあらず。

ぱぴぷぺぽの音は。「喇叭」「麵包」「ピン」「鉛筆」「軍服」「パップ」「ペン」「ハンペン」「散歩」の類なり。これも外國語を撰擇する時の條件に加へおくべし。但し。これも「らつぱの響」「巴里の都」など。優によみなさるゝ

時は此限にあらず。
詰音は「てッぱう」「しッぺい」「りッしん」「はッぴ」などの類をいふ。これも避けらるゝ丈は避くるをよしとす。「戰つて」「おッて(追手)がかゝる」などいはずに。「たゝかひて」「おひてがかゝる」といふべきなり。
三には漢語風の言葉をなるべく避けよ。「ゑんさん」といはずに「そちこち」といひ「さうもく」といはずに「くさき」といひ「はくせつ」といはずに「しらゆき」といふべし。されど。特別に。

　　住の江の入江の月や故郷の
　　　枯蘇城外の秋 の 面影

などよみ、又は謠曲に「馬嵬が原」「明州の津」「邯鄲の里」などいへる如く。つゞけかた優にいひたるたぐひは別問題なり。すべて外國語を用ひんとするには。まづ他の言葉と調和するかせぬかを考ふべきなり。
四には洋語に注意せよ。
麵包やビールやコスメチックは先づ歌によむ必要なかるべけれど。草木鳥獸の名や地名などは隨分入用なるべし。草にはローズありヴワイオレットありピンクありパンジーあり。鳥にカナリヤあり獸にカンガルーあり。されどローズは薔薇。ヴワイオレットは菫。ピンクは撫子。パンジーは胡蝶花と。わが言葉もしくは譯語もていはるべきは。聞きなれたらん方に言はんこそ優美なれ。カナリヤの如きは譯語なければ。既にカナリヤと誰も言ひなれて。外國語とも思はれぬほど親しくなりたれば、それにて差支あらず。かのローズ、ピンクの如きも。おひ〳〵世間一般に呼び馴れて。却りて左樣にいはん方が。菊や蝶の如く通用する時代とならば論外なり。今はいまだ其時期に至らず。

○書籍は最良の朋友にして且最良の顧問なり　（一記者）
○書籍を愛する人は誠實なる朋友、有益なる顧問、愉快なる賑伴を決して欠かさるべし　（パーロー）
○人は讀書に由りて年代を遡り古人と時を同ふするを得るなり　（コリア）
○室に書籍なきは體に精神なきが如し　（シセロ）
○學問は整理したる知識なり　（スペンサー）
○文學の大洋は際涯なし　（ロシフーコー）

作文につきて（承前）

文學士 武島又次郎

作文につきて作家



悟入といふことはやさしくいへばよく文章を味ふことです。われ〳〵が料理をたべてその甘いからいを味ふ如くに文章を讀んで一字一句なるほど〳〵よく嚙みわけて味ふことが則悟入といふことであるのです。

われ〳〵が料理をたべてもたゞ頰張つて嚙んで咽喉へ通しただけでは決してその料理を味うたといふことは出來ぬ。かやうな食べ方では何遍たべても自分が調味の伎倆に何等の助をも得るものではありませぬ。しかしそれに反してこの味は醬油と味淋と何と何とでかやうにうまくなつてをるのである。なるほどかやうな料理法を用るればうまくなるものであるとかういふ工合に食べ物を味ふたならば一々それが自分の力になつてきてみづから料理を行ふ時に多大の助を得ることが出來るやうになつてくるのであります。

文章を味ふのもちやうどこれと寸分も違ひませぬ。人の名文佳篇をよむ時には常にこの悟入的の態度、言ひかへれば探究的態度をとつてをらねばなりませぬ。かういふ比譬があればこそこゝがうまいのである。かういふ言語の順序が用ひてあればこそこゝが引き立つてをるのであるといふやうに一々文章中の作者苦心のところ〳〵を觀破してこれを味はねばなりませぬ。かやうにして始めて自分が文章を作る時にそれが役に立つてさてそれを應用しておもしろいうまい作をてかすことが出來るやうになるのです。

しからばいかにしてこの悟入といふこと則人の文章の佳處を味ふ力を養ふことが出來るか。初學のものにはとても出來ることではないではあるまいかといふ疑が起つてくる。

これはまことに尤なことです。文章の才あり、經

驗のある者こそかやうに味ふことは出來ますけれども文章を作り始の者がとても人の文章を十分味ふことの出來ぬといふのは無理のないことがらです。丁度料理をしたことのない者が御馳走をたべてたゞちにその御馳走のうまみがいかにして調味せられてあるかを解釋することの出來ないのと同じわけです。

しからば料理をしない者はいつまでたつても食物をかみわけることが出來ないかといふと決してさうてはありませぬ。いかに料理を手にかけない者でもしば〳〵御馳走をたべると經驗によりて遂にその味を十分さとるやうになるものである。しかし、これは甚だ長い年月を要するのてす。決してちよつとした間にはあはぬ。しかるにこゝに便利な事には一方に料理法を說いた書物がある。食道樂とか。十二ヶ月料理法とかいふやうな書物がある。これにしたがへば、わづかの間に、調味の方法をさとり、したがつて御馳走をたべてたゞちによくこれを味ふことが出來るやうになるのです。されば今日料理の智識をもたんとするものはまづこの料理法を說いた書物を見てそれからその道に入らないのはうそであります。

文章の悟入につきてもまたこれと同じ道理がいはれます。文章を味はうとする者はまづそれと同時に、否それより以前に、文章を味ふ方法を說いたもの、則料理における料理教科書の如きものをよまなければならない。則文章法とか作文法とかにつきてひととほり智識をもつてをらねばなりませぬ。無論文章法作文法などの書をよまずとも永年の間文章に目をとうしてをれば自然と文章を味ふ力はついてくるのですけれどもそれでは料理の場合と同じくちよつとの間にあはぬ。早く文章を見る目を發達させるのにはどうしてもあらかじめこの文章法作文法をよまなければなりませぬ。

さて、しかしながら文章法作文法のよい書物は今まてのところではあまり世間に多く出てをりませぬ。で、こゝに二つ參考としてかゝげてをきます。一つは私の著した

文章綱要

といふ書物です。みずからの書物を紹介するのは甚だをこがましい次第ですけれども、文章といふことにつきて簡易におちなく說明し得たと思ふこともありますし、また他に良書がありませぬから止むを得ずしるしたのです。二には

荻野由之著　作文法

といふ書物であります。これも平易に書いてあつて、參考にならうと思ひます。

さて第三にお話すべきことは

多作

といふことであります。前の讀書や悟入やで折角得たはたらきもこの多作といふことをしなければ何の役にもたちませぬ。たゞ注意しておくことは多作といふのはたゞむやみにまづい文章を澤山つくることをいふのではなくて、苦心をし工夫を用ゐて、自分の力で出來るだけ多くの文章を作ることをいふのであります。されば濫作と多作との間には斷然たる區別のあることを忘れてはなりませぬ。

しかし始の內は文章をしば〳〵作るといふことはなかなかむづかしく實行の出來ないことです。今日一つ作らうと思つても好い思想がうかんでこないと、つい明日に延ばす、明日になつてもまだ好い考が出てこぬとまたその次に延ばすといふやうになつて遂には一ケ月に一篇の文章も出來ないといふやうになるものです。

けれどもこれは習慣で、作る癖をつけさへすれば作るとは決してむづかしくない。日に一行でも二行でもよいから、とにかく筆を執つて文章をかくことをして御覽なさい。これには日記をつけるのが一番よい。その日〳〵の出來事をしるすのは別に頭をしぼる必要もないのであるから決してむづかしいことではありませぬ。さうして必ず日に筆を執らなければならぬといふ癖をつけると、遂にそれが習慣になつて文章をかゝねと何だか物足りないやうな心もちになるもので

す。これが實に多作の緒口であつて、さうなつてくると、見聞したことがらにつきて文章をつくることが何の造作もなく、甚だ愉快になつてくるものであります。

皆川淇園は江戸時代の大儒でありますが、かつて詩を作ることについて次のやうな話をしてをります、詩を作るのも文章を作るのも作る道は同じでありますから、左に原文をそのまゝかかげて見ましやう。

余性遲鈍詩思甚困。因嘗學捷作。數月始得其法。蓋始先作七言絶。毎首限以線香一寸。初作之甚難而有二或殆不レ能レ成レ語者一。然强作レ之漸久熟。乃復換以二五言律。既復換以七言律。亦初皆不レ能レ成レ語。及二稍熟一則必至二從容有一レ餘思一。而雖二走レ筆疾書一。間復出二佳語。一

これは實際このとほりでありませう。

このほか作文につきてお話することは澤山ありますが今こゝでつくすことは出來ませぬから、又をりを見て時々この誌上でのべることにいたしましやう。（完）

國文評釋

文學士　中内蝶二

竹取物語（五）

○龍の首の珠の條（續）

大納言、南海の濱に吹きよせられたるにやあらむと思ひて、いきづき臥したまへり。船にあるをのこども、國に告げたれば、國のつかさ、まうでとぶらふにも、えおきあがり給はで、船ぞこに臥したまへり。

（釋義）大納言云々　大納言は楫取が、よき方の風なりといひしを疑ひたまへるが故に、今船の明石の濱に着きたるを見て、こは乾度南海へ吹きよせられて來しならむと思ひて、ため息をつきて、船中に臥したまへりとなり○船にあるをのこども　船中に在る舍人等をいふ○國に告げたれば云々　大納言の船漂着の由を、播磨の國守に告げたれば、國守は早速訪ひ來りしかど、大納言は、南海の濱に吹き寄

せられたること丶思へるが故に、悲しさのあまり、起き上る勇氣もなくて、船底に臥したまへりとなり。

松原に御筵しきて、おろし奉る。その時にぞ南海にあらざりけりと思ひて、からうじて起きあがりたまへるを見れば、風いとおもき人にて、腹いとふくれ、こなた、かなたの目には、すもゝを二つ附けたるやうなり。これを見たてまつりてぞ、國の司もほゝゑみたる。

《釋義》松原にて云々　明石の濱の松原に筵をしきて、船より大納言をおろし奉るとなり○其時にぞ云々　其時はじめて、大納言は、南海にあらざることを知りて、やう〳〵の事に起きあがりたまへる容姿を見ればとなり○風いとおもき人にて　風邪ひきたまふ毎に、重くなやみたまふ人といふ意○こなたかなたの目　兩方の目といふことなり○すもゝを二つ云々　目の縁に、李を二つ、つけたるやうなりといふ意○これを見奉りて云々　この有樣を見て、國司もおかしさに堪へず、にこ〳〵と打ち笑みたりとなり。

國に仰せたまひて、たごしつくらせ給ひて、によふ〳〵になはれて、家に入りたまひぬるを、いかでか聞きけむ、つかはしゝをのこども、まゐりて申すやう、龍の首の玉を、えとらざりしかばなむ、殿へもえまゐらざりし。玉のとりがたかりしことを知りたまへればなむ、かむだうあらじとて、まゐりつると申す。

《釋義》國に仰せたまひて　播磨の國に仰せつけられてとなり○たごし　乘物の名にて、肩にのせずして、腰の邊にて舁く輿のことなり○によふ〳〵になはれて云々　うなりながら、輿に荷はれてとなり○いかでか聞きけむ　大納言のひそかに歸り着きたるを、如何にして聞きつけゝむとなり○つかはしゝをのこども　大納言が玉を取りに遣はしたる男どもなり○まゐりて申すやう　大納言の許へ參上して申すやうといふ意○龍の首の玉を云々　以下まゐりつる迄は、男どもの言葉にて、御命令の如く龍の首の玉を取りに出てたれども、取り難くて、命を果すこと能はざりし故、今迄は參上せざりしが、

大納言殿も、御自身海上に出でられて、玉の取りがたき事を知りたまひし故、もはや、御叱りもあるまじと思ひて、只今參上したりとなり。かむだうは、勘當のことにて、叱を被ること、後には、主君または父母の、臣子を放逐することに用ひられたり。

大納言、おき出でゝのたまはく、汝等よくもてこずなりぬ。龍は鳴雷のるゐにてこそありけれ。それが玉をとらむとて、そこらの人々の害せられなむとしけり。まして、龍をとらへたらましかば、また、こともなく、我は害せられなまし。よくとらへずなりにけり。かぐや姫てふ、大盜人のやつが、人を殺さむとするなりけり。家のあたりだに、今はとほらじ。そのこどもゝ、なありきそとて、家にすこし殘りたりける物どもは、龍の玉とらぬものどもにたびつ。

〔釋義〕汝等云々　以下をのこどもゝ、なありきそまでは、大納言の言葉にて、よくもてこずなりぬとは、よくこそ龍の首の玉を、取りて持ち歸らざりしとなり○龍は鳴神の云云　龍の怒りに觸れて、はげしき雷鳴に逢ひたる故、かく云へるなり○それが玉を云々　その龍の玉を取らむとして、數多の人々の命をそこなはむとしたりとの意にて、そこらは、こゝらに同じく、數多くの義なり○まして龍を云々　龍の玉を取らむとしてさへ、數多の人々の命をそこなはむとせしに、まして、龍を捕へたりしならむには、屹度われは、其恨みにて殺されしならむ。よくこそ捕へざりしと賞めたまふなり○かぐや姫てふ云々　てふとは、といふといふ義にて、大盜人のやつとは、人をいたく惡みて云ふ言葉なり○人を殺さむとするなりけり　人を殺さむがために、龍の首の玉を取りて來よと云ひしに違ひなしとなり○家のあたりだに云々　赫映姫は、惡むべく、また恐るべきやつなれば、我は其家の邊をも通行すまじとなり○なありきそ　あるくなかれの義にて、赫映姫の家の邊をあるくなかれとなり○たびつ　賜ひつといふに同じ。

これを聞きて、はなれたまひしもとのうへは、腹をき

りて笑ひたまふ。絲をふかせて作りし屋は、とびからすの巣に、みなくひもていにけり。

(釋義)はなれたまひし云々　赫映姫を入れむがためとて、大納言に離縁せられし、もとの妻だちは、この失敗の談を聞きて、腹をかゝへて笑ひたまふとなり○絲をふかせて云々　赫映姫を住ませむために、色絲を屋根にふかせて作りし御殿は、鳶や鴉が、巣をつくらむとて、くはへて持ち行きしとなり。

世界の人のいひけるは、大伴の大納言は、龍の首の玉や取りておはしたる。いなさもあらず。御まなこ二つに、すもゝのやうなる玉をぞ添へていましたると、いひければ、あなたへがたといひけるよりぞ、世にあはぬことをば、あなたへがたとは、いひはじめける。

(釋義)世界の人の云々　世間の人々、大納言の歸れるよしを聞きて、其家人に向ひて、大伴の大納言は、龍の首の玉を取りて歸られしかと問ひけるなり。いなさもあらず以下、いましたるまでは、家人の答にて、否然らずとの義○いましたる　歸りたまへりとの義○あなたへがた　これは、世間の人々が、可笑しさに堪へずして、發したる言葉にて、あなとは、あゝ、あら、などいふ義。たへがたとは、可笑しさに堪へがたしとの義なり。これは、たへがた(堪へがた)と、たへがた(喰べがた)との二つの意味にかけて、まことの李ならば喰べらるべきも、目の縁につきたる李は、たべがたしとの意を、面白く含ませたるなり○世にあはぬ事　世の中の道理に合はぬ無理といふ義なり。

(總評)赫映姫は絶世の美人なり、これが色香に心を奪はれて、云ひ寄る公貴の方々多かりし中に、わけても執心深かりしは、石作皇子、車持皇子、阿倍右大臣、大伴大納言、石上中納言の五人なりき。姬は、人々の切なる心を、あはれと思はぬにはあらねど、身はこれ月宮の仙女、下界の人と縁を結ぶべきにあらねば、その意に從ふべくもあらず、さらばとて、うちつけに拒む時は、年頃養育の恩深き、竹取の翁夫婦に、禍のかゝらむことを恐れ、五人の求婚者に

難題を出だし、いづれも得がたき寶のみを求めたり。これ姫が心中、彼等到底其寶の得がたきを知りて、斷念するならむと思ひたればなり。憐れむべき哉、戀に目も心もくらみたる五人の痴漢、いづれも其處に心づかず、其得がたき寶を求めむとて、大なる失敗と、滑稽とを演じたり。前號より續きたる、龍の首の玉の一條は、これ大伴大納言が失敗の記事にて、竹取物語全篇の中、尤も妙味に富みたるところ、簡潔の筆、巧に滑稽の趣を交へて、一言一句、悉く前後照應し、波瀾あり、曲折あり、頓挫あり、熟讀玩索するに隨つて、妙味愈よ加はるを覺ゆべし。一句一節に就きて、詳しく評論を加ふべき愚考なりしも、紙面に餘白なくして、其意に任せざるを遺憾とす。

（竹取物語完）

月香（三號の續）

文學士　久保天隨

かの惡婆は、腹心の者に命じて、所用あれば、早く張牙婆を呼び來れといひ、やがて來りければ、先づそれとなく、月香と腰元とを見せしめ、さて竊かに說き出でけるは、六年の前、この二人を購ひ求めしなるが今我が家に置かむ用もあらねば、汝別に主を尋ねて得させよかしといひける。元來、當時官賣の事は、李牙婆といふ者の手を經しなるが、さき頃すでに歿しければ、官私の事は、すべて、この張牙婆が扱ひけるなり張牙婆、しばし思案の體なりしが、かの年若き方には、好き主人あれど、許されまじきや、そは本縣の大尹、姓は鍾離、名は義といひ、もと壽春の人にておはすか、一人の姫君あり、德安縣高大尹の若殿に配せらるべき筈にして、支度など、殘る方なく整へども、たゞ付添の腰元一人、思はしきがなきよしにて、昨日、大尹、

妾を召して、懇に仰せ付けられしが、さし當、これぞといふべきものなきが、かの娘こそ適當なれ、たゞ知らぬ旅路を放ちやるを、世にも情なく覺ぼさむかといふ。買婆心におもひけるは、かばかり遠き方なるは、願うてもなき幸なれ、ことに知縣相公の御用にて召し連れられしといへば、我が夫も、奈何ともし難かるべく、又彼の身に取りても、行く末、幸なることなるべし。我、いかで、之を放ち遣らざらむや。たゞ原の價を撥せざれば、その外は望なしとて、張牙婆は向つていひけるは、彼は十いくつといひしとき、身代五十兩なりしが、その後の飯錢など如何にすべきといへば、そは一々算用もならねど、五十兩といへば、この婆が屹度引き受け申すべしといふ。買婆重ねて、今一人の腰元も、何處か宜しき處なきか。もと二人同じく來りしものなれば、一人になりては、家に置かむこと、猶ほ更用なし。ことに、二十を越して、婿取りすべき身を留め置きて、何がせむといへば、張牙婆は、その身代を問ひ、三十兩なりといふに、こは品も宜しからねば、さばかり高くは出し得ず。半に減ぜられては如何に。實を申せば、この婆に、一人の甥あるが、三十歳となり、かねてより、女房一人世話して取らせむとおもひ居りしが、帶には短く、襷には長し、これぞとおもふものなくて、今まで過ぎしなるが、かの腰元とは、まことに一對の善き夫婦、こゝ御相談ものなりといふ。買婆、もし汝の甥の妻とするならば、五兩ばかりを引くべしといふを、張牙婆は、婚儀といふからには、彼是費も多ければ、何卒十兩引かるべしといひ、遂に買婆を納得せしめ、さて云ふやう、今より還りて、知縣相公に委細を申し上げ、若し相談まとまらば、身の代と代物とを引替にすべく、他の方は、甥とも談合せし上、いづれ、明日は早く罷り出でむと、言ひ棄てゝぞ立り去りける。

こゝに大尹鍾離義といふもの、一年三個月の前、任に上りしなるが、その前任の馬公といふは、かの石大尹の跡に坐りしなりける。この鍾離大尹と德安の高大尹とは、もと同郷の出身なり。高大尹に二子あり、長を

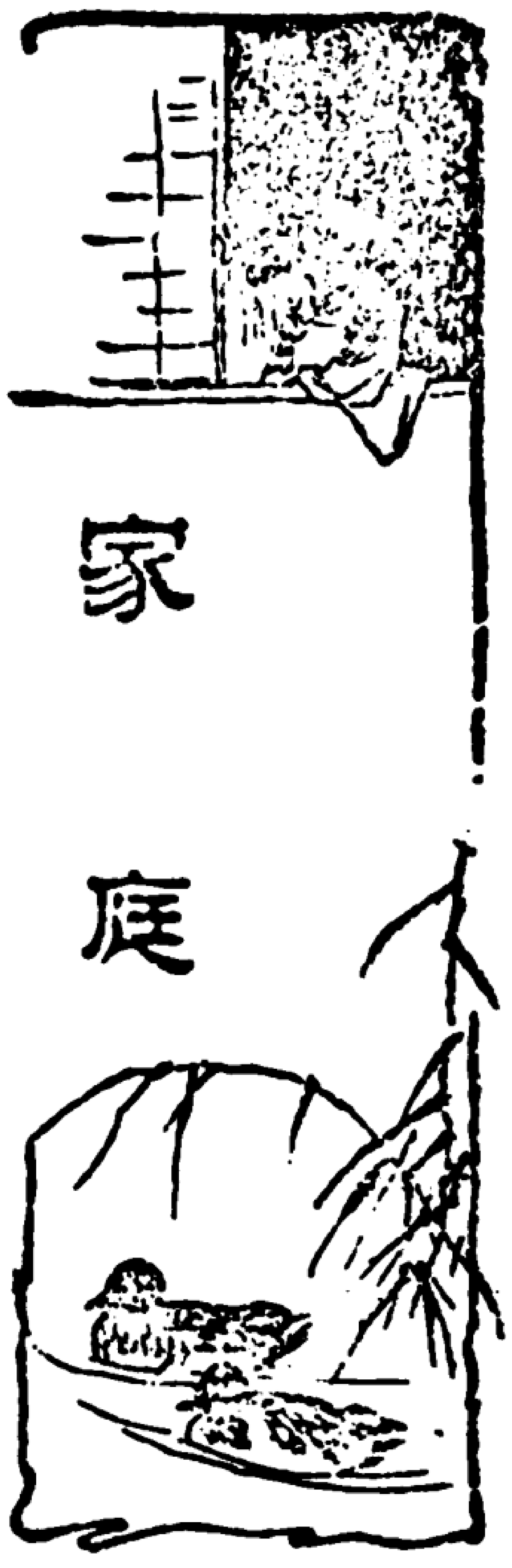
高登といひ、年十八、次を高升といひ、年十六、この高登こそ、鍾離公の婿と定まりしものなれ。鍾離公は、外に子とてはなく、娘たゞ一人、小字を瑞枝といひ、年は十七の花盛、ことし十月望の日を選びて、大禮を行ふことに定めけるが、折しも、九月の下旬にして、剩す日數、いくばくもなければ、張牙婆に仰せて、付添の腰元を尋ねさせられける。かくて、張牙婆は、賈家より出でゝ、事の由を大尹に申しけるに、かくの如き人物ならば、五十兩とて、少しも高しといふには非ず、明日來りて身代の金を受取り、夕ぐれには、引き連れて來る樣、取り計ふへしとのことなり。張牙婆、謹んで、御受をなし、その夜、家に歸るや、甥なる趙二郎を呼び、ふさはしき花嫁あれば、少しの事は我慢して、早く身を堅めよといふに、何條否むべき、うれしさの餘りには、未だ飲まざるに早くも酒の香に醉ふ心地して、夢も嬉しく一夜を過ごしゝなるらし。かくて、次の朝といふに、趙二は、晴の衣裳を着かざり、花婿の仔細らしく、さすが見よげになりにける。この間、張牙婆は、二十兩の金子を用意し、又縣に至れば、知縣相公より手形を賜はり、その役の人より、五十兩の金を引き替へさせ、二人の身代、合せて七十兩を賈家に屆けるに、賈婆は、之を受取りて、したり顏して居たりける。しばらくして、縣より差遣はされしとて、二人の部下、二人の轎夫は、一つの小さき轎を釣らして、賈家の門に停まりしが、賈婆は、はじめより、少しも事の由を告げ知らせず、月香は、さかしくも、それと覺り、とても逃れぬことゝ思ひ諦めて、言ふがまゝに、轎には打ち乘りしものから、何處に行くとも知らざれば、さま〳〵に思ひ惱みて、腰元と二人、天に叫び、地に叫び、聲を放つて大に歎きしも、理せめて哀れなり。賈婆は、委細かまはず、無理無體に、門より押し出しけるに、張牙婆は、はじめて事の次第を說き出でて、慰め顏に、娘御、さのみな歎き玉ひそ、汝の家の主婦の計ひとして、本縣の知縣相公に汝の身を賣りしなるが、姬上の腰元となるなれば、前にも增して、幸多きことと言ふまでもなし。唯だ官府の事なれば、いか

に泣き悲むとも益なかるべしといふに、月香今は是非なく、涙を收めて、轎に乗り、程なく、知縣の後堂に舁きこまれ、やがて鍾離義に對面して萬福を述べけるに、張牙婆、傍に在りて、これこそ主人の殿にておはすなれば、禮をなさてはといふに、頭を低れて禮を濟ませしものから、身を起すとき、涙の珠は、玉の顆より滴りて、さながら海棠の雨に惱める風情、いといぢらし。張牙婆は、その涙を押し拭はしめ、こたびは、屋敷に連れ行き、こゝに、夫人と瑞枝とに引き合はされ、その名を問はれしまゝに、やむなく月香と呼び候ふといへば、夫人は、そは好き名なれば、改むにも及ばじとて、それより、姫上にかしづくことに定められ、鍾離公は、張牙婆の功を賞して、かづけ物、あまた賜はりしとかや。

可憐官宦嬌兒女、　權作閨中使令人、

張牙婆の縣衙を出でしは、早や酉の刻近き程なりしが取つて返して、再び賈家に行きて見れば、かの腰元は、厨に在りて、いたく歎き悲む態にして、賈婆は、之を嗾し、今より、張媽々の甥なる人に汝を配はせむとおもふが、月香に較ぶれば、はるかに勝れりといはむ、いかで、悲むことのあるべきぞといふに、張牙婆も、さま〴〵に言ひ慰め、漸く納得させける。この日趙二は、混堂に行きて、あくまで心をこめて磨き立て、何やらむ、きら〴〵しき衣をまとひ、一つの燈籠をつるして、用意おさ〳〵怠なし。張牙婆は、もとよりかくあるべしと知れば、腰元をせき立てゝ、賈婆に暇乞をなさしめ、大きなる脚の賤しき素生のものなるが、仔細らしくも、張牙婆に扶けられ、歩む足さへ、たとたどしく、やがて其家に至り、甥なる若者と祝言をなせしとかや。こゝに、月香は、定まる天運の是非もなく其日より、相公衙内の人となりしが、次の日、夫人より中堂の掃除を命ぜられしかば、取り敢へず、箒を携へて、其處に行きたりける。

記者曰く本篇は今號にて終結する筈なりしが紙面の都合に依り次號にて完結を告ぐる事とせり、讀者請ふ諒せよ



理想の家庭（三號の續）

池田朝村

四　結婚前の用意

前々號に於きまして、家庭搆成の目的迄申述べ置きましたが、今度は結婚前の用意を申し上げましよう。前にも述べました通り、夫婦は一種の親友でありまして、殊に同性の親友と違ひ、終世相別るゝとの出來ないものでありますから、其相合ふ前に、充分の用意が必要であります。同性の親友でも、其親友たるべき交際を結ぶに先つて、相互に、充分其性行を悉知する必要があります。況んや、夫婦の關係を結ぶに於てをやです。同性の親友なら、一時の感情上、又は事情の止むを得ざる爲に、相別るゝ樣なとが有ても、格別兩者の將來に大不幸を招くと云ふとはありませんが、兩性の親友即ち夫婦が相別れねばならん場合になりましては、兩者の將來に非常なる不幸を招きます。殊に我國の習慣上、女性は大なる苦痛を嘗めねばなりません、子供でも有た場合には、罪なき小兒に迄、其苦痛を分たねばなりません、同性の親友なら、共棲するとはあまり有りませんが、異性の親友は一生同棲せねばなりません諺にも、夜目遠目とか申しまして、遠くに離れて見て居るときは、餘り陥缺も目に付きませんが、近く一所に棲で見ますと、案外に陥缺の多いのに驚くものであります。でありますから、人が夫婦たる關係を結ぶに先つては、非常に愼重なる態度を執て、互に其性行を探究し、其主義及び理想に於て、將來共に接し苦樂を共にするとを得るに適して居るかどうかを確めねばなりません、世間には、隨分、外見よりしますと、誠に立派で、何の不自由もなく、家内は常に溫かく麗らかなる春の景色を寫し出して居る樣に見えて居乍ら、一度内部を窺ふと、腐敗亂倫の空氣を以て滿たされ、木枯寒き冬の景色を演じ出して居るのが少なくないのであります。眼に一丁字なき下等社會―と申しては少し語弊が有るかも知れませんが―、兎に角、教育もなく理想の何物たるかをも解して居らん者の家庭ならまだしもですが、相當の資産を有し、高等の教育を受け理

想の何物たるかをも解し居る者―或は解して居らんのかも知れませんが―の家庭で有り乍ら、其日暮しの、わびしい生活をして居るもの丶それに劣る樣な、家庭を持て居ると言ふとは、實に情無い限りではありませんか。

近頃の時代思想として、人々は何ふやら、金錢萬能主義を、家庭構成の上に迄適用して居る樣で有ります。男は男で、金さへ有れば、如何なる女をも娶るとが出來、圓滿なる家庭を搆成するとが出來る樣に心得。女は女で、金の有る處、收入の多き處へさへ緣付けば、如何なる幸福、如何なる自由をも得られる樣に心得て居ります。けれども、家庭の安慰、愉樂は、金錢で購ひ得られる程價の低いものではありません。兩性天賦の愛の眞淸水は、金錢の價値に比ぶると、餘りに高過ぎます。家庭を單に、肉躰的慾望、世間的榮譽を滿たすの具とするならば、それは金錢でも得られましよう併し、全世界に有りと有らゆる財貨寶物の、その最後の一片を盡しても、兩性相愛の間に生ずる無上の愉樂は購はれません。



最近東京女學生風俗(其四)

家庭搆成の目的が、唯自己の肉感的快樂、世間的榮譽を滿すにあると言ふならば、金錢萬能主義を結婚に適用するとは、正當でしよう。併し、私が第二項に說た所のものが眞理で有るならば、前者は絕對的に誤謬です。

隙間漏る風寒きはにふの小屋の障子の破目より、夫婦親子團欒して、燈を圍んで樂しげに夕の饍に向ふ有樣を見たときの吾等の感情は如何でしよう、此麗はしき、詩趣に富みたる、小さき春の活畵圖を見て、一種の美感、一種の快感。

覺えざるものは、人の情を知らぬ愍むべき輩です。是を、身金殿玉樓の中に住み乍ら、夫婦相妬み親子相反目する家庭に比べて如何でしよう。膳に鮮魚なく、出づるに輿なくとも、家庭團欒の樂は、能く、是等の不足を補ふて、猶多大の慰籍を餘すに足るのであります。

家庭の圓滿は、實に夫婦相愛の結果で有ります。夫婦の相愛は實に兩性相知の結果で有ります。決して黄金財貨の能くする所のものではありません。人若し婚を結ばんとするならば、豫め兩性互に相知るべき充分の用意が必要であります。

五　結婚後に於ける夫婦間の交際。

前條に申上げましたとは、甚だ餘事に渉りました樣でしたが、是が理想的家庭を構成する根底となるべきものでありますから、決して輕々に付すべきものでありません。土臺の定まらない上に建た家は長持もないと同じく、目的も用意もなく、突然に作つた家庭が、何で圓く治まるべき筈がありませう？。

偖今度は愈々、兩性一意氣相投合したる一が相寄て一家を構成した上て、如何にして兩者の間の交際を圓滿に保つべきかと言ふ、私の理想を述べましよう。

是を御話し申すに先つて、夫婦間即ち家庭の圓滿に治まらない原因を略說致しましよう。そして、其弊を指摘した上て、如何にしたら、夫婦間の交際を完全に保つヿが出來るかと言ふ私の意見に說き及ぼしましよう。

一家が不和合になる原因に、大略六種あります。

一兩者の意志相通ぜず、相互に猜疑を以て對するヿ。

二夫は妻を奴隷の如く心得、何等の自由、何等の快樂をも與へざるヿ。

三兩者互に相讓らず常に衝突堪えざるヿ。

四女子が、結婚を利用して、己れの世間的慾望を滿足せんとし、若し能はざれば、其不平を夫に對して暴露するヿ。

五家計の不如意を、妻が夫の責に歸して、不滿を抱くヿ。

六兩者の間餘り無遠慮に過ぎて、各々其守るべき道を忘却するヿ。

先づ已上の六種て、大體を抱括するヿが出來るだろうと思ひます。此他にも精密に分解したら、種々の原因は有るてしようが、重なるものは前の六種だろうと思ひます。

第一のものは、兩者互に融和しないで、夫は妻を嫌ひ妻は夫を嫌ふ處から、夫は妻に對して何事も打明けず妻も夫に對して何事も打ち明けず、兩者互に猜疑し合ふて、遂に、兩者感情の不融和は、岩の如く動かすべからざるものとなり、氷の如く冷かに成て了ふて、樂しかるべく作られた家庭が却て不愉快の源と成て了ひます。斯ふなると、人間と言ふ者は何處かで快を取らねば滿足が出來ませんから遂には夫は花柳の巷に足をを入れ賤妓の一笑に惱殺されて聊か胸中の苦悶を醫し益々妻を冷遇する樣になり妻は夫を益々面白からず思ふて、會ふ人毎に夫の敗德を訴へ、不德を誇張し、或は、不倫の行爲を敢てする樣に成て、一家は慘憺たる悲劇の中に終るのであります。



最近東京女學生風俗(其五)

是は、許嫁とか、或は義理上の關係からして、心にもあらぬ兩性を無理に娶はした家庭によくある奴です。
第二は善く有る例て、夫は妻を無用の長物、又は下女下男同樣に心得、無暗に夫の權利を振り廻はして貴樣は夫の御蔭で生きて居るのだ、默つて己れの言ふとさへ聽いて居れば善いのだなど、勝手な理窟を附けて、一家は己れ一人で經營して居る樣に心得、己れは勝手な眞似をして、妻には何等の自由をも與へない、是では、妻たる者甚だ面白くないから、夫に對して毫も愛情を注がない、從て家庭なるものが、一向無趣味な、殺風景極まる物と成て了ふて、兩者は不愉快な生涯を送らねばならん樣に成ります。
是場合に女か頗る柔順な性質の者て有れば、兎に角無

事に治まりますが、そうでないと頗る面倒です、即ち第三の場合には、夫が無理に妻を自己の勢力圏内に入れ様とすると、妻は、男女同權であるとか、御前一人で一家が立つものぢあないとか、女相應の理窟を振り廻はして夫に反抗する、其結果、貴様の様な女は有りやしない、他家の妻君は皆柔順で善く夫の命令に從ふいや御前の樣な沒曉漢は有りやしない、他家の旦那は皆、妻君を大切にするなど丶、始終夫婦の喧嘩口論が堪えず、終には離別などゝ言ふ、忌まはしい結果に遭遇します。

第四は、是は絶對的に女子が惡いのです。概して女子と言ふ者は、虛飾、高慢、羨望、の性質の强いものでありまして、常に時流を逐ふて人後に落ちざらんとをのみ勉めて居ります。で其虛飾なるものが滿足された時には、得々として、非常なる高慢の情に滿たされますが、倘一朝、自己が時流に後れて居ると言ふとを發見しますと、他に對して非常なる羨望の情を起します、そして猶己れの慾望が滿足されない時には、非常なる不平を起して怏々として樂みません。

品性の劣つた女性は、結婚に依て己れの虛飾高慢を滿足せしめんとします、けれども、人間は決して自己の欲する通りにするとは出來ません、殊に、人間の慾望と言ふものは限りが有りませんて、一つ滿足されるとまた其上の望みが生じます、ですから、常に不平不滿を以て滿たされて、夫が非常なる無能力者であるかの如く考へ、他人の夫は常に其妻の望みを滿すとが出來る樣に見え、夫を蔑視し、夫を無能力視して、其結果は慘憺たる波瀾に終るのであります。

第五は、是も前者と同じく、女子の思慮の淺墓なるによるのでありまして、夫が無事達者で働いて、自由の利く間は、氣儘をして居乍ら、一朝夫が病煩ひをしたり、或は思ひ設けぬ失敗に遭遇して、家計に不如意を起した時こそ、夫を邪魔者扱ひにしたり、或は自ら他に安逸なる家庭を求め樣とする、其結果、其家庭は見るも哀れなる者と成て、一家は忽ちに破壞されて了ひます、此種の女は世間によくある奴で、誠に哀むべき人類已下の人間です、是では丸で女子が自ら男子の玩弄物と成て居て、女性自らの價値を放擲して居るのです、こんな女性を自己の終生の依賴者とした男こそ、實に善い迷惑です。

第六、是はどちらかと言へば、餘り罪のない、其無邪氣なる點に於て、寧ろ愛すべきですが、併し餘り極端

に趨り過ぎますと、夫だか妻だか、其分界線が不明了に成て、互に讓り合ふとを忘れ果て、惡くすると第三の場合と同じ結果を見るとに成ります。併し大底は、もと〳〵惡意から出たとで無いのですから、不幸な結果を見るとなく、丁度夕立の上つた跡の樣に、にこにこ笑ひ乍ら、晩餐の膳に、一つ皿の菜を突き合ふと云ふ、至極御目度い幕で結を付けるのであります。けれども、こんな家庭は、圓滿なる理想的家庭とする價値はありません。

是等は總て、目的もなく、用意もなく、夢中に結婚し、夢中に家庭を作つた結果ではありますが、夫婦交際の不完全が、最も近き原因であります。立派な目的を有し、完全な用意をしても、其方法、即ち夫婦間の交際が不完全では何にもなりません。此男なら夫にしても不足はない、此女ならば妻にして恥かしくないと思ふて一緒に成ても、人間一生の間には何處かに缺點を發見するものです、其缺を互に補ひ合ふて暮してこそ、眞に愉快なる家庭となるのです。目的、用意、方法の完備した家庭こそ、眞に圓滿なる、理想的家庭と稱するとが出來るのです。偖次號に於て如何にしたら、夫婦間の交際が完全に保たるべきかと言ふ、私の理想に及ぼしましよう。（未完）



最近東京女學生風俗（其六）

△女學生の袴

少紘生

○袴と學生。　男女に拘はらず學生の間は袴は欠くべ

からざるものであつて、學生たる體面を保つには是非とも袴は必要である。女學生の勃興に連れ、女學生と云ふ一つの階級も起り、社會から注目せられると共に、女學生の風俗も亦社會の問題の一つとなつた。今後女學生の衣服の方は何云ふ風に改良されて行くか、新しい和洋折衷服が行はれるか、所謂改良服に似たものが用ゐられるか、衣服の點は或は其體裁を變へるであらうが、袴は當分廢るべきものでない、多々益々女學生の間に用ゐられるであらう。

◯海老茶袴の侮辱。今の女學生の間に行はれて居る袴は言ふ迄もなく海老茶袴である、然るに近來、海老茶袴は或る意味に於て甚しく侮辱の材料となつた。誰が發明した語か知られぬが海老茶式部と謂ふ語が普通一般に行はれ、女學生の代名詞として怪むものはない位である。然し善い意味の代名詞なら好いが、海老茶式部と謂へば、淫奔、墮落、生意味と謂ふ事に聞えて新聞の三面種や、川柳の好題目を與へるに過ぎぬ。或る人は海老茶色は、肉感を刺戟する染色だとも云ふが、海老茶袴は由來もあり起源もあり必ずしも不良わけてはない、只一部女學生の墮落が罪を海老茶袴に及ぼしたので、海老茶袴たるもの迷惑も甚しい、近來其等の影響か何うかは知らぬが、紺、海老茶以外の袴を用ゐる學生が多くなつた。勿論大勢は未だ海老茶であるけれど追々袴を新しく調製へる人が、他の染色を用ゐるやうになつたなら、海老茶も亦、衰へる時節があらう。殊に最近、日露戰役の結果として風俗の上にも一進化を現さうとして居るのは爭はれぬ事實で、所謂時世粧の上から、女學生の袴は何う云ふ染色になるのであらうか、豫め講究して置くのも遲くはない。乃ち三越呉服店意匠部の語る處を左に紹介して、聊か諸嬢の參考に供して見やう。

◯全躰の配合。女學生の袴が今後何云ふ染色になるかと云ふ事は、無論注意すべき問題には相違ないが、單に袴だけが進化すると云ふ理由もなく、復、袴だけに就いて考へるべき問題でもなく、女子の服裝全躰に伴つて考へて見ねばならぬ。其れには色彩摸樣の配合と謂ふ事が最も大切で、其れで無くば眞個に時世粧の美を發揮するとは云へない。又衣裳ばかりの配合でなく、其人の容貌、姿勢等と相俟つて、甫めて美しいとか粹とか高尚とか謂ふ事も出來る。面長の人と、圓面の人とは自然、其着衣の模樣、縞柄も似合ふやうに變らなければならぬ、年齢の老幼に依るは無論のこと、

身長の高い人には縦縞の衣料より横縞の衣料が映り良く、身長の低い人に横縞の衣料を着せたら猶不恰好に見えるやうなもので、人々自分の姿に應じて衣服の好尚も違はなければならぬ。無暗に流行を趁ひ新奇を競うて自分の姿に不相應な粧飾を爲るのは其れこそ柄にないと云ふもので、殊に女子は衣服の事に就いて最も深い注意を拂はねばならぬのであるから、同じ平素服一枚を調製るにも、鑑定するだけの用意があつて欲しい。

○半襟。袴の事から半襟に飛ぶのは少し可笑いが、是も衣服全躰の配合の上から云ふと、極めて肝腎なことで、半襟の好みの可否に依つて、其人の衣裳が引立つて見えるのは著しいもので、若し半襟の模樣、色合が不權衡であると、何んなに意匠を凝らした衣服でも全く其美を沒して了うとがある。半襟のやうなものは何うでも可い位に思つて居る婦人も從來は多かつたやうだが、それは甚しい誤見で、意匠の何たるを知らぬ人と云はなければならぬ。婦人の半襟は男子の洋服に於ける飾襟と同じく、衣裳全躰の中でも、殆んど目貫の場所であるのだ。それを忽諸にして置くと云ふのは心ない業で、西洋などでは流行界で最も氣を揉むのは飾襟、是が流行の先を爲すので、男女通じて然うてある、我國の婦人の半襟は西洋婦人の飾襟より更に進歩したもので西洋婦人も半襟ばかりは羨んで居る。未だ意匠が單調で餘り重きを置かれないやうであるけれど追々進歩すべき筈のものである。

○今後の袴。右に言ふやうな次第で婦人服の美も全躰の配合と相俟つて、初めて美を成すのであるから、女學生の袴の如きも一概に何色にせねばならぬと云ふ事は云はれない、言はないのではなく、寧ろ然う云ふ理屈は無いので、却つて銘々思ひ〳〵に自分の容貌、姿勢にも適ひ、又衣服全躰の配合にも似合うべき染色を用ゐたなら、何より宜いので、且又美術的である。一つの學校を代表するとか、一つの職業を代表するとか言ふ場合に、凡ての人が同じ袴を用ゐるのは、流行以外、意匠以外に利害の關係の伴ふのだから、勉ち勝手も言へないけれど、然る制限の無いならば、袴の染色を亦、嚴重に制限する必要は無いと思ふ、寧ろ雷同を避けて、銘々美術的の思考を以て、袴を調製たなら女學生としても、單に女子としても、其方が眞個の時世粧を知る者である。



女流小影

▲大隈伯爵夫人（肖像入）



地高く氣清き目白臺より、川を隔て丶東南に方り、桃色塗りの宏屋幾棟、是ぞ年々幾多の人材を出し、且つ今猶之を養成しつ丶ある早稲田大學である、此大學の表門の直ぐ前に、構地壮大、屋樓高きにあらねども、恰かも古代酋長の住める城砦の如く、鼠色の墻壁頑丈に、御影石の門柱儼として立ち、一見社會に上位を占むる人の家たるを示すもの、即ち伯爵大隈重信氏の居宅である、主人公は素之れ維新の風雲兒、八太郎の名を棄て丶重信に代へてから、屢々廟堂に列して内政外交の重務を執り、一度び誤られて霞ケ關外、不意の爆撃を受けて隻脚を失ひ、今や閑地に就きて、時々論客を相手に抱負を語る、伯の母君は有名なる賢夫人であつた、いま音羽護國寺畔、靜かに松籟の下に眠つて居らる丶けれど、其德風の大なる猶生ける時と同じく一般士女子の欽仰して措かざる所である、而して伯の母君が斯の如き人であつた丈に、伯の家庭は頗る嚴肅なるものである、しかも此嚴肅なる家庭の主宰者として、一切の内事を切つて廻し、のみならず、其夫君が身不自由なるに拘らず、多方面に交際せらる丶を能く助けて、夫君をして敢て不自由なからしむる者は、實に夫人綾子の君の力であるのだ、綾子は東京府士族三枝守富氏の女で嘉永三年其生聲を東都に上げられた、嘉永三年の生れは即ち今年五十八である、夫人は江戸つ子である丈に、其氣象は全く男勝りであるから、夫君の名望を聞いて四方から訪問する、所謂志士論客にも應接して毫も厭ふ所なく、其食に窮して哀を乞ふ者あれば懇ろに世話し、唯一意夫君の名を落さゞらんとに力めらる丶のである、之れもとより故伯爵母堂の感化大なるものありと雖も、抑も亦夫人の天性美なるものなければ、曷んぞ斯の如くなるを得やう、或人が、大隈家は夫人あるを以て萬泰なり、と評されたは蓋し適語である。



塩井雨江先生選

秀逸

○默想錄

三州衣浦灣頭　傘松子

世は外裝に保れて人は內情に亂る、外裝ありて內情掩はれ、內情ありて外裝起る。唇上和親の花は心中仇敵の計を藏し嬋姸窈窕の美は汚行醜德を覆ふに足る。

爛熳叢中荊棘含み、百花園裡毒蛇潛むとかや。春殿錦繡の裡に眠る者、夜半刺客の害刄を夢み、煌々銀燭の間に醉ふもの、明朝鬼債の防術を案ず。外に金時計自用車の旦那あれば、內に質の通に伏して秋冷を泣訴するの夫人あり、巍々たる高門には、朝夕、高利貸先生出入す、應接室の金屏風は、能く臺所の悲風慘雨を庇陰す。馬は玄關に嘶くも、婢僕は給金の渡らざるを喞つ。令孃園中に玉を弄ぶも。書生常に空腹を訴ふ。今日紙上滔々の社說は、昨日舶來の雜誌飜譯にして、院中堂々の演說は、古新聞の論說暗誦とは、驚いたものなり。一圓の月謝にて聞きたる講義、我物顏に自稱先生の著述と名乘り出し、暮夜魔酒に醉うて筋節燦けるも、白晝十字街頭に立てば、慥かに硬骨男兒なり。昔は孝經の本を以て親の頭を打ちたるの狂兒あり、今は法律の書を以て詐欺する正人あり。令閨の破鏡を以て、怨を媒介に酬いるの學者あれば、主公の浮氣を憤り、恚を同僚に訴ふるの後室あり。佛前香を燒くの老僧、膝上竊かに愛妾の齡を屈指し、葬式に經を讀むの禪師、胸中頻りに布施の高を默算す。教會堂中春夢濃かに、聖書卓邊紅露滴る。髮を斷ちて孤節を亡夫に献ずるもの、待合情郎の衝突に狼狽す。白晝深窓に風琴を弄ぶの處女、夜半公園に白鬼と化するの世の中。今夜書を典して吉原に遊び、明朝檄を飛ばして父兄を欺く、兩親郷にあり、愛兒急病の電報に腰を拔かし、子は神田下宿屋にトランプを鬪はして爲替延着を嘆ず。一通の艶書に學資を抛ち、積日責められたる宿料を拂はず。此に低頭平身し、彼に揚々旦那を氣取る。妙な處に義理立つるものかな。店頭巨萬の商品を陣列するもの、數ヶ月棚賃を拂はず。二重三重の抵當に家財商品一物のあるなきも、新聞紙上一ページの大廣告は、田舍華客を安堵せしめ、豆粥麥飯に腹力空しきも、電話何十番の聲高し。屋上の商標は秋風に吹かれ、幾十

の電燈は番頭丁稚の睡顔を照して冷かなり。淺草の寺説密賣淫を營業し、築地の教會堂月下翁を紹介す。我國の少女を裸躰にして寫眞を取り、活ける春畫を鬻ぐの西洋人あれば、戰畧武術の秘書を盜譯して、敵國に賣るの文學士あり。詐欺にして不正の金財を献ずるも、國家は忠良を以て賞褒す。あゝ。

（雨評）其の意は充分に述べ得たれど、ありふれたる評はまぬかれざるべし。且ついかにも下品なるををしむ。

○戰捷の影

麴町區山元町三丁目一番地　高橋つる子

王師西に向つてより、早や二閱年。海に陸に、戰へば必ず勝ち、攻むれば必ず取る。近くは奉天占領の如き戰線五十里に亘つて、其兵數合して八十萬と聞ゆ。以て、その如何に大激戰たりしかを察するに難からず。吾人は幸に、故國に住して、座してこの勝報を耳にす、欣喜雀躍、足の踏むところを知らずと雖も、護國の爲めに倒れ、平和の爲めに仆れし誠忠の戰士を思ふごとに、慄然として酸鼻の感に打たれずんばあらず。更に、家國に愛兒を抱いて萬里遠征の夫を想ひつゝ、ある時は、神明に祈願して、三更夜更くる迄、夫の身邊幸に安かれな、まさきくてあれと禱れるの人、兼て覺悟せし所なりしとは言へ、一旦この悲報を聞く。慟哭置く能はず、髮を抱いて煩悶幾夜、徒に遺兒をいぢらしと思ひて、潛然不覺の涙にくるゝは、人の妻として至情也、必然也。名譽何者！、勳爵何者！、たゞ命あつてこそと、さては沒我となり自棄となるか如きは、決して戰士の遺族に尠なからざるべきを覺ゆ。然して、下層の民に斯くの如き事多しと云ふに至つては、また悲慘の極にあらずや。明日は米買ふ代もあらず、今日も二飯にて濟ましゝ、內職なしたりと雖も、女の瘦腕、幾何の金錢を得らるべき、困憊悲哀交々至るの悲境にあつては、一家を督する妻の心中、また如何なるべき。吾人は、想ふて茲に至る每に、多く言ふ能はず、たゞ滂沱として熱涙の頰に下るを禁ずること能はざる也。要するに、戰爭は髑髏の影也、生命を相屠戮する者也、悲慘なるは言ふを待たず、而して、こゝに甘んじて一死同胞の安寧の犧となり、君に竭し國に報ゆる戰士の情や、誠に悲壯壯烈の極といふべし。あはれ、世の人士よ、吾人は敢て戰勝に抃舞するなとは言はず、萬歲に歡呼するなと言はず、唯だ戰勝に眩し萬歲に醉ふなと言ふ也、提灯行列旗行列に狂奔するなと言ふ也、無益なる事に、貴重なる金錢を徒費するは、決して吾人の本懷ならんや。其れよりは、遺族に慰安を與へ、金錢を惠めよと實に吾人は願つて止まぬものなり。國民後援會ありと雖も、時々新聞紙上に、彼の區は遺族に無禮なり、此の區は出征軍人家族に冷淡なりとの

情けなき記事を見るに至つては、宜しく世人の一考を乞はざるべからず。吾人はまた救濟の道を講ずるは、これ故國に業を取れる人民の義務にあらずやと思ふ。由來我國民は、熱するも早く、冷むるも急なり。願はくば、世人よ、徒らに戰勝の榮燿に醉ふことなく、沈思默考、近くは其の戰捷を齎らしたる所以に泣いて、滿腔の同情を傾け盡さんことを願つて止まざる也。

（兩評）其の意は先づ〳〵述べ得たれど、まだ練熟せざるの評はまぬかれざるべし。

○公德を論ず

兵庫縣　山本利子

人生の快は、我邦家の隆盛を視るより大なるはなく、吾人の恐は、我邦國の衰亡に遭ふより悽なるはなし。正に知る、國を愛し衆人に盡すは、是れ、即ち、人類の快事にして、然れて又、吾人の本文なるを。

人類の快事を求めて、吾人の本分を全うするの道、何れの處に之を求めて、よくこれを得べきか。曰はく、唯、一片の公德心を養ふに外ならず。

色なく聲なく、是、處、是、無、冥々として、捕捉尺量すべからざれとも、其磅礴鬱結する處、一として有形の事物に、發作顯彰せざるなく、其消長の迹、昭々として見るべし。現今公德に關する聲頗る大、或は文に或は演說に、其研鑽積んて殆ど餘蘊なきものの如し、然れども、其の實行たりや、未だ以つて上乘たり、完璧なりと言ふ能はず。或は之を嘲笑し或は之を擯斥して、正義行はれず、唯、私利私慾と是營むの陋風を助長するのみ。其流弊、人事百般に浸漸して、一として嘆息に堪へざるはなし、嗚呼、斯の如くにして、國つひに危からざるを得る乎。

夫人々唯、私利私慾に忙はしく、事に公に盡すの念想乏く、社會の事業は日に非を重ね、元氣益々墮洗して、道義は愈壞敗するに到らんを。今や我國は露國と戰ひ、最後の勝利を占めざる可からざる時に於てをや。若、國民にして特に公益世務に力を盡さざれば、國家の獨立を維持し、吾人の安寧を願ふも能はざるべし。故に、志國家に存するもの、此際一層の注意をなして、潜々公德事業に從事せざるべからず。



○讀書の樂

愛知縣　平野樂華

余つら〳〵思ふに、世の中に樂みといふ樂みは、かず〳〵あれど、其の中にて、ひとときはたちまさりて樂しと覺ゆるは、文よむわざになむある。

彩霞春を傳へて日漸く暖ならむとするとき、かしこの山こゝの野に花をさぐるも、樂みならむ。秋も漸くふけ行きて、野に、山に錦をなせる紅葉をたどりめづるも、なか〳〵に興あるべし。されど、此等は皆一時の樂みにて、いたづらにあたら時日を費して、山を越え川を渡らずては得がたかるべきを、讀書の樂はかゝるわづらひなく、たゞ文机によりて、天下の名所舊跡を見、世界萬國の事を識り、今の世にありて古の事を會得し、我が身愚鈍にして聖賢君子に交り、或は忠臣君子義士貞婦を知るなど、皆讀書の樂みにこそ。人は、すべての事、友を得ざれば、

樂み難し。さるに、讀書のみは、友なくして樂みを得らるゝものぞかし。こゝかしこの花を採り、月をめづるも、心を樂ましむるものなれば、强ひて止むるにはあらざれど、世には往々月花を弄ぶ極、遂に遊びに耽りて、己の本務を怠り、學のわざをつとめず、一生何事もなすことなくして、身を終るに至るものあり、いとなげかはしき事ならずや。讀書の樂は少しもかゝる害なく、時間を空費せず、而も能く智德を磨き、活用自在なるを得るなど、いと〳〵目出たき事ぞかし。あはれ、世の中に心を樂しましむるものは數多あれど、いかで讀書に及ぶべき。かの佛國有名の文學者なるフェネロンが、若し王冠を持ち來りて、余の足下に置き、以て、余の書籍、及び、余の讀書癖と交換せむことを要求するものあらば、余は直に其王冠を蹴棄つるに躊躇せざるべしと云へりしを見ても、如何に讀書の快樂を與へ利益を得せしむる事の大なるかを思ふべきなり。

○女子の務

愛媛縣　加藤初子

男子は外にありて業を勵み、女子は內にありて家を治むるは、人の道なり。凡そ國家の盛衰、人の賢愚は、主として女子の務めを盡すと、盡さざるとに由るは、今更云ふべくもあらず。且つ、古今の歴史を繙けば、能く知り得らるゝところなり。故に女子たる者は、幼き時より、常に和順優美謙遜の念深く、よく父母に仕へて孝養怠らず、同胞互に愛くしむべし。學校に通ひては、能く師の敎に從ひ、よき順序を逐ひて、學術裁縫、其の他女子に必要なる技藝を學びて人となり、他に嫁しては、舅姑に仕ふること、父母に仕ふる如く、夫に對しては貞操にして、同情の心を失はず、常に夫を補佐し、傍ら家事を整理するは勿論、夫をして內顧の憂なからしめ、以て、其の志を遂げしむる樣、務めざるべからず。次て、子女を設けし後は、よく兒童を愛育し、其の他看護經濟は素より、一家和合を全うし、圓滿なる家庭を作り、健全なる第二の國民を養成せざるべからず、且つ、社會に出でては、交際慈善等諸般の事に當り、以て、賢母良妻の任務を全うせざるべからず。されば、能く一國を和合し、延いて國家の利益とはなるなり。女子の責任、豈重くして大ならずや。この重大なる責任を盡さんには、學を修め、德を養ひ、智を研き、業を習ひて、一意專に從ひ、世の風潮に後れざらむことを務むるこそ、げに肝要ならめ。さるを、世の人々の女子のこの務めの大切なるを思はず、女子敎育の如きは大に輕じて、學問は女子に必要ならずと、考ふるものあるは、甚だ歎かはしき至りなり。もし女子に敎育なかりせば、いかで此の重大なる任務を盡すを得む。近來女子の敎育大に進步を來し、且つ其の面目を改め、女子の中にも振うて立つものあるに至りたるは、大に喜ぶべき事といふべし。されど、或は新に僻し、或は舊に泥み、未だ中正適當を得る所の者少なきに似たり。中には學校敎育だに受くれば、以て良妻賢母となるに間違なしと考へ、且つ、卒業證書を以て女子の任務を全うせりと思ふあるは、大なる誤りなり。是れ、即ち、敎育の未だ完全せざるが故なり。はた又如何程敎育を受くればとて、其の學び得し所を實踐躬行せざれば、卒業證書は反古にも等しき物なり。されば、宜しく其の得し所を實踐躬行し、以て、女子の天性を養ひ、よく美しき家庭を作るの功を奏し、內助の任を全うすべきなり。かくてこそ、卒業證書にも一層の光彩をそへ、賢母良妻とはあがめらるべきなれ、殊に日露交戰の今日、御國の稜威を外國に輝かしつゝある益荒武男の、同胞たる我々女子の任務、亦重大なりと云ふべし。如何に戰場に望むを得ずと雖も、大君の爲め國の爲め盡す誠は、などて劣らん。出征の別れにあたり、勇む軍人に家を顧るの慮なからしめ、勇進突擊し、後の世かけて輝く譽れを舉げさしむるこそ、われ〳〵女子の務めにあらずや。或は千里に戰ふ大丈夫の千辛萬苦を思ひ、よく家政を整へ、看護弔慰に心を盡すこそ、時局に際したる婦女子の務めならずや。殊に學術を修め婦德を養ふの好時期を得たる我々は、一般の女子に先んじて、此等の職務を盡すこと、極めて必要なり。否、是れ、敎育ある女子が今日の責任なりと思ふ。勉めずして可ならんや。

○女子の既婚時代

上總　十六夜女史

少女時代に修養したる事を應用して、其の手腕をあらはすべきは、此の時代なりとす。されど、それを應用するのみにして、更に新しきを修養するなくば、遂に動ける器となり終らん。故に、今は修養と應用との兩期を兼ぬる時代にして、其のむづかしき事、實に少女時代に倍せり。一擧一動は直に兒童に感染し、一言半句も直ちに家庭の平和を動かすなれば、堅き操を守りて、正しき道を踏まてかなはぬは、實に此の時代なりとす。時に或は子となり、母となり、妻となり、複雜なる他方面を處

理し、父母と夫との調和劑となりて其の間を融合せざるべからず、外に夫を助け、内には子女を教育し、下女と主人との職を紊れざるべからず。其他內外の事數へ來れば、殆と關せざるものなく、其の難や、他に比を見ざるなり。されば、こゝに、昔日に修養し得たるところをめてたく應用せざるべからず。而して、更に修養を怠るべからず。此の時代に於いて、最も恐るべきは、徒らにわが才をほこるにあり。これ其の身をあやまるの本たり。世に些とばかりの才をたのみて、夫を凌かんとするものあり、苦々しき事と云ふべし。才を家人に讓りて、我れは唯だ汲々としずして上らん、要は夫て、內助の功、もとめを助け、子女を教育して、圓滿なる家庭をつくるにあり。

◎雪月花

埼玉縣　茨木花子

雪月花、さても、美はしく床しの文字なる哉、匂ひこぼるゝ美はしの花、こは春のみに止むべきやは、そがあらん限りの妙なるゑまひは、如何に淋しき野に山に、嬉しの面影、浮べつゝ、沈みし悲哀の胸をや慰むらん、すみわたる月影、わきても清き秋の夜の月は、光かゝやく玉の樓をはるかにてらして、如何にゆかしき琴の音に、昔し忍ふの友とやなるらん。さては、くづれかゝれるはにふの小屋の軒もりて、哀れいかなる翁媼が樂しきまとゐをやてらすらん、花は色なく鳥は音をたちて、木枯しの風のみ、われは顏なる冬の日に、紛々春ならぬ六ツの花ふゞき亂れては、なかく〳〵に、老も幼きも寒さ打ち忘れざるはなかるべし。積り〳〵ては、人の世のけがれし塵を、その清き衣の袖に、隈なく蔽ひて、見るからに神々しきしろかれの世にかへゆく。いかに、雪てふ物のくしく妙なるわざならずや。實に美はしき花、清き雪、さては冴えたる月こそ、愛でたきもの〻極とや云ふべけれ、われ日頃、此の三のものたゝへて止まざるは、花の婉なる姿、雪の清かなる、はた隈なき月の光りを愛するのみにはあらずして、こは假令は優しくもけなげなるべき我やまとをみなの心によくも似通へばなり。異る泰西の婦人は、如何なる物をか其心になぞらへつらんしらねども、古き其上より美はしき花も名におふ櫻花國なれば、故山とせる日の本の女子は、此の花の如き美はしき、この雪の如き清き、この月の如きあかき心なからてやは、されど、花てふ物の美はしきも折りからの嵐のがれ難く、月にも村雲の去り難く、清けき雪も熱てふ敵にはかつよしなきを如何にせん。永久に色うつろはず、消えず、けがれず、年へてます〳〵光あるは、人の心々の雪月花ならんか。あゝ美はしき床しの文字なる哉、月雪花や。

仙　桃



中村不折氏畫

◎勤儉論

愛知縣　平野樂華

勤儉は事業の根本なり、人、大家富豪に成らむと欲せば、宜しく先づ勤儉を知りて、然る後に萬事をなすべし。然るに、世間には往々此の意を悟らずして、事をなし過ちたる者、今更指を屈するに遑なし。勤儉の如何なる者なるかを知らずして、事をなさんとする者は、舟なくして大洋を渡り、羅針盤なくして大沙漠を渡る者と、何ぞ賢愚を選ばむ。されば、余等前途遠しとは言へ、他日志を成さむと欲せば、今よりよく勤儉を辨

船して、未定の航路を定めざるべからず。一國の興亡盛衰は、吾輩少年の肩にかゝれる重大なる責務なれば、此の責任を全うせむと欲せば宜しく勤と倹とを辨別し、何れが勤なるか何れが倹なるか、如何すれば倹をなし能ふか、如何すれば勤をなし能ふかを辨へざるべからず。實に五十年の浮世の浪風に、なげきなく暮すも暮さざるも、國家の平穩も、不穩も、皆此れ勤倹の如何にあるなり。

○朝寢を戒しむ

松山　千代子

一月は一日を以てはじまり、一年は一月を以てはじまる、十年百年といふも皆同じ、故に人もし、一日一時たりとも、徒に過さず、朝寢懶惰を戒しめて、己が、務を勵みなば、いかに短命の人なりとも、其の成功は實に、懶惰者にして長壽命をえし人にもまして、大なるべく、また老いて後の悔もなかるべし、貝原益軒も「古人は人の朝早く起ると晏く起るを以て、家の興廢を知る」といへり、朝とく起るは家の榮ゆるしるし、晏く起るは家の衰ふる基なり、故に夙に起きて事をつとむるを以て身の習はしとし、家の務の則とすべし、怠らぬ者は一日を以て十日とし、怠者は十日を以て一日とす」、といへりとか、物に一得一失、人に長所あれば短所あるは、自然の習なるか、貴孃はさばかり才學秀で給ふにもかかはらず、御身躰孱弱にて、ましますこそ悲しけれ、そも一はあまり、學問に御熱心のあまり、適度の運動もなされず、また、あまりの御熱心に夜をふかしては、春の夜の短き夢の破り難うて、われしらず朝寢なし給ふとか承はりぬ、君もかしこくおはせば、前述の貝原先生の御言の葉も知り給ふべけれどなほよくよく味はひて夜の御勉強ならばいささかひかへさせ給ひて、朝はつとにおき、後の山のあたり散歩したまふて、新鮮なる空氣を吸ひてのち、文机のもとに書をひもとかれなば、心自ら清々しくて、如何に快活にひ給はむ、又、御進歩も一しほ著しくなり給ふのみならず、み躰も健やかになりまさん、殊に、健康なる精神は強健なる身躰にやどるとか申せば、愚かものの老婆心をも、少しは、汲みとりたまひて朝寢をば戒しめ、充分の運動遊ばされてはと日頃の御なじみにあまへて心に思ふ一ふしをかくはしるしぬ、ゆるし給へかし、

神田　大澤　隆子

○露

露はなべてをかしきもの哉。春雨小やみて櫻の蕾ふくよかなる小枝より、ほたり〳〵と滴りおつる、長閑けき様はいはずもがな。風涼かき頃の頃ほひ、かほりも高き紅薔薇の花の面に、宿りたるは、いと艶麗にして、さながらルビーとも見なさるゝ。朝顔の花の脆きを更へもせて、夕べの露の貴きを、ほこり顔なるは、しほらしく、夕立の晴れて川邊の藪に螢とまがひておけるを、幼子らのそれかと思ひて取らむとするも罪なし。緑色こき八つ手の葉の、夕立の名殘の露にうるみつゝ、そよ風に舞へるは、さながら、銀扇を振れるやうにて、此上なく涼しく、崇高き白百合の花に一きわしげく置き渡せるは、戀する少女の涙よりも清し。錦とまがふ紅葉に、朝日の照りそひて、きらめけるは殊に美はしく、月清き夕、枝もたわゝに、咲き亂れたる白萩の花に匂ひこぼれしは趣深し。姉君が、奥都城に手向けし、白菊の花に、宿れるは、見るからに、哀れ深し。落つる涙の露もおきそはる心地せられて。されど、儚なきは露の運命ぞかし。朝日たち登ると諸共に消え失せて。實にはかなきは露のみかは、思へかし、人のうき世もさならむに。

○春と秋

神奈川縣　中村　清子

春は長閑なれば楽し、秋は淋しければ哀れなり。楽きをこそ我は好め、秋いかで春にまさらむ、有らず〳〵哀れなるこそ我はよけれ、春いかで秋にまさらむ。昔額田の女王のかけつらひ給ひてより、とかう言ひきてこなた幾千度の春秋をか経けむ、されどもいまにいづれと定らず、そも春やまされる、秋や劣れる、凡楽しと云ふは楽しきもの楽しきにはあらず、哀れと云ふも哀れなるなりの哀れなるにはあらず、さればよしと云ふもあしと云ふも物のおのづからよしとあしとには有らずぞかし、夫れ心の楽む時物從ひて楽しく心の哀なる時物從ひて哀れなるものなり、よしと云ふも心によきのみ、あしと云ふも心にあしきのみ、心ぞよしあしを分つなる、春のどかなりと云へども心に欲あれば百鳥の聲も涙の種とならむ、そのをり誰か春を楽しといはむ。秋淋しとはいへ、心悦べば月影も我をなぐさむるに足らむ、そのをり誰が秋をわるしと云はん。春を好みし人は楽しき心ありて見たればなりけり。秋をうしときらひし人は愁をいだきてながめたればなりけり。春は秋にまされるにあらず、秋は春にをとれるにはあらず、心こそ春秋にはまされりけれ。

○櫻

長野市　山本たみ子

あゝ潔き花　美き花の櫻

枝にありては雲か霞かとうたがはれ、知るも知らぬも打ち群れて、山分衣はるばるとむらがる者を酔はしめて、そこはかとなく吹風に、袖にえならぬ花の香を留む、又一陣の風に伴はれて枝を辭しては、綿の如く雪の如く、馥郁たる香氣をはなちて散る花片が、木下陰に汲みかはす盃の中に落つるなど、一段の風情にこそある、櫻に名所は多かれど吉野山の一目千本、是に劣らぬ嵐山、鞍馬なる雲珠櫻錚得も云はれぬ風情なり、あゝ斯く美しきのみにて敷島の花の王とは云はれしも、美さは梅も櫻に劣るまじ、殊に梅にありては霜を凌ぎ雪を冒してほころび出て、鶯を招き春を告ぐなるになどてこをめてさらめやは、古の言の葉なる「花は櫻に人は武士」とは美しきが爲めに云ひつるか否、散るべき時に枝を棄ふ風もなく、はた命を惜む景色なくちらちらと散り來る樣は、梅桃其他の妙なる彩色もて染なしたる花に見かたき處なり、あゝかの美き中にふくまるゝは我敷島の五千余萬の同胞が模範たる大和魂、これ有てこそ敷島の花の王とは尊ばるゝなれ、宜なるかな、されば鬼神もおとろく武夫にすら、吹風を勿來の關と思へども、道もせに散る山櫻花と詠せられしも斯ありてこそあらん、又　後醍醐帝代の勤王家兒島高德の闇夜に乘じて櫻樹に赤き心をしるせしも此の櫻なりけん、あゝ櫻よ、汝敷島の國民の鑑とて此世に咲き出てたるか、あな尊としの櫻花、あゝ潔き櫻花、ねがはくは此日本の國のあらんかぎり長へに咲てあれ、

○精神

鳥取市　天野清子

我等は世界に誇るべき唯一の貴き或ものを持てるなり。

嗚呼そは白扇をさかさまにして、東海の表にそびゆる富士の神山か。春、芳しき花の吉野か。秋、風さへ匂ふもみぢの高雄か。八景を汀に備へたるにほの海か。あらじ〳〵な。大和魂と名づけられし精神こそ、まさに誇るべき夫なれ。あはれ、この精神は我が皇祖の高千穂の峯にくだりませし太古より、我等が先祖の天よりうけて、二千五百年餘の間、深く胸に彫刻せられて、傳へ〳〵來しものよ。今や我國、正義の爲、世界の希望を荷ひて、無謀なる彼れ、スラブの頭上に、大鐵鎚を加へつゝあり。聞け、渺々たる太平洋上の一小島國民の精神が、凝りて發する所の萬歳の聲は、彼の廣大なる領土と、大なる富とに誇れる彼れが叫べるウラーの聲を壓して、高く高く世界の耳を驚かしてひゞけるを。見よ。旅順、南山、遼陽、沙河、奉天に於ける、ああ我が決死の士が、いかに從容として、いかに勇敢に、振舞ひし事よ。鬼も泣かむ。神も驚かむ。機械水雷、何々インチの巨彈。鐵條網、塹壕等、あはれむべき彼が苦心經營せる、それこの物質よ。そも〳〵汝等は、我が精神に向つて、何等の防禦力をか有せる。止めよ止めよ愚なる物よ。世界は如何に進歩發達すとも、我がこの精神をいかで亡し得べき。よし有形の形骸は、仇し野の露と消えなば消えよ。無形の尊き魂は、旭旗と共に、進んでウラルの山頂、高く萬歳を叫ばずば止まず。しかもその感化の深く及ぶや、戰ゴッコに熱中せる未來の百の廣瀨中佐、千の橘少佐を生み出しつ、嗚呼かくて我が精神はとこしへに〳〵、子々孫々に傳るべし。山は裂け、海はあせぬとも、この精神を保持すべき大なる光榮は、すでに〳〵我がみおやのそのかみに於てちぎられしものを。嗚呼貴きかな。この精神。あゝ偉大なるかな此精神。代々の歴史は、とく之を謳歌しつくしぬ。我等今更に何等の言辭を以てすべき。おもむろに無言の贊辭を　くりかへしつゝ、將來國民の母として、あくまでも、この精神を、發揮せむ事を、天の一方に誓はむかな。

敍事文

塩井雨江先生選

天

○驟雨

麹町區山元町三丁目一番地　高橋つる子

今日はさても〳〵胸ぐるしきまでの暑さかな。常には涼しげなる村松も、炒らるゝやうなる黄金色の日射に照りはたゝかれて、そよとの風もなく、軒端の。風鈴さらに音もせねば、青簾の袂、動かん由もなし、されば、人々言ひあはさねど、一驟雨あれかしと願ひしこゝろ空しからで、七ッ頃、生ぬるき南風の、二度三度庭面の椎の木を訪づるれば、はるかなる巽の空にあたりて、古綿をちぎれる如き一ひらの黒雲突然とあらはるゝと見るまに、雲は雲を吐き、風は風を呼び、大空一面にひろがり渡る勢ひすさまじく、百千の奇峯横さまに倒れて、紫電一閃、天閼さつと推し開けば、一輪の火の車滾々と黒烟を吐いて天外をこがしぬ、あるは、龍王が爪をとぎて、紅蓮の焔を呑吐し、あるは、伽樓羅王が金色の翅を揮つて、天地も裂けよとばかり狂ひ、魔王波旬あれに暴れて、礫の如き驟雨は大地もくじけよと物すごきまでざつ〳〵と降り下る、雷霆はおどろ〳〵しう鳴りはためきて、木を仆し草をとばし、迦藍をくじき、屋根を卷き、今は全く下界は、陰々たる殺氣に壓せられぬ、人家は逸早く戶をとざして、蒲團にかくるゝこと急なり。風伯は、大地の生靈皆聲收めけるに、益々氣を得て、猛りに猛り狂ひに狂ひて、暴威を逞ましうすれば、また一しきり鐵の厚板を引き破りたらん如き音して、轟きわたる鳴神の聲に、雨も後れじと縱橫に車軸を流して暴るゝこと、愈々はげしく、やがて、金蛇幾線三十三天の外より落ち來るよと見るまに、かつ消えかつ光りて、世界はしばし爍々として光明に充ちたり。程もなく霹靂一聲、天柱も折れよ、坤軸も碎けよと、一道の火の柱、爆然として下界に落ちぬ。今は早や、天上天下、空も大氣も、山も川も、暗黑の中に暗黑の色を染めて、雨も黑く、風も黑く、世はまさに草木が悲鳴の聲、萬岳が怒號の叫びに化し了んぬ。

いつの間にか晴れたりけん、大雷大雨の後の空は天涯

萬里たゞ一色に碧を凝らして、さながら一面の瑠璃板を張れるが如く、涼氣水の如く肌を通して、快きことと言ふばかりなし。雲は全く影を斂めて、玲瓏たる五日の月は、淸らかに差し上りぬ。夜の間の露は、萬點の雨の名殘と、しげく若葉に宿して、冴かなる星影は黑う澄める池の面に銀砂子を散らせり。遠近にははや蛙の鳴くこゑ聞ゆ。

（雨評）筆また驟雨迅雷の勢ひあり。天とす。

地

○園遊會

岩代須賀川本町　服部貞子

師の君の開會の辭終りて、音樂隊面白き越後獅子は始まりぬ。赤のたすきに白の前掛お揃ひの君々は、各々店に入りて、やさしき聲に客を呼ぶ、さてもお可笑げなるよ。

お團子屋

藤棚を其まゝにて、長き腰掛は、はやう客を乘せ居ぬ。花房は五分通り開きて、うつくしく白き頰をなづる心地よさ、まして、主任は彼の淸子の君、白き前掛うつりよく、白き面をほの赤うさしてお働きぶり「いらッしやいよう！」のほゝ笑みには、誰れしも引き入られてか。

お蜜柑屋

あるじは幸子の君、築山の上の芝生に、笹もてさゝやかにしつらひたれど、ゆかしきは、其の味なるよ、かわきし口には、此の上なら……。こゝなか〳〵の賑ひなり。

彼方の笑ひ聲は……オヽ、落語家ならんか。

葡萄酒屋

池に臨める吾妻屋の中央に、テーブルを据ゑて、椅子五六脚、こゝは大抵師の君方のみなり。出でんとすれば、繁子の君「まあ先生ぢッとしてお出でなさい！」とつきつくるはコップ。すさまじきことよ。

おすし屋。

白と淺黃の幕に圍みたる岡の上。主任は松子の君にて通る人々を無理に引き入れて進め給ふなれど、手をつくる人は、あらばこそ、箸もつけずに。……後にて大笑ひしぬ。

折しも演劇開始のベルの音しきりなり。あたゝかき風の小波をたゝせて、皆人の足を彼方に、聞ゆるこたびの

はマーチなるべし。

（雨評）輕妙なる筆致、文才のゆかしきものあり。地とす。

人

○鯨漁

府下巣鴨村字上駒込一六一田中方　舞月女史

沖をはなれてはるか七里、潮にのりて鯨とらむの舟二十、銅色したる漁夫の、艪をして進みゆく。春の夕、海は斜めに傾きし夕日に、華かに美しう色どられ、波風ゆるやかに通へば、夕雲は長く靡きてくれなゐに、よどめく波に色づきて美し。

いづこともなく、海草のかをりよき匂ひ、波風にさそはれて來るなり。

今しも舟の進む數十間前、靜かなりし波は、にはかに荒れて、見る見る、あらはれたるまつ黑なる脊乾鯨……

鯨つかむの舟、こぞりて進みぬ。

……あだかも泰山の浮び出てたらむやうに……。

鯨は早や、かこまれたり。

海神、荒れて、潮は高く、風は烈しく、雨の如き銛、飛びかひて、凄まじ。

一番銛は櫂の爺、二番銛は戀の伊佐、叫ぶよ、歡呼のこゑ、呼ぶよ、快絕のこゑ。

波は紅に染まれり。夕雲は紫に、紅に、ゆるやかに夕陽の御座を、めぐれり。

見れば海ばら、夕日にくだくる紅の波、とばしる血潮と和して……。

（雨評）簡潔なる筆に、なか〳〵に其の景の躍動し得たるところ、妙といふべし。人とす。

[illegible]

○郊外の曉

京都市　桂葦風女史

つい今し方、東にうすく紅の花を現はしたばかり。西の空には、まだ消えのこる星の二つ三つ、力なきまたゝきを繰返して、如何にも名殘惜し相なのに引きかへて、是れはまた勢のよい小流の水の音、岩に激するでもなく、杭に堰かれるでもなく、只さら〳〵と流れる野川の水音、今新らしく帶びた生命の嬉しき呼きかとも聞きなされる。今日の快晴を證明するやうな朝靄は直ぐ其處の新らしい赤塗のガードあたりまでも立ち罩

めて居る。川の土手から田を五つ六つ隔てた山際の百姓家の藁葺の棟には丈の延びた夏草が生えて居て、朝炊の煙がうすく濃く立ち迷つて、遂には靄と化してしまふ。

青田に面した庭のぐるりには、青々と立つて居る玉蜀黍の葉かげに蹲んで居る裸躰の男、口調をかしく鷄を呼んで餌を撒いてやる、と、鷄はけたゝましい羽音をさせて駈けて來たが、親鷄は雛鷄を伴ひながら、我れ先きにとやかましい聲を立てる。男は餘念なく見入て居るらしい。折りから、一聲高く馬の嘶が、靄の中から聞えて、やがて其處へ美しの女馬士が……。

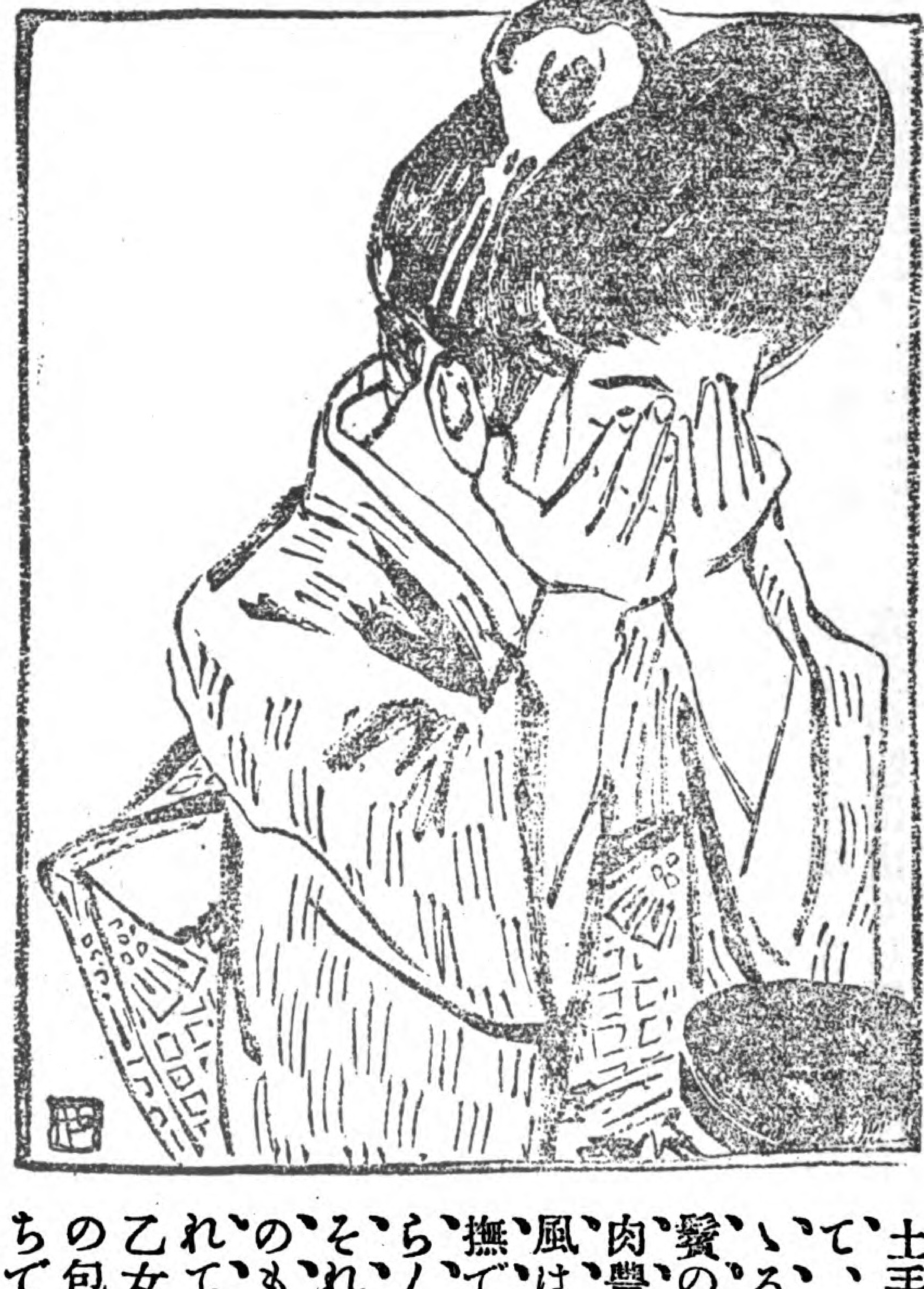
若い男は蹲み乍らに、

『相かはらず御精だネ』

と、馴々しいやさしい言葉。馬士の乙女は、愛らしい眼を、男の方に向けて、少し歩みを緩めて、

『お早う、お天氣でようござんすネ』

と可愛らしいほゝゑみをさへ見せて、會釋するのであ



つた。かゝる田舍の曉の淸けさを、乙女は、朝な〱いそ〱と、赤き襷の白手拭甲斐々々しく、馬の手綱を右手に採て、日の出ぬ内を、京を西へ松原三里、桂川の堤を急ぐのである。

土手には薔薇の香が滿ちて、乙女の草鞋に亂れかゝる草の露、曉の微風は、鬢の亂れ毛の二ッ三ッを肉豐かな頰へとこぼして撫でる、薔薇の花は、はら〱とこぼれて、水はそれをのせてゆく。凡てのものは平和で以て包まれて居る桂川の土手。乙女は絶えず心の嬉しさの包み切れぬと云ふ面もちで、時々、勢よく房々とした髪を振つて蹈いて來る馬を顧みては、一入の愉快さを、其の美くしき眼ざしに表はしつゝ。斯くして、乙女が桂川の松並木の靄の中におぼろ乍ら見ゆる村の外づれまで來ると、其處にも同じ裝ひの女馬士

の姿。こゝは實に彼等が毎朝の出逢ひ場所である。馬の新たに友を得ての嬉しさに、互に勇み立たその嘶きは、

「木の根、草の根、萱の根越えて、
　越えて逢ひたや方様に」

と少女等が唄つた唄に和したのである。

（雨評）郊外の曉、ゆかしき情致の忍ばるゝものあり。

○庭　春

鳥取市　上山千重子

調ぶる琴の音、いみじう亂れて、心地なやましき折柄ひら／＼雛の紅梅東風に舞ひ込ぬ、と見るまに、友禪の座蒲團に心地よげに居眠る、末の妹の艶やけき黒髪に、はらりと斗り……。いひ知らず興づきて、さして廣からぬ我が庭もせの、春を尋ねまほしう、なやみも打ち忘れられて、ソト庭に下り立ちぬ。三日見ぬ内なにとやらんいひし、げに先つ日、兄上の寫生の料にもと求め給ひし時には、心なきまで堅く結びし梅の蕾の、はやそよ風にも得たへで、散來なるは、はかなきは花の命ぞかし。さあれ、一枝手折りて、夜半の嵐に口惜しからぬやう、瓶に挿し、さなり／＼と足つま立て、ふりよきを選む折りふし、いづ方となくもるゝ唱歌の聲。靜かに耳とむれば、それよ、鶯の初音にも似し、「金魚のひれて波たつ池に、帆かけて走るつけきの船……」と、さても主や誰れ、愛らしの歌の響きかな。あはれ我が方に近づき來るよと思ふまに、にくや、はたとやみぬ。突然後ろより姉さまと、やさしき妹の聲。驚きてふりかへれば、櫻色の頰に笑くぼ深く、「アノ姉さま、いま金魚に餌をやつてよ」。さきの梅の花びら、なほ御下髪にとまりて。

（雨評）眠れたる妹の黒髪にとまりたる花を以て起し、なほ御下髪にとまりたるまゝの花を以て、結びたるところ、面白しといふべし。

○寫生帖の一ふし

麴町區　重田春子

菜の花の黄、麥浪の青きに連り、雲雀は空高く舞ひて又、下る。遠山かすみ、近山ひくし。清流ちさき音を立てて、岸に接吻し、石にさゝやきつゝ、流れ流れて森に入り、その果を知らず。一農家の竹籬、只一本の櫻咲けり。胡蝶散る花を追ひ、ちる花胡蝶を追ふ。水車ゆるくめぐり、はねつるべ音なくして、小犬垣根に眠り、少女椽にまりをつく。

寫生の題に出でし櫻、我は少女の袖にちりかゝる一枝を乞ひて右手にもちつ、門をいづれば、日は西に沈まんとし、家路にかへる農夫の鍬の柄にかゞやけり。あゝ詩材多き里よ、とはに健在なれと、ひそかに祈りつ。靜にのぞめば、老櫻樹影を清淺に水によこたへ、黄昏一片の月をそへて、暗香四方に浮動す。我手なる

小さき一枝、面を吹く習々たる東風に、一ひら二ひらちりて……、小川は抱きこむ如く、ちさき花びらをまきて、さてうかべて、いづくへか送る心か……。菜花一路白模湖として、一脈の清香、骨に徹す。かへりみれば、夜のうす暗は、我を追ふ如く迫りきてひなうた高らかにうたひつゝ立てる少女の影、漸くにとほく、漸くにちさく、遂に淡月の光りの中にきえ行く。

（雨評）優美なる寫生帖の一ふしと申すべし。今少し筆を錬りて清書したまはば、更に優美なるを得べし。

○墓畔の夕暮

高知市　吉良夕暮子

千古の恨みを、天邊の月に添へて、滿州の野に故國の鬼となりにし哀れ幾多の勇士、長へに土塊の冷露と眠るこゝ柳原の忠魂共同墓地。

墓場に入らむとして、只悽然と佇める一人の乙女子、一點の笑みをも堪へぬ其が顏の面を、幾度となく上げて、大空を睨みては、目に時ならぬ露を宿しぬ。

哀れ、初春の夕べ、冷き風に吹かれつゝ、士官墓地のとある卒塔婆の前に、石の如くに突立ちぬ。

夕陽は將に消ぇなむとして淡く、ねぐらに急ぐ暮鳥は南に南に、……。

墓畔粛然として、淋びしさ四方より迫り來る。

やがて、乙女子は小さき花籠より取り出だしゝ椿花の一束、やをら捧げし手向けの新しき水一とひしやく。

乙女子は合掌三拜、墓前に泣き伏しぬ。

白龍の天に登るが如く縷々として立つ香の煙、椿花、卒塔婆、乙女子を包みて、其の末は細々と上に……折りしも、緑こぶかき筆山の麓につき出す御寺の入相の鐘聲、餘韻靜かに哀れをふくみて遠く／＼。

（雨評）あはれなる墓畔の夕ぐれの情景、一わたりは聞えたり。今少ししまめやかなる筆のありたき心地す。

○春の田舎

愛知縣　平野樂華

螢に雪に、もの學びする折はあれど、匂へる花の樹のもとに、長閑けき日の光を浴びて、好める書讀むばかり樂しきはなし。都の春の醉歌雜沓にひきかへて、太古の樣にも似たる靜けき野邊に、萌え出でたる若草を褥にして、櫻の幹に倚れば、あたりに咲けるすみれ、蒲英公の花より花に、蝶舞ひ遊び、霞の中に雲雀の聲長閑なり。前なる田畑は、すゞ菜の黄なる、麥の綠なる、色さま／＼に描かれて、遠くの村里霞こめたり。樹傳ふ鳥の囀りを友にして書を讀む程に、いつしか長き春日もかたむき初めつ。いざ歸らむと立ちあがれば、春風さと頰をかすめて、花の二ひら三ひら、開ける書

の上に散りかゝり、おのづからなるしをりとなるも嬉し、なほこなたかなたにと、うかれありくに、左右にふみ廣げたる細路の、末は一つとなりて、同じ處に廻り合へるもをかしく、かくとさまよひつゝあるうちに、あたり暗うなりて、花の香のみ高く薫りつゝ。やがて家居をさして行く程、かなたに琴の聞ゆるは。今宵舊暦の上巳とて、雛に調ぶる音にやあらむ。月は如何にと空打ち仰げば、薄絹もて包まれたらん如き新月に、花も一入色添はりて見えぬ。

（雨評）文は先づ整ひたれど、新しく取り立つべきふしなきは惜しむ。

○遠山霞

千葉縣　すみれ子

天氣は淸麗、柳條は淡烟をこめ、胡蝶は紛々菜の花に舞ふの春の日は、萬物いづれ長閑ならぬはなく、遠き山々は、みな霞の中にカクレンボをなせり。而して、それを見つけ出すかの如く、富田川はその中に走りゆくなり。

今しも水戸街道を、はしる二臺の自轉車、あれよ〳〵と、見る間に、霞の中に入れり。

折しも、人力車にのりて、通りかゝりし若紳士、この人も、霞の中をすぎ來たりしなるべし。手にもてるは櫻の一枝。あはれ、誰れに見せんとの心づくしぞ。をり〳〵見上げての微笑は、定めし厚き情を、秘むるなるべし。時しもあれ、一陣の山風、サッと車を掠むれば、あな無慙や、櫻の花は、雪の如くにちりはてぬ。あゝ思へば、霞も春の去れば、消ゆるならん。浮世もちる花、消ゆる霞の如くならむかし。

（雨評）遠山の霞、ゆかしげなる色はほの見ゆれど、まだ〳〵筆の渋きふし〳〵多し。

○硯の雫

陸奥　靜子

（一）

畑一面の菜の花も、彼方より朧々に暮れそめて、入相の鐘に蝴蝶の三つ、四つ、平和の園にや歸るなるらん、上よ下よと、追ひつ追はれつ、遠くかすむ彼方へ、

（二）

今し夜の幄は、鎮守の森の彼方より、次第〳〵に垂れ込めて、御空に匂ふ星の花、四つ三つ五つ、きら〳〵と、神の默示を齎す如く、足下めぐるいさゝ川の流れは、神の秘め事さゝやく如くに、チヨロ〳〵と、いとも長閑に、何處の園の垣間よりもれてか、梅の薫の馥郁たる、げに床しく麗しきや、平和の里。

（三）

照りもせず曇りもあへぬ朧月、はなれ離や松の梢を、女松男松の二株、影淡く白砂に横へて、春風和く自然の樂を奏べ、磯邊に寄する男波女波は、審美の神を讃

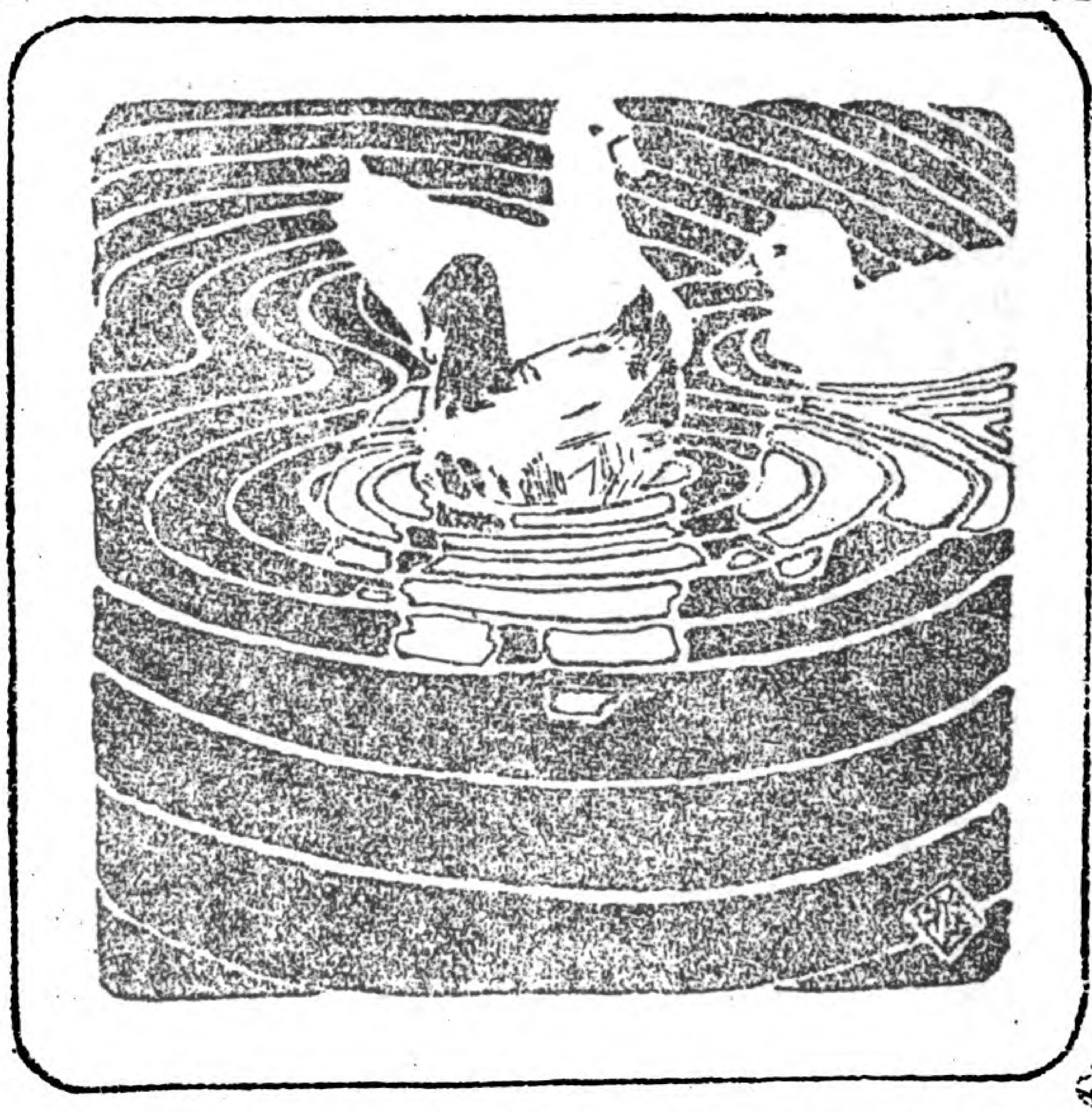
めんとにや、さわ〳〵と歌へる、潮の花の香さへ亦一しほに床しく、波間遥かに見えつ隠るゝ灯は、海士の漁火なるらん、三つ四つ五つ、朧にかすめるなど、こよなき眺めにこそ。あはれ、樂しき春の浦和よ。

（雨評）硯の栗、ゆかしげなる色はほの見ゆれども、玉とならんには、今一層苦心錬磨を要すと言はん。

○田園の春

備後　池田仙翠子

人めも草も枯れはてたる冬の景色に引きかへて、樂しくをかしきは、田舍の春の眺めなりけり。あはれ、此のうらゝかなる空に、霞ならぬ人の心も浮き立ちて、野邊山べ、身を胡蝶のむれとはなしつ、そこはかとなく狂ひ歩くこそ、をかしけれ。いてや、之の花のさかりに、たれ込みてのみやはと、道すがらの摘草に、くづをるる心を散じつゝ、家の後の丘に上りて、打ち見やれば、ぬるく流るゝ里川の堤にそひて、長閑になびく青柳の姿の艶なる、野守の庵の軒端近く咲きみだれたる櫻花の、しづ心なく散りかゝれる、足下よりつゞく麥生のはてに、稲荷の社にやあらん、赤き鳥居に旗



のなびける、若紫の蓮の床をはなれつゝ、雲井はるかに囀づる雲雀、霞がくれに啼きいづる雉子の聲、咲きつゞく菜の花に舞ひ狂へる胡蝶、綠の若草ふみくだきて花など摘み居る乙女子の姿など、なでやかに吹くはる風に匂ひて、いと床しく、めづらかなるにあこがれて、都の錦も及ぶべしやは、げに樂しきは田舍の住かなと、ひとりごちつゝあれば、この美事なる土筆、姉上よ摘み給ひてはと、不意に弟のおどろかすにふり返り見れば、げに美しき土筆のあまたたちてあるにをかしく、よろこばしく、はしりよりて摘むほどに、時はうつりぬ。名殘はつきねど、これにて歸りなんとて、岡を下り、土橋を渡り、菜の花と青麥との間の細道通りて、もときし道を歸り來つ。土筆を筆にて、なつかしかりしふしを、かくはものしぬ。

（雨評）田園の春、これにては、ありふれたるけしきにすぎざるををしむ。筆もまだ言ひまはしの苦心足らぬものあり。

○梅姫と櫻姫

徳島市　久保串子

玉の欄干を廻らし、珊瑚の御柱高き樓に、小扇片手に臨し、下界遙に眺めらるゝは、是ぞ造化の女神である。もはや下界の森羅萬象は、稍造り終へられたのであつた。

時よ春の風柔かに吹き初めて、雪消え、谷川の氷とけて、波の花笑ひ、枯木活きて芽を吐き、燒痕よみがへりて若草もえ出でつ。人は花に送られ、花に迎へられかげらふもゆる野は、空低く、遠山霞みて菜花黄色に麥浪靑く連り、實に長閑な日であつた。時に美音嚠喨と大樂を陛下に奏ずるは、一羽の雲雀であつた。

造化の神は、此の愉快さに、屢し忻然として眺められつゝをつたが、尚人の世に一入の趣を添へしめんとて最愛の二女子に、下界に降ることを命じた。

二女子の一人を櫻姫と云ひ、一人を梅姫と云つた、實に睦じき姉妹であつたが、夫れ／＼氣質は異つて居た。

櫻姫は優婉で、曲眉豐頰二重まぶたの目元愛らしく、丸顏で白く肥え、梅姫は淸淑で、鼻高く口元りゝしく眼元凉しく、顏少し長く、體やゝ瘦せたり。櫻姫は溫和寬厚で、梅姫は爽快嚴肅なり。櫻姫は情厚き淑女で梅姫は情厚き烈女であつた。

ふたりは、懷かしき垂乳根の膝下を辭して、塵深き下界に降つた。

ふたりが降つてより、下界は一層美くしく飾られた。

梅姫は梅の花で其の身を飾つた。下界の人の謳歌を聞くと。「我をして春の來るを知らしめ、我をして高潔の士たらしむるは夫れ梅か」と。又「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくるる」と。

櫻姫は櫻で其身を飾つた。下界の人の謳歌を聞くと、「我をして富を忘れ貧を忘れ老を忘れ幻を忘れ終日樂天的たらしむるは夫れ櫻か」と。又「櫻がり雨は降りきぬ同じくは濡るとも花の陰に宿らむ」と、幽かに囁いた。

（雨評）趣向は一寸面白し。まだ洗煉の足らざるををしむ。

○夕日の美觀

近江　茂一子

野寺の鐘の音ひゞき渡りて、永かりし日も、漸く暮れ行ける頃、家を出でゝ、磯の邊に、獨り夕暮の美觀を賞しぬ。今しも沈まんとする夕日は、遠く湖のかなたの山頂に殘りて、あたりの雲は紅に彩られ、たなびく雲は紫色を呈しぬ。

沖邊遙かに吹き來る風は、磯山松に響きを通はせて、一日の勞を犒ふ如く、又來ん朝の再會を盟ふが如く、優しき樂を奏しぬ。

暫し陶然として醉へるが如く、邊りの風光に見惚れ居りしが、悠々たる欵乃の聲、靜かなる湖面を渡りて響き來るに、驚きて首を回して眺むれば、眞帆片帆かけ

たる漁舟三四、遥かに黄金なす波上に漂へり、舟、人共に夕日の光を浴び、唄の聲は消えなんとしては續き續きては又消えつ、餘韻長く暮天に漂はせしが、やがて唄を乗せて、遠く暮靄の内に消え行けり。

折しも、濱千鳥の一群、模糊たる夕靄に包まれて、今や眠につかんとする湖の面を、掠めて飛び去りぬ。やがて、夕日は沈み果て、華やかなる夕榮も色あせて空には光り淡き星の二つ三つ瞬き初めぬ。いざや歸らんとすれば、對岸の里の燈火、光淡く明又滅……。

（雨評）　夕日の美觀、今一層の深き觀察と美しき筆とを要すると申さむか。

○春のひと日

伊勢　丹羽たい

昨日よりの雨、なごりなう晴れて、いとものどかに、ふくとしもなき風にさそはれ、青柳の糸にひかされ、そこはかとなく、日頃へだてぬ友垣三人四人、打ち連れだちて、出てたちぬる、うと〳〵と霞みわたれる春の野邊、いとうららかに、鈴菜すゞしろ咲きみだれたる、そが中の道のかたへに、露重げにも、つぼすみれの咲き匂ひたる、つく〳〵の憚りもなく頭高くもたげたるなどを、興がりて摘みはやしつゝ、たどり〳〵て、しみさび立てる松山のふもとに到りぬ。

薫り來る風をたどりて、なほ奥深くわけ行くに、やうやう老木の花の下蔭にいたりぬ、しばしたゞずみしが、梢より落ち來る風の芳はしさ、えもいはれぬ心地す。それよりなほも進むに小高き地にとたどりつきぬ。こゝにて暫し休らひ。四方を眺むるに、麓の田圃は、黄金色なる菜の花と麥の緑の取り交へて、さながら錦の綾織るが如き、その景色今更にたとふるものなし。まして、かたへに姿やさしき小蝶の、あるは天に舞ひ上り、あるは下り來て花に休らひ眠れる、そよ吹く風に、夢おどろかされて羽かひをのばし、また舞ひ上る様にあくがれしが、いづこよりか聞え來たるらん、百千鳥の聲おもしろく囀づるなど、げに長閑なりき。

やがて皆々蝶と戯ふれつゝかけめぐり、すみれ摘み、つばな抜きつゝ興がりて、いつしか手に餘るも、時のうつるを覺えず暮らしぬるに、塒に急ぐ鳥の聲に、心づけば、日は早や、西の端に沈まんとするにおどろき名殘をしくも、樂しき此の地を、あとに急ぎ下りぬ。げに、誠に愛嬌は樂しく一日の樂を賜はりて、氣をはらし欝を散らして、心のすが〳〵しさ、さながら秋の夕べの月にも似たり。まことや、浮世の塵もはらはれて、仙境に入りたらん心地ぞせらる。いか程眺むるとも、限りなきまゝ又の折をちぎりて家路につき歸りぬるに、明日もまた出てんの心せられて、袖だゝみのまゝなる今日の衣服。

○生別死別に勝る

福岡町　島幸子

輸送兵　第十七聯隊、將校二、下士卒四十六とチョークで記されたる、機關車より四番目の車の窓より頭を出したる、二本線の兵士、

「それぢや後の事は宜しく頼むよ。」

何となく聲は震へて居る。傍には。二十四五位に見ゆる品のある婦人、

「デヘ、之れが、わ…わか…別れ。」

時其の時、車掌はヒュー〳〵と笛を鳴らした、蛇のやうな汽車はソロ〳〵動き出した。

兵士「サラバ」の聲、

婦人「アーもし今…ひと…一言」

驛夫「コリヤ〳〵危險い〳〵」

百尺の長蛇は、遠慮なく走る。跡に殘るは、輪なす一類の煙。

ドット一度に擧る萬歳。

○殘りの菊

伊豫　加藤千年子

語ふ友もなき山里の住ゐは、いづれ淋しきならひながら、憐むにもとまらで、秋もいにし日より、枕に通ひし虫の音も、千草と共に枯れゆきて尾上につまらひし男鹿の聲も、紅葉と共にあとなくなりて、淋びしきながめ、日毎にまさり行けば、音づるるものは只涙をさそふ村雨のまどを

打ち過ぐるのみ。かゝる折しも、中ば破れたる籬の下に、一輪二輪殘れる菊の、寒げにやせて、うつろひがてなるに、あまりの床しさに下りたちて、落葉ふみわけ、たどりよれば、幾夜の霜にあひぬらむ、下葉もかれがれに、小さき花の色なきが、うつろひたるこそ、いともあわれなれ。晴れやらぬ空の風につれて、木の葉ながらに林時雨のふり來たる、たださへ哀れなる此の菊花、今しも此のむくつけき雨にあひて散りなんとするあまりのいたはしさに、手もておほへども、おほへども、もりくる千行の雨。あはれなるかな、花の心。あはれ堪へがたき此の雨を、いかでしのぐことを得ん。あやうきかな、床しき花の命。あゝ、林時雨も情なきかな。これより後の花しなきものを、などてかくはなやますならん。

◎春の小川

仙臺市　村田蝶子

白く、赤く、紫に、黄に、さては綠、今や盛りの春の八千草、色美はしき野邊を、さまよひ行けば、ふと見出ぬ、水清う砂白き、いさゝ川……。はり詰めし薄氷りの、いつしかとけて、岸のほとり若草の芽吹きし、いと紫く、そが中に交りて笑める菫の花は、倒に水底にも咲きて、浮ぶはやさしき、春の光……岸邊にくだくるさゞ波の、さてもやさしききらめきよ。

ふと、溯る一むれの小さき魚の行方見やれば、少女や捨てし、白蓮の花束、ゆらり〳〵、浮きつ、沈みつ流れ下るよ。あはれ戀にはなれし、白蓮の運命……あゝ。かくて、何處にか、流れ行くらん。こを取り上げて唇にふれなん若き人のありや？

野の名なし小川は、花のせて、永劫に、銀の小鈴を、振るがごと、やさしきさゝやきを殘して……、末は遠く〳〵霞に消え行きつゝ。

◎夏の美

宮城縣　花園女史

大かた夏こそ興は少なけれといふめれど、いかでさることやはあらん。春の行へとゝもに、霞もけさは立ちわかれ、山の端すゞしげにはれて前栽の藤つゝじまたさながらに夏來にけりと、こゝもかしこも若葉にうつろけしき、目あたらしう、やがては郭公の宿にもなりなんと、きのふ見し花の面影わするゝにはあられど、うつりゆくよとゝもに、心もかはりぬらんかし。更衣のあしたこそ、またなくすが〳〵しきものなれ。ちる花にうかりし風の音も、いまはうしろめたからず、ひとへ衣の袖めづらしうひるがへしたる、いと心地よし。木立深きみやしろ、又は風もえ知らぬ谷ふところに、一本さくらの殘りたる、いとうれしく、外の散りなんてふこゝろもしるやとめでたし。神の白木綿かけてけりと打ち仰がれ、憂世をよそに誰がめづらんと、心にくし。なべてみどりの中に、わきて若楓、さくらの若葉、玉かしは、とり〳〵にもてはやし、歌にも句にもよむめるうるはしきは、たが目にもかはらぬめり。藤の裏葉のこゝろもとなげなる、山吹のけしきばかり花の殘りて、宵々とよしありげに見ゆる黙つき、またなつかし。

夕まぐれの徒然に、はしにいでゝ、手馴れの箏とりいだし、調もおろそかに、やがてひとて二手かいならせば、おぼつかなきふしなきにしもあらず、いかなりけんと思ひわづらひ、ふと見いだせば、根垣に白き卯の花の光りさやけきを、しばしは手もわすれてながめ居たるに、何處の青葉がくれともしらず、郭公の一聲なきいてたるに、あな珍らしと耳そばだてつ、今一聲きかまほしきに、更に音も立てず。いづこの里にいにけんとうらめしけれど、猶夜半にこそ待ためと、おぼつかなきことさへたのまれて、夜もをさ〳〵まどろまず、幾度か月をながめつゝ、みじか夜のはやかたぶきぬれば、思ひたゆみて、うつ〳〵といれたる夢路にさへかよひけん、うつゝともなし一聲なきわたりたる、あかずうれしく、さめても猶えこそ忘られね。かゝるけしき、都の中にはえがたけれど、また思ひもかけず大路の空になき出てたるうれしさ、何にたとへんものもなく千々のこがれの例もしつべし。

◎春のながめ

神戸　中村菊子

珠をころばす如く、天女の囁きの如き清きゆかしきさゝ川のせゝらぎはちよろ〳〵と、傍の紅梅時を得顔にさきそろひて、折々は鶯の其の眉に妙なる歌をうたひつ、偷其せゝらぎに影をうつす清けさ、もへそめし若草は昨日今日一きは色まして、見渡す野山の一しほうつくしさ、一しほなり。

かなたの岸邊の柳は、新らしき芽を出し、其の下に遊ぶは、里の少女な

らん、二人みたり、罪なく樂しげに。遙かあなたには、里川をはさみて、うなゐらの軍遊びする樣、一幅の活畫の如し。

をりしも、後の方に友の聲するに驚き、振り返れば、あな、あはれ、頭うなだれし菫一本、わが足下に……。今昔の感にたへず、たゝずむこと多時。あまりに憐なるまゝ、ぬきとりて、そこはかとなくさまよへば、靜心なくちる梅の下を、若き僧の只一人かへりゆく方に入相の鐘の音の遠くかすかに。

○我が家

佐賀市　照露

赤松町とて、家數多からぬ淋しげなる中に、いとうやれほれたる家あり。此れなむ我が住居なる。晝こそ人の行きしげけれ共、夜に入りては、遠近の犬の聲の外車の音もまれなり。あたりには、草木ぼう〳〵と生ひ茂りかえても人の住めるかとうたがはしむるばかりなり。庭には、年久しき老木枝をまじへて、日の光ももれず、風等吹く夜は、たゞさう〳〵と音のみ高くて、をちかたの犬の鳴く聲かすかに聞えて、いと物凄し。まして、五月雨のをやみなく降續くさつき頃、近き御寺の入相の鐘のいとあわれに聞ゆる頃の淋しさよ。げにはなやかなる都より、うつり住み給はんには、おそろしとや思ひ給はむ。されど、住みなれては、なか〳〵にこゝもの心地せられてなん。家あれたれば、時雨や月は、心のまゝにもりくれ共、さすがは住むに事かゝれば、玉の臺もうらやまじ。春くれば、各所より鶯の音づれて、其の初聲も、居ながらにして耳にしつ。虫と住ひを同じうする秋のあしたは、たへなる妻琴のしらべ、いづくよりともなくもれ出づる等、いと心地宜く、軒のしのぶに二ッ三ッ螢とひ來る夏の夕べは、そよ風に袂ふかせて、清きはちすの花を愛て、北風身にしむ冬の日は、榾につもる白雪を眺めやる等、いづれ樂しきは、我が家にこそ。



須磨宗方氏畫

○猿廻し

明石　井上南枝

玆二月五日舊暦正月元日なりし、土曜にて、手後遺は友人の訪ひくる筈なれ遙校ば、務そこそこにしてかへりぬ。校門を出て、縣道を左に折れんとする刹那、

それ兵隊さんぢやア
兵隊さんぢやア
鐵砲かついで　旅順港
おとしぢやア……

女のさびたる聲、大鼓の音に和して聞ゆ。はて何ならんと、聲する方を見やれば、道の四ッ筋となれる所の日あたりよき檐下に、若い衆どもの數多集ひて、輪をなせり。おうな、わらべなども少なからず交りて、如何にも興ありげに笑ひさざめけり。見るともなく近よれば、あはれにも老いたる猿の、五六寸ばかりなる丸竹を持ちて、兵士をまねて、あちらこちらと廻るなり。ともすれば、やすまんとするを、頸に着ける縄を、かたくかたく引かれて、悄々として又立つ猿のさまの

あはれさ。さて、かたへの女を見れば、年はまだ二十の上を三ツとも越えざる樣なれど、荒き憂世の浪に深ふ窶めか、頰骨高く、目はおちて、顏は日にやけて、いとも黑く、髮は塵を浴びて白く、背には小さき包など負ひたれど、さて、着物は肩のあたりいたく破れて、うらさへ見ゆるところもあり。またも聲一入高う、「おつぎは代つて騎兵の斥候……。」あゝさるよ、猿廻しよ。

人の猿を飼ひつゝあるものか、はた猿の人を養ひつゝあるものか、何れお主にして何れが從なるか。あゝ、世にはかかるためしのおほきよ、吁、

○春の野

長野　恩田　菀子

今日は嬉しき日曜日、朝まだきよりのうららかさ。『散步に行かう』とは兄樣の發言。さらばとて、妹の綾ちやんと私と三人、うら〳〵霞む長閑な春野に逍遙へば、一群二群の愛らしき乙女子の若草を摘んで居るのが、遠く近く。

とある彼方の松の木蔭に、紫紺色の袴が風に搖ら〳〵。此方には、綾ちやんが房々した下髮をふりながら、『雲雀は唄ひ蝶々は踊る……』と、可愛らしい淸い聲て、おぼつかなげに唄つて居そ。春風なよ〳〵と菫の花を吹けば、其が中に眠つて居た胡蝶は、ひら〳〵〳〵と舞ひあがりつまた下りつ。

菫摘む乙女に、野邊のみち問へば、
蝶の行方と、彼れはこたへぬ。

兄樣の詩吟の聲がやんだと思ふと、『菀ちやん、彼の笹川の處に居るは、爺やぢやないか』『はあ、さうよ、行つて見ませう』と、青柳の糸の亂れかゝれる小川近く行けば、爺やはそこに小さき海老を釣つて居て、『お孃樣お土産に遊ばせ』とて、籠に入れた海老を、綾ちやんに出せば、綾ちやんは非常に喜ぶ風情。爺やは何時もながらの優しい心。『今日の土產は賞にいゝれ』とは兄樣、菫と海老とを家苞に持つて歸れば、家には優しき母ア樣が……。

○春の野

丹波　波多野　しげ子

馥郁たる淸香を載せて、そよ吹く春風に誘はれて、野邊に逍遙ひ出てぬ。若草もゆる春の野を彩どれる、菫、たんぽぽの、紫、黃とり交ぜて咲きみだれさながら、花毛氈を布きたるに似たり。東の山の上に紫色の雲一片、それもやがて細く長く、南に消えし後は、一片の雲だになき、長閑かな彌生の空を、山より高く舞ひ上る雲雀、例の美妙な、音樂を奏しつ。かたへの淸き小川、散りし櫻の、花片を載せて、右に折れ、左に曲れてぬるく流れ行く。

妾は暫し、草叢に腰を下し、恍惚として無意識に、四方を眺めてゐる、向ふの山の麓路を、鄙歌うたひつゝ、里の童が！やがて林の蔭にかくれたり。

ふと見ると、籠に摘み採りし菫の花に、紫の胡蝶が眠つて、しかも其の花に、接吻して。

摘みとりし菫の花を慕ひ來て、
籠に眠れり、紫の蝶。

○一日の雪

岡山　石橋　美奈子

「今朝の寒さはいと身にしみて覺ゆるよ」と、つぶやきつゝ、雨戸くりひろげたるに、あな嬉し、日頃より待ちこがれ居し雪景色なり。何時の間にか滿開しけん、白き花のひら〳〵と、何所よりか、散り來りては舞ひ走り、舞ひて終に落ちて來る樣の美しさ、何に譬へん物もなく、目さむるとは、かゝるをば云ふならん。唯池の面のみを殘しおきて、今や白銀の原をば作りなさんとはすなり。やがて、籠中の人にならばやと、花の許に下りたちて、遠近の珍らかなる樣をあかずながめ居りし程、遂には頰のあたり、手足の先の、つめたくなりて、堪へらるべうもあらず。之に就ても思ひ出づるは、皇軍に從ひて彼の滿洲の嚴寒と戰ひ給へる武士の方々の上。妾が斯く又なき友として、愛づる此の雪、落ち來る樣の心地よし花のやうなり、はや〳〵尺にも積らまほしう思へる此の雪、彼の地にては如何に憎らしうながめ、又如何に困苦をや感ぜさせ給ふやらん。あゝ雪は同じくて、樂みと苦み、何故にかくは異なれるか。去にし青森の雪中の行軍は如何に、妾はひし〳〵と胸をうたるゝ心地しぬ。雪中の行軍、男士の死、先なるも今なるも、變ることなし。されど、前には永きうらみを雪に留められし、今は名譽を殘して雪にほゝ笑ませ給はんか。など彼れをなげき、是れを惜み、かれよりこれにと種々なる空想をめぐらす折

しも、六花はいつしか散りやみぬ。ふと氣つけばくびのあたりに、雨一しづく。あな、憎らしきかな、わづかに成就せし此の妙なる景色を、いぢ悪るくも流し去らんとすなり。實につれなき雨ならずや。哀れ、はか無き雪景色なりけりな。

○小猫

神奈川縣　月岡綾子

それの日、學びより歸りきて、書齋に入りけるに、次の間にて笑ひさゞめく聲きこゆ。何ぞと行きて見るに、何處より求めきたりけむ、愛らしき小猫の、妹の玩へる鞠に戯れ居るなりけり。まりよりもやゝ大きやかならんと思はるゝ體を、あるは躍らし、あるは轉がし、あるは跳ねまはすなど胸に如何なる愁ひを抱ける人も、こを見て、ほゝゑまぬものはなからん。おのれも打興じて、名は何とつけたりしぞと聞けば、玉なりと云ふに、玉よ〳〵と呼べば、まりに片足をのせつゝ、訝しげにおのが顔を打まもれり。頭も圓く眼のまどかに、毛に黑と白との斑にて妹の結びけん、紅なる太き紐の首にかゝれるに、美しくもまたらうたけなり。やがて書齋に入りて、文かきなりしに、いつか入りきて机の上に飛びあがり、おのが走らす筆を、さも面白げに小首かたげて、眺め入れり。墨を含ますれば硯に目をうつし、書けば、また筆を見まもるなど、しばしはまたゝきもせてありしが、遂にちいさき足にて紙を叩きはじめぬ。おのれの靈くに、彼も驚きて、やめしが、しばらくしてまた叩くなど、覺えず笑ふを、妹は聞き咎めて、入り來り、すゝ、玉はこゝにかと、奪ふやうにいだきて去りぬ。

○難破船

大阪市　今出溪花

海士が燒く藻汐の煙は、ひくう立ち迷ひて、寄せてはかへすさゞれ波の音ゆるやかに、秋の夕日はしばし水の面のにさすらひぬ。いづくの里の寺にやあらん。入合の鐘ながく餘韵を曳いてさむく、塒に急ぐ磯千鳥の聲、いと高し。磯邊に出てて、貝ひらふ子よ、など早く家には歸らざる夕べの空に匂へる彩雲の好やしきか、松吹く風の慕はしきか、さては又繪の如くなり行く沖つ島山の、汝が理想にかなひしか、あらずとや。さらば、何故に歸らざる。家なる人の待ちまさんに。あはや、日は暮れぬ。

まれど、父が舟まだ見えず、ああ如何せん。童は暮れ行く空を仰ぎ見て吐く息長う、目をしばたゝきぬ。定めがたなき秋の空、今まてまばらなりし星影消えて、淡き〳〵月をかたみに、木枯しいとどはげしくなりて磯の松が枝折るゝ音凄く、岩打つ浪の怒り高まり、住來の雲の脚、おそろしく、迅雷亦空に轟き初めぬ。渚に老いたる松の下蔭、悄然として立てる童の、涙交りの聲張り上げて、怒濤逆まく沖に向ひて、何をか叫びぬ、冷結氷の如き雨の中に、求救笛の幽にひゞいて。

夜半の嵐は名殘なく晴れて、あしたの日影いとのどけく、沖行く舟も、浪の色も、長閑く春の心地ぞせらる。乙羽の海辺、憐れに破れたる一つの難船は打ち上げられぬ。而して、數人の死屍と共に。嗚、彼の家の叫泣は、夜べの童にあらざる乎。白鷗遙かに松青く、渚を洗ふ女浪男浪に、又難船の調高し。

○雨の夜半

信濃　佐藤やす子

しめやかに降る雨、あゝ雨の夜半、消燈の鐘のひゞき渡りしも、早や一時間の前。四隣人定まり、萬籟寂として聲なく、眠れるが如き天地、しとしとと降る雨の音のみ、寂寞を破つて、物凄し。今し身は夜具の上に、横たはりつゝも、露まどろまれず破障子にかすかにうつる電燈の影見つめつゝ、思ひ起すは已位の感、將來の想、果ては身の責任、さても吾は〳〵、あゝ、戀しきば、亡き父上よ。げに思ふもよしなき事ながら、回顧すれば、一年の昔、花は青葉と立ち變り、鳥さへ故郷に歸る夏の初め、吾が父上は從病の爲めに逝はれ給ひ、而も越なさして歸り行く夏の初め、吾が父上は……

長の間悲しき月日の下に苦しき星霜を送りて。あゝ、忘れもせじ、丁度今夜の如き物凄き夜半なりしよ。遂に、あゝ、遂に泣き〳〵彼の世へ旅立ちましませしよ。おゝ、其の折よ、實に思へば只涙の種。さあれ、やさしき兄上に慰められつゝありしを、折りしも東洋の風雲あやしく亂れ、補充にありし兄上に、召集令の下りつ、あはれ名譽ある出發と知りながらも、先立の物は只涙にて、實に身も消えんばかりなりしよ。あゝ、人生果して、皆夢なるか。

されど吾れはあゝ、雨の夜半を、空しく泣き暮らす者にもあらず、かすけき火影に、涙そゝぐ吾にもあらじ。將來の務め、身の責任、吾れも、一個の日本國民なる者を。折りしも、雨を犯してひびき渡る夜番の鉦。それ、早やも一時となりぬるか。

抒情文

塩井雨江先生選

天

○勝鬨の響

麹町區飯田町六の十 豊田春子

橙の黄、霜に熟して、紅梅の香のすゞろなる欄の朝、我は今、うれしさのまゝに、わがちさき〳〵勝鬨のひびきを、ヴイオリンに彈き終りつ。

夢か、あらず。まぼろしか、あらず。まことうれしきうつゝなり。再び片手なる號外に眼をやりて、さて、ほゝゑみしその一時よ、何とはなしに、つと「萬歳」の聲のほとばしり出でつ……。

家毎にかゝげられし日の御旗は、國民の限りなき喜びの色をあらはして、そよ吹く風にひるがへれり。日毎行はるゝ提灯行列、旗行列の勇ましき樂隊の響は、瀏喨として高く、雄々しき軍歌の聲は凜乎として勢あり、時ならぬ雷の轟をなして、空に飛龍の影を描きしは、日比谷あたりの花火にして、はるかにうす明く春の東雲の如く、空をそめなしゝは、銀座あたりの花瓦斯なりしとか。

一高の時計臺影暗う、上野の森に月細き宵、敗荷水に伏して、雑草、又、霜に枯れし不忍池畔、露艦の燒打なる花火仕掛しもうれしう、向ふが岡の自治の城、大學の君だちの觀提會に、かがやきし正門のイルミネーションも美しう、あゝ、秋州島國勝鬨の響はみちみちぬ。

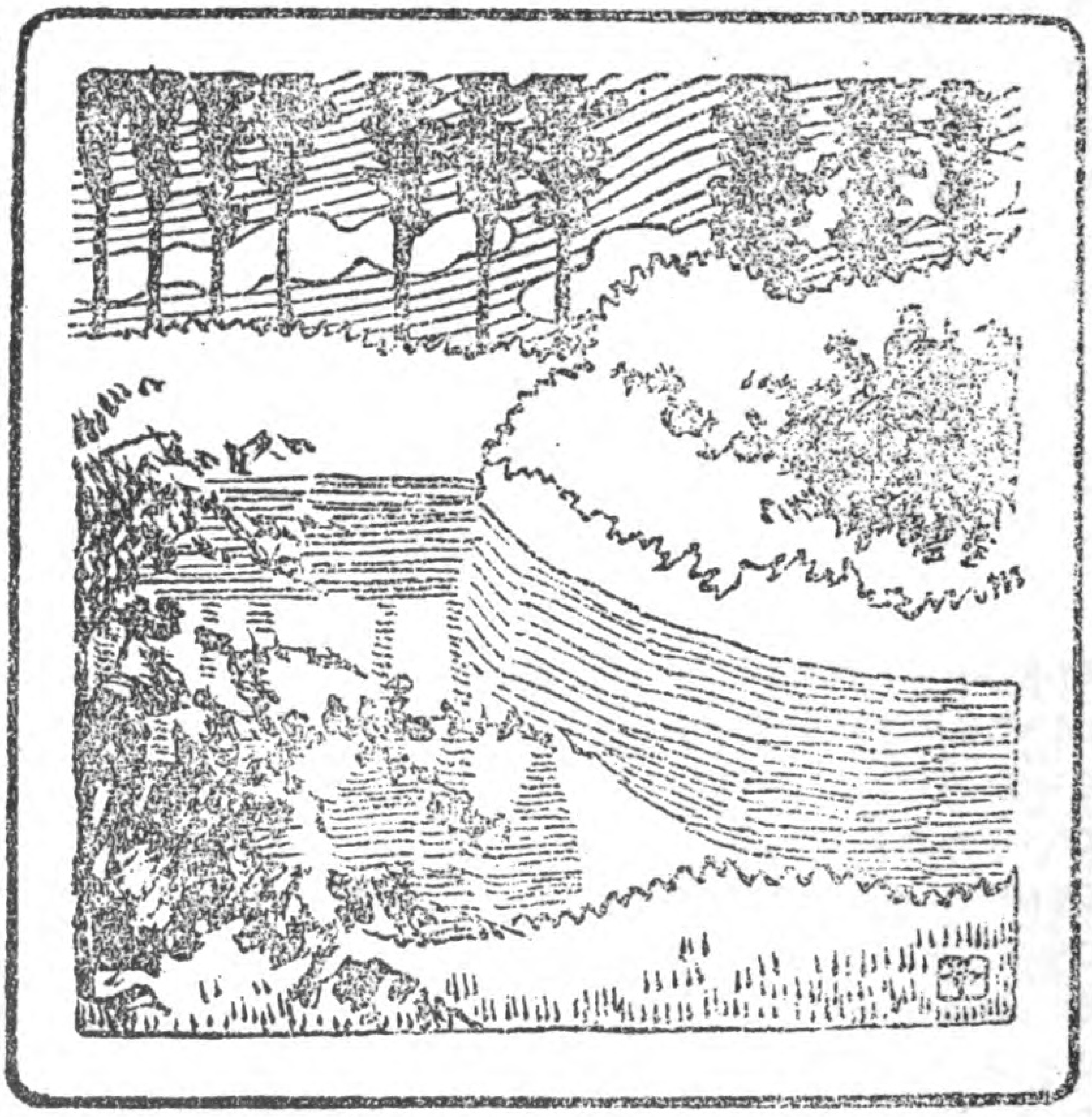
北シベリアに雪を亂しゝあらわし、今ぞ羽をさめて、するどき爪をかくしつ、黄海の浪を騒がしゝ長鯨、今ぞ尾をたれて海底ふかく沈み行きつ。

こゝに十年の恨、深かりし遼東の地、我に歸し、野草血に肥えし滿州のこゝかしこ、亦我軍のものとなりぬ。幾多艨艟水に碎けし渤海、長波澎湃として、月も水の上、静かに千々の黄金を打ちぬ。

大和島根の人々、五千餘萬、義憤の波を胸にたゞへ、正義の劍、腰に佩きし美しの心は、あゝ、箱崎の神ぞしろしめす、さてぞうれしき、戰捷國の國民とはなりぬる。我等が限りなき勝鬨のひゞきは、平和をかき亂

す惡魔の、高き〳〵叫びをもしづめて、はるかなる空に通ふらん。

あゝ、我れは幾くりかへし、くりかへしくりかへしつゝ、更に更に、うれしさの心あられる、又しても一曲、バイオリンにちさき勝鬨のひゞきをすさびぬ。庭の竹やぶやり、鶯かすかに我に和して、風は「祝」の聲を美しき梅にさゝやきつ。朝日は今しも殘んの雪に赫々たる光りを放ちて、雪はあはれ露となり、つゆはまたはかなうはかなう消えて行く。さても國民のゆめ忘るべからざるは、此の無前の戰捷は同胞幾萬の犧牲の賜はる事なり、其の夫を喪ひし寡婦、子におくれし親、さては飢餓になく孤兒の苦難や、けにいかならん。思はざるべからず。しかも〳〵、なほ戰局の前途は、杳として知るべからざるをや。あはれ、勝鬨の響は高くあれ、されど死者に對し、前途に對し、溢るゝばかりの同情と、忘るべからざる心配とは、また大なるもの無からずやは。あゝ、いつしか、いかにして我れ等は全幅の喜びを得んかな。



（雨評）鬱憤はらし得て禁じがたき歡呼の聲飽くまでも花やかに盛んなる奥にこれが犧牲となれる同胞をおもふ同情の涙を忘れざる、誠に美しき戰捷國の勝鬨の響と申さんか。天とす。

地

○野の少女

茨城縣稲敷郡莖崎村大字大井　石塚雲孫

野の少女！。野の少女！。其の名の如何にすが〳〵しく、優しきことよ。菅笠に手甲脚袢、如何にあはれに甲斐甲斐しからずや。白き手拭の姉さん被りとやら、そは彼れ等の銀冠なり。淳朴にして飾らず、同情に富みてやさしきは、彼れ等の天性なり。紫の空は漸う日の光を宿して、薄紅をぼかしたる如き曙、水車守る翁が家よりは、藍色の煙、霞をつきてほのぼのと、泝るが如き朝風に靡ける時、若草に宿す露

を拂ひ、宵の雨に潤ひし軟き壤に、大理石のごとつや〳〵しき足を印して、手には新月の鎌、脊には九目の草籠を負ひて、唄節面白く群れ行く彼等の樂や、げに若くものなからん、さばれそも如何なる望みをか懷ける。天がけり謠ひし雲雀は、神の啓示を傳へんとにや、眞倒樣に舞ひ下れり。

牧童が吹く草笛は、平靜なる里わの天地に餘韻を殘して、小羊の集ひ寄る影かすかなる夕、彩雲美しく野川の水を流る夕、うつり香懷しき花もまじらん、若草負ひて、しづ〳〵と歸り來る彼れ等、如何に趣味ある生涯なるらん。新しき星は瑞々しき眼を放ちて、何事をか囁かんとせり。

あゝ吾が住む庵の側、日毎に群れ行く村の少女、吾は朝な夕なの其の度ごとに、怪しの感想に耽りて、佇むを常とせり。聞かずや彼等が唄を

「胸のすくよなお主の唄に、岸の柳も舞ひ出だす」、長閑やかなる聲なり。

「山と山との峽でさへも、住めば都よ、花が咲く」。

あはれいぢらしき哉。

（國評）詩情の掬すべきものあり。地とす。

人

○義理の去鄕

德島市富田伊賀町　住友登喜子

清う流るゝ里川の岸、美しう咲いたる櫻花の下に立ちて、妾は深き思ひにふけつたのである。

あゝ、世の中に吾が住む里ほど戀しいなつかしいものはない、又樂しく嬉しく面白い所はない。慈愛深き父母が居まし、美しい優しい情あり慰ある親友の居まし、愛の恵をたゝゆる深林あり、理想を高からしむる松原あり、浮世の塵にけがれたる心を澄ます里川もあり。この樣に又とあり難い、否、又とあるまい此の故鄕を、妾はせつない義理!!義理の爲に、愁い、悲しい、苦しい忍をして、去らねばならぬのである。燃ゆる樣に盛であつた希望も、盤石よりも堅固であつた決心も、投げ捨てゝ、仕舞つて、その愁い、悲しい、苦しい思ひを、慈み深い父母にすら告げず、涙ながらに去らなければならないのである。されど、その如何なる理由かは言ふ事は出來ない、否、言ふに忍びないのである。

それにつけても、案じらるゝは、身の行末。

家に居れば、何不自由なく、手を鳴らしては下女を呼び、學びの隙には琴の調べ、歌骨牌の遊びにふけり、木仕業もしたことない身が、希望も決心もなく、あらい〳〵浮世の波風に身をまかせて、浮草のやう、彼方此方とさ迷ふたなら、どんなに悲しう、又どんなに辛いてあらう。さらぬだにか弱い身の、どうしてそれに堪へる事ができやうぞ。この樣な考への起る程、父母の御恩が身にしみ〴〵と。何も御存じない父母樣が、妾が一言も告げずして、此の故鄕を去つたなら、どの樣に心配せられるであらう、どの樣に悲しまれるであらう、それと同時に、妾の不孝を、どの樣に怒られるであらう。そして、胸の結ぼれ解くるよしもなく、よもや、このせつない義理、義理の爲めとは思つて下さるまい。

又お友達のことなど、何かくと思へば思ふ程、愁い、悲しい、苦しい事ばかりに、妾は泣きに泣いたのである、けれど、つひに、張り裂けむ計りの胸を押し靜め、亂れに亂れた心をも押してたへて、今宵朧の月を便りに、此の故鄕を去る事に決したのである。

あゝ、その胸のせつなさは。

折りも折りとて、遠山寺に撞き出す入相の鐘は、其の音、其の響、細く……哀れに……長く……幽かに……、思に惱む妾を、さながら魔界へひき入るゝやう。

漸く心をとりなほした妾は、父上や母上、お友達に別れを告げやうと、我が家の方へしどろもどろ歩を進めた折、颯と吹き來る夕風に櫻の花二片三片、妾の頰を撫でゝ、水面に落ち漂ひつゝ、遠く流れて行のである。あゝ。

（兩評）いかなる義理の爲めなるか、父母につげずして去るは、ちと容し難けれど、筆はよく整ひ、其の情はきこえたり。人とす。

秀逸

○雪の夜

越後長岡　前崎照子

はら〳〵と窓うつ小雪の音、身にしみ〳〵と、心細さも寒けさも、いやまさりゆく今宵。つねにいぎはし給ふ父上の、珍らしくお留守なるに、母上さへやみがたき事のありて、近きわたりながらいでまし〻跡は、唯一人淋しうも、火桶かこみてあれば、いとゞ降りしきるらし、折々ふぶきかくる音に、そゞろ思ひやらるゝは、北支那の荒野。昨日今日、いかに吹雪するならん、

進軍の喇叭の音、いかにきゝなさるゝ、哨兵の寒けさはたいか斗と、はてしなき想像の海にたゞよひては、いつ彼方の岸につくともおぼつかなき折りしも、文やよりとて、女子文壇さしいだしぬ。いと嬉しく、見ぬ先より、とかく思ひつゝひもとけば、雪にそびゆる松が枝の氣高き、白梅の凜たる、櫻花の美しき、さては、すみれ野菊のやさしき、或は、牡丹の艶なる、はた、此の頃の月のさえたるに似たるなど、とりどりあやなす筆つき、いかに樂しかりしか、わけてもなつかしき友なる雪子の君がものし給ひし朧夜の許にといへる文、幾度くりかへされしか。さ程ならぬ文にさへ、とはれしはうれしきを、ては、言の葉に置く情の露のそれのみか、山櫻に花すみれ、春の錦をそへられたり。君が心殘し給ひし朧の月影も、いかで匂はでやは。あはれ、これに似たる文、否君より給はりし去年の春の、わらはがうれしき思ひ、いか斗なりしよ。しかも、同じ梢に匂ひし山櫻に、同じ根元にもえいでし花すみれに、み情深くも、巻きこめしこの櫻花、君がみ手に届かむ折りは萎れはてなむのみ歌そへてたまはりたる。折りしも病床にありし身は、右と左に花抱きて、いかに味はひけん、松尾あたりの春を。唯うれしうも、なつかしう、美しき山櫻に似てか、はた、床しき菫にかと、未だ寫繪にさへ相見ぬとて、君が御容姿、心にゑがかるゝも、樂しき事の一なりしか、そを又、繰り返さんとて、遂に、給はりし歌書にはさまれしを取りいづれば、これも、君がみ手にふれたる、山吹の花一輪、こぼれぬ。黄金の光りまばゆけれど、哀なる鶯の晩春の一聲さへ、思ひ合されて、いかに淋しかりしか。ひきかへ色さへ香さへ、あせていたくも萎れたれど、いづこにか殘る春の匂ひの懐かしさ。さてもいまだ、わらはか君に送りし紅白二輪の桃花よ、いかにかして君に從へつゝありやと思へば、いひしらずこの花のいたはしうて、見いりつゝ、在る折しも、花咲ば告んといひし山里と唱ふ聲。あはれいつ、長閑く國民の誠にうたふ春は。

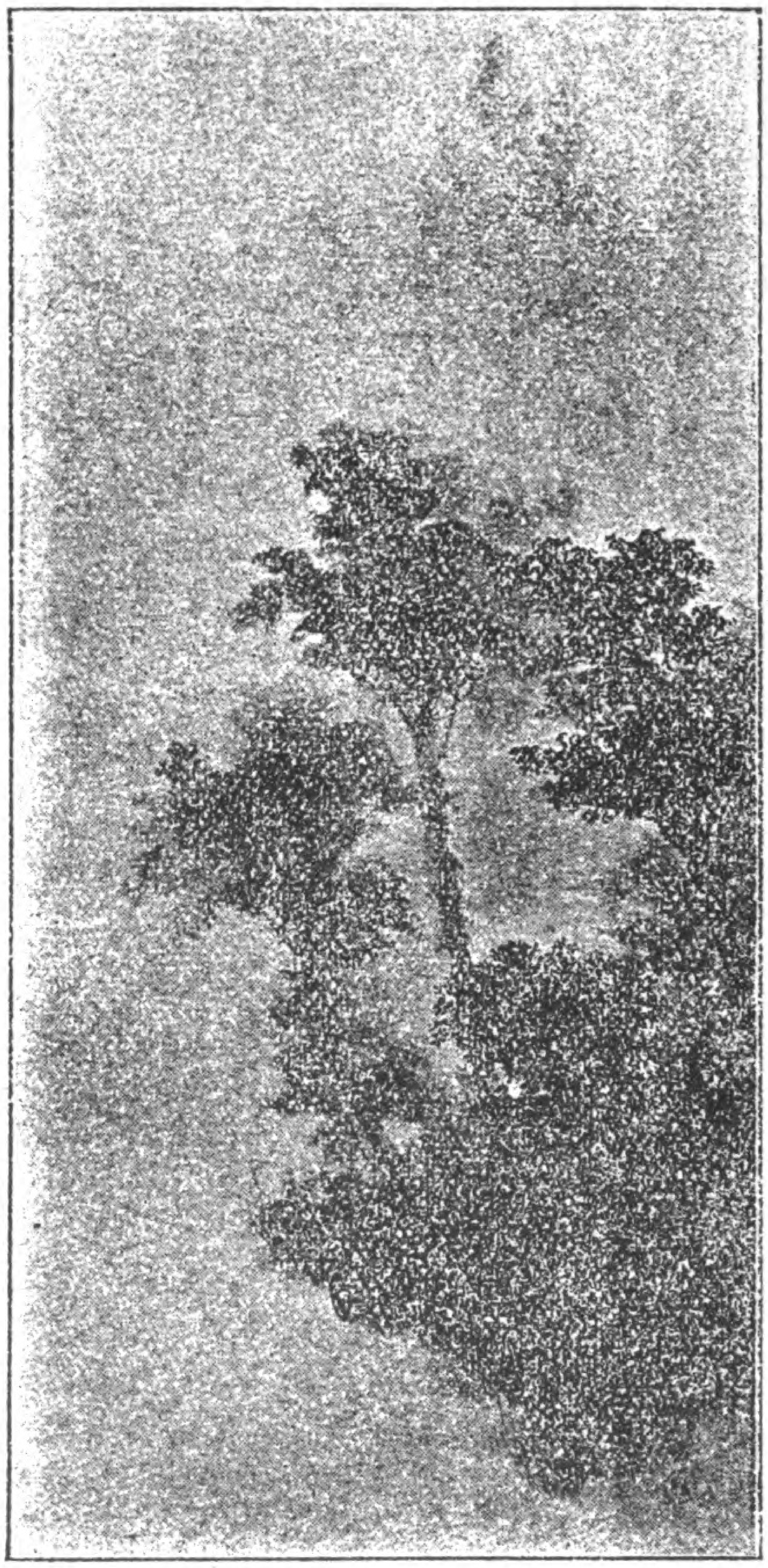
（雨評）美はしき才も見え、やさしき情もきこえたり。雪夜誠に淺からぬ思ひ、ゆかしと申すべし。

○待つ心

熊本市　富重星の家

窓の障子に映る日影も、やうやううすらぎゆきて、戸外をふれゆく豆腐賣の聲もきこゆるに、入相の鐘さへ、つげわたりぬ。しばし前、買ひ物にとて出てゆきたま

ひし姉上の、さてもかへりの後きことよ。夕餉の支度も、はや整ひつるに、待てど〳〵かへり來まさず。いくたびか、表を通る人の足音に、これか〳〵と怪しみぬれど、皆中には入らで、うち過ぎぬ。さては、戸口にたゝずみて、かなたより來る人こそ、おほかたそれならむと、頻りにもだゆれど、皆姉上にはおはせず。はては、表の方へゆきつもどりつ、それも、あはれ、いくそたびにかなりけむ。父上の居たまふ頃は、かゝる淋しきことはなかりしかど、父上、みいくさに召されて、遠き満洲の奥深く、首途したまひてよりは、いぶせき伏屋に、姉上とたゞ二人の住居の、いみじく淋しくて、姉上出でまさば、われ一人待つ身の、わびしくてわびしくて。さるにても、姉上には、まだかへりたまはぬにや。何事をなしてか居たまふらめ、御歸りのかくもおそきは



青雨　竹田敬方氏畫

日ははや西の山にかくれて、黒ずみたるその麓の里には、こゝかしこに、白き煙幾條となく立ち登れり。晩鴉二つ三つ、塒に急ぎゆく。姉上のなほもかへりまさねば、家に入りて、燈火どもともせるに、折りから表の戸、がらりとあきぬ。立ち上るももどかしく迎へ出づるもあわたゞしく、おう姉上か。おう姉上か。

（雨評）姉を頼み姉を思ひ姉を待つ妹が淋しき夕ぐれの情、先づやさしうきこえたり。

○雲のゆくへ

京都　竹下季子

S言はず東風吹く春風に……胸の思ひを語るとて…………、胸の底迄しみ入る様な清い〳〵聲て、梅の梢を

洩れた此の歌。嗚呼、我れは何故終生忘れる事が出來ぬのであろう。春が來て、庭の梅の花が咲く時分に成ると、我れはいつも此の歌を思ひ浮かべて、幾度と無く熱い涙の袖を絞るのである。嗚呼、今歌の主は何處の天地をさまようて居るであろうか。思へば、思ふほど、露子は不運な女であつた。身は一個田舍乙女と生れ來て、清浄無垢なる山水風月の間に人と成つた彼女は、一度人生の愛情なるものを知つてよりは、美しき希望とやさしき願ひが燃えそめて、女神の如き彼女を、あやしく煩悶多き人と成さしめたのである。而て、可憐なる乙女彼女は、遂に戀の惡魔に弄せられて、命までもうばはれてしまつたので……。語れは永き事乍ら、露子が生前十八の年、命迄もと互ひに誓ひし同郷の富豪の息子に、山川緣なる青年があつた。たとへば二羽の胡蝶にも似て樂しげに、村の若者等がうらやみの種と成つて、共に〳〵行末ののぞみを心に畫いて夢見て居た。が、……露子が爲めには、只一春の影と消え果てゝ、戀しき山川は東都へ遊學の身と成つて、露子が十九の秋、悲しき袂を分つたのである。雨の朝、月の夕、都の空のみ眺めて、戀しき人の上のみ思へる彼女、貞操かたく溫和に、ひたすら身を愼みて、山川が卒業の曉を、一日千秋の思ひで待ち焦れつゝあつたが……何たる天は無情なる者ぞ。露子が理想のとげらるゝもやがてと思ふ年の冬より、戀しき人よりの音信は絕え果てゝしまつたのである。……露子が出した手紙の空しく返された五回目に、彼女は微き笑みを浮べたのみ。移る年月、花笑ひ鳥歌ふ世の春が來ても、山川はさていづこへ行つたやら、雲の行方の其れよりもはかなくて……。性言葉少なの露子は、一層無言の人と成つて、昔山川と語り合つた山の麓を、たゞ一人そゞろ歩きつ、古き夢を繰り返すのを好んで居た。けれど、一度落ち入つた失望の淵よりは、永久に出づることと能はぬ可憐なる彼女は、花に殘した一節の哀歌を名殘りとして、二月餘りを病の床に、遂に歸らぬ客と成つてしまつた。彼女は言ひぬ、只、山川様の末期の水をば得んとして、彼女は言ひぬ、只、山川様の幸福を祈ると……。嗚呼、どこ迄やさしい女であろう……。さても、山川緣は何處の空にさまようて居て、此の夜如何なる夢を見たであろ……か。

（雨評）不幸なる露子を思ひいたむこゝろはきこえたり。少しく熱涙の足らざるををしむ。

○樂しき我家

紀伊　松山孝子

廣き世界をさがすとも、我家に優さる家はあらじ。神

の我れらに與へたる星辰日月は、朝も夕も影のかくるゝとなく、我家をてらすなり。てらさるゝ我が家をとりまく神よりあたへられたる、もろ〳〵の樹は、都人の得吸はぬ清き新しき靈氣をはきつ、汚れたる空氣をすひとりつ、たえまなし。しかも、たえまなくうつりかはる春夏秋冬、其の時にしたがひて、神の命を古も今も違はずに飾を添ふるなり。飾るは何ぞ、何ならん。白きみ雪、錦の木の葉、あるは翠を彩り、あるは花を摸様に織ひ列ね、あるは蝴蝶を描き、あるは囀鳥を寫し、あるは匂を移すなり。そはまことに天地のあらん限り、消え失することなく、變ることなく、後の山を出でゝ前を流れゆく河水の如し。たとへ異郷の巷にさすらふとも、我が目をはなれず、わが心を去らず鳥の音と共に我れをなぐさむるなり。あゝたのしき我が家！

（評）辭は未だ足らざれど、其の辭の連綴に一寸面白きところあり。

○菫より胡蝶に

宮城縣　大槻八洲子

惡しき事とは知りながら、羨ましきまでに睦じき、いましらが優しの御物語、聞くとはなしに耳傾けられて遂殘りなく承り申し候。然り乍ら、親代々の昔より、同じ春野に芽え出てゝ、歌に繪にならび稱へられつる君と妾とは、あやしうも離れ難なの縁故ある仲にしあれば、あながちに見ず知らずの他人にも有るまじう思はるゝに、願くはいさゝ小川の行く水と、清く流して賜はらんこと、深くもほりする所にこそ。

さてとや、君の御物語の中に、世にも心憎き小鳥奴が、朝餉の糧とや君を得んとせしを、早くもかたへの花陰に御身を紛らして、危ふく彼の觜を逃れ給ひしとか。聞くだに戰慄かるゝを、まこと臨みし君が御心を思ひやれば、一入恐ろしく候よ。されば、此の後とも、能く〳〵四邊に心を配りて、不慮の禍に陷り給はざらんことを。

又、之れとは異りて、いとも心嬉しく承はれるは、何處ぞやの第の築山に、春をなやみに籠り居給ひしいと痛はしの姫君をば、君が一手の美はしき、羽衣舞の舞振りに、春の初めの微笑を漏させ給ひしとの御手柄、誠にめでたき事に御座候ふ。又、尚一つの御物語によれば、あまり、あの日は麗らかなるに、事の外舞ひ疲れて、花野の末に逍遙ひ給へる折しも、まだ年若き男の子一人、君が御姿に見とれてや、たゞ微笑みて口の中に『菫孤蝶の戀なりて、春の……』と何やら誦し行くを見たまひしとか。そは大方、世に謂ふ詩人とや申すものと思ひ侍り候ふ。そは常に君や妾を愛して、熱き情の御泪をそゝぎ給ふ方なれば、君が再び逢ひ給ひし時は、日頃の御禮の幾分とも、我が野の美しき秘密を

呼び給ひて、彼の君の幸多からんを祈り給へかし。あゝ、かくても思はるゝは、野の神が春を飾り給へし御心の樣々なることよ。その故何となく問ひ給ひそ、君は翼の向ふが儘に、春をたづねて、暖かき風のまにく、雲井の宮や、花の野と、ひねもす樂しく舞ひ暮し給ふに、妾はたゞ來ん春も來ん春も同じ根に泣くのみにて、羨み奉つるも及ばぬ、愚痴に候ふかな。されば、我が慕はしの胡蝶の君よ、彼の、世に謂ひなせる諺にも、一樹の陰に憩ひ、同じ流れの水を掬ぶも何にとやらの緣はあるとかや。まして、一夜の宿奉りし中なるに、願はくは、朝夕の御途次にても訪ひ給へ。ひねもすの珍らかなる御物語をも漏らし給ひ。舞ひ疲れたる羽をも憩へ給へよ。妾は常に首もたげて、君の來まさん方をのみ眺め暮し申し候ふ。

わけて丈高き蕾の莖に、この文結びて、早く御目に觸れんとはすなる。あなかしこ。

(雨評)　やさしき菫の情、さこそ胡蝶のうれしときくところなるべし、

○亡友の墓

府下　小寺都女史

うつせみの世の中に、あはれにかなしき事、はまの眞砂の數あれども、死にまさるものはあらじかし。人の命は、葉末にむすぶ白露のはかなきものとはきゝつれど、學びの道に千年を契り、春秋なほ多き友の、恨みを含みてうせにしを思へば、いかでかなしからでやは。ある夜月いと明なるまゝ、そが光に書など見てありしが、物思ふ身には、美しき月もいとかなしく思はれて、またも友の墓へとこゝろざしつ。

木の間の月に、青く白くてらされたる墓標、いまだ新しき墨のあと、ほのかに匂ひて、かさなれる亂塔の中に立てり、あはれ、友の君よ、事なくおはしますか。思へば、浮世は夢なれや。

いつの年にかありけり、今宵の如き月の夜に、君は得意の笛とりいでられつ。我れもと思へども、さる雅びたる事知らぬ身は、たゞ歌など口ずさみて、こむ年もかくの如きたのしみをつくさむと誓ひおきしに、月はむかしの月ながら、君はまたもとの如くおはせぬかなしさよ。君はかつてのたまひき、月こそまことに淸きものなれ、心はかの月の如くすみ、名はかの月の如くかゞやきてこそ、まことの人とはいふべけれ。われはかの月の如く心淸かりなむ。かつ、名もかの月の如く輝さむと。あはれ、君が言の葉はあだなりき。君よ、は心こそかの月の如くあれ、遂に大空たかき名をあげ得ず、靑雲のたかき希望を懷きながら、空しく二豎の神にまねかれて、この苔の下にひやゝかにねむりますら

むこと、いかばかり本意なく思ひ給ふらむ。思ひかへせば、われ、君が臨終の床にはべりし時、はや魂は彩なす雲の上にのりて去りにけむ、呼べど叫べど、いらへもしたまはず。君がたらちねのいたくなげき給ふさま、見む事の心くるしくて、顔そむくる折しも、日は入りて月は上りぬ。君が曾ての言の葉思ひあはせて、はては、月をば君が面影とぞしのびそめける。あはれ末のつゆもとの雫、後れ先立つ世なりとはいへ、只ひとり後れて、このなげきにしづまむより、同じ道たどりて、もとの如くたのしく語りあはむ方や、中々に心やすかりなむ。あはれ、空たかくすめる月よ、もし心あらば、なき友のみ影をうつしてみせよなど思ひつゞくれば、かなたの庵室より、松風にたぐへて、尊き讀經のこゑするは、あはれわが友を弔ふにかと、いとたへがたきに、あやしき雲忽ちはしりきて、友がかたみの月さへかくしぬ。名殘はつきじと、いつもながら涙の玉のみ手向けて、家にかへり、打ちまどろむ程に、あなうれし、あやしの雲はまたくはれて、ふたゝび月影あざやかに洗ひたるが如し。

（雨評）新しきふしなきををしむ。



○思ひ出の記

伊豆　土屋優香

軒をめぐる雨だれの音さびしく、床の椿の花音なきに散りて、靜なる夜は更けぬ。よむ文にもあきて、あらぬ方などくりあくれば、栞とせし美しき貝のこぼれ出でぬ。おゝそれよ……、思ひは遠く三年前にさかのぼりて、其の頃の事の目のあたりに、あり〳〵とうかび來つ。

一昨年の夏なりき、ふとせし風邪より、病をえて、醫師のすゝめにまかせ、かの風光佳絶なる嚴島に病を養ふ身とはなりぬ。おだやかなる海の面の、あなたには、漁する舟の二つ三つ、舟歌淸く澄みて、餘韻は遠く浪の音と和す。かなたの島かげより出でし一團の浮雲は、風のまに〳〵中空に漂ひ、宮の大鳥居は今しもみちし綠の浪の中に

乾然とそびゆ。貝など拾ひて、松原の砂にやすらへば、身は此の美しき自然によりて、夢の如く病も忘られ、樂しかりしよ。

親切なる宿の主が、浮世がたりの凉臺に、弦月は凄き光りをなげ、琴ひく濱の松風は、潮の香を送り、妻よぶ鹿の哀れになく聲と、ともに、身に浸みて、故鄉戀しく、友なつかしく、はらから無くて、病に惱める己が身の、そゞろ悲しく、涙をもよほして、母君をまで氣づかはせまつりしよ。あゝ、されど〳〵、なつかしきは彼の地よ、忘られ難きは彼の島よ。今は全く病癒え、舊にもまして健なる身となり、一時は望を捨てたりし學びの道も、嬉しくたどらるゝを得るやうなりぬ。是もひとへに、彼の島のたまものになむ。

（雨評）別に取り立てゝいふべきふしもなく、またさして難ずべきかどもなし。

○離愁

青森縣　新谷竹子

妾の家は、西行法師の外ヶ濱千鳥なくなり野田の玉川のほとりにありやして、海人の苫屋のいぶせき住ひてあります。家には老いたる母上と一人の兄さんがあるのです。母上は六十路の坂を九つ程も越え給ひし身てあるのに、元來病身てありますから、見るかげもなくまでに衰へなされて、心細く思はれますよ。それで、兄さんも一方ならぬ御心配で心配で堪らんのですよ。「兄さんも、今日はいつもより早く歸られて、妾と二人て母上を慰めて居りましたの」。折しも、外に人の足音はするから、出て見ますと、五十好恰の人夫躰の男、赤狀袋の手紙を持つて參りました。妾は此の時、兄さん動員令がと云ひ出でんとしましたが、はつと思うて止めました。あなたがた。妾の心を察して下さい。兄さんが取る手遲しと開封すれば、正しく動員令て、明後日出立せねばならんのです。兄さんも妾も、兼て覺悟はして居りましたもの、何で悲しからぬことはありませうよ。せめて父上樣でも御在世たなら、左程でありませぬ、が、妾が十の冬、持舟て青森に航行せられた途中、山背と云ふ風に吹かれ、逆捲く濤に舟は打ち寄せられ、高野岬と云ふ所て、舟躰微塵に碎けて、父上外船員三人は、底の藻屑の消え失せたのであります。殘りし母上も、其の後、それやこれやの心配から、遂に病をおこして、昨日今日の御容躰になりなされました。

浮世は厭いものてありまするけれども、妾の身にとりましては、杖とも柱とも賴むべき兄さんより外にないのてあります。あゝ、唯一人の兄さん……、明日は死出の旅路に、いたつきなやめる母上とわかき妾とを殘して出て立たるゝのですもの。

しよぼしよぼと降り來る春雨に、庭の櫻二片三片散り落ちぬ。遠く近く鐘の音は、義經寺の境内から響き渡り、さらでも悲しき思ひは、胸一ぱいになりまして、夢中でありましたよ。妾は兄さんに見られると叱られますから、泣くまいと心を勵まし、せき來る涙をおさへては見れども、悲哀の涙滾々として止め得ないのであります。

いつもなら天津乙女の奏する春の曲かと思はるゝ小波の音、磯つたひに生ひ茂りし松風の音今は死の神の御聲の其の如く、悲しく聞ゆるのであります。

今迄降りしきりし小雨はれ、雲足早く西に流れ過ぎて、明月朧然として大間の岬に動き出した。

昔の人は

　月見れば千々に物こそ思はるれ
　　我身一つの秋にはあらねど

と歌ひましたが、秋ならぬ此の長閑な春の夜に、月に思を碎く妾の身、何たる不幸兒でせう。あゝ人の運命程果敢ないものはありませぬ。果敢なき思ひより、我にかへれば、月はさやかに海面をてらし、さながら銀の板を延べたやうであります。

折しも、誰れかすさびにか遠く聞ゆる離愁の曲、相見てし其の時は、かくまでとは思はぬよ、別れにしそれよりは、思ひなほいやまさる。曲一曲、或は高く或は低く、余韻嫋々として、妾の膓を斷つのである。

（兩評）其の情は聲にきこえて候。

●ロシヤの箱入娘

森鷗外氏陣中作

一

西施楊貴妃生ませた親の自慢娘の旅順ぢやけれど
昔し口説てツイ落たのをいつか忘て養女にいつて
今ぢやロシヤの箱入り娘落ちぬ噂さが世界に高い

二

鐵條網の八重の關すゑ掩蓋深く姿も見せず
水門口から忍んでゆけば探海燈の目でおどしつけ
今ぢやロシヤの箱入り娘落ちぬ噂さが世界に高い

三

勸降書といふ附文見てもけんもほろゝのすげない返事
親に頼んだ白だすきさへ途中まで往て追かへされた
今ぢやロシヤの箱入り娘落ちぬ噂さが世界に高い

四

今ぢやロシヤの箱入り娘落ちぬ噂がよし高いとも
昔し落した馴染ぢやものを今度落さにや男が立たぬ
落ぬ靡かぬ名代のむすめ日本男子が落して見せう

五

戀の邪魔するクロパトキンが沙河の向ふでもぢ〳〵する中
こちやお先へもうお正月屠蘇の機嫌で口説いて見たら
落ちぬ靡かぬ名代の娘が又もころりとツイ落された

消息文

塩井雨江先生選

天

○花の枝にそえて友の許へ

越後長岡町　前崎照子

花さかばとの御言の葉をのみ便りに、けさは見えさせ給ふか、午後よりはかと、こゝ四五日ひたすら待ち參らせしを、遂にかげさへとめ給はず、花の色香もうつろはんかと思へば、本意ならも、つれなう、病める身にか斗物思はしめ給ふとの、恨めしう存じ候ひしが、いかなる御さゝわりの在してか、はた、お風にても召し給ひしにあらずやと、心つかれては、中々に御案じ申され候を、させる事もなくてか、伺ひ上げ候。こゝには、病に慣れ候やうにて、日頃好める文さへあきはて、唯々琴の音戀しう存じ候へども、今は自かなづる氣力も候はねば、なつかしき音色、あゝ、君ならで誰れに願ひまつるべき。糸の餘りに古びたればとて、かへさせ置き候が、さえたる君がみ手にふれなば、いかなる音をか出し候はんと樂しみに思ひやられ候を、いかで哀れの者と思しやり給はりたく候。今朝よりの雨に、今や見頃の花のうつるはんとの心許なさ色をも香をも知せ給ふとはいへ、散りにし跡のうしろめたう候へば、一枝手折らせ參御目にかけまつる、いかでみ歌の一なりと給はらば、花もはえある事に候はん。さらでも亂れがちなる筆の命毛、いよいよはかなきはこびして、余は何も〱も御目にかゝりてとかして。

（雨評）しとやかに整ひたる筆の中に、多少の花もにほひて、いかにも其の人がらのゆかしく思ひやらるゝものあり。天とす。

地

○近頃入京せる友に

芝西應寺町六十番地　白木菊子

村の土橋に手を握て相別れ參らせしは、去年街道の松並木に蜩の聲哀れなる頃にて候ひき。暑寒につれ、雨雪につれ、兎角に偲び出づるは故郷の空、月にも花に

も忘れかねしは、貴女樣の上にて候。さるを、只折々の音信にのみ、優しき音容うかがひ奉る外を知らねば妾には中々物足らで、同じ年頃の人達睦まじげに語り行くなど見るにつけ、羨ましさに胸塞がり申して候。何時かは增上寺の鐘の音に、夜と共に語り明さん時の來たれかしと、朝夕念ぜし甲斐の候てか、うれしや、貴女樣には、此の程そよぐ春風に送られて、いと穩かに都地へお入り遊ばされ候由、愈よ今は他人のみならで妾にも、誠花の都と相成り候よと、心から喜しく存ぜられ候。今日は訪れ來まさんか、明日は尋ね參らせんかと、水鏡に姿粧ふ岸邊の青柳にもまして、心は千々に亂れて候。貴女樣には、花に狂ふ胡蝶を何と御覽遊ばされ候にや。桃の花信は今日八分の盛りと傳へられ候。のび／＼したる靑麥の間を、菜の花に袂黄く彩られて、蝶追ひし樂しさには、得も及ばず候へども、亦都なりの面白味も候を、まして愛に渴きし妾には、二人して散策するの如何に樂しく候はん、貴女樣には左はお思し召し候はずや、犇しくは御返しを待つて：：：、かしこ。

（兩評）文も整ひ、文才も見えたり。地とす。

（八）

○戰地なる兄上に

兵庫縣明石東本町八十二　白旗清子

兄樣、月日の立つのは、ほんとに早いもので御座います。プラットホームで、萬歲聲裡の内に、永い、お別れしましたのも、はや一年の昔。まだ兄樣の、白いはんかちが、森の中に見える樣です。もう、庭の梅も、咲きました。鶯も、なき初めまして、何となう、春めきましたですが、あれを見、これを見るにつけてもすぎにし年が忍ばれます。

忘れもしません、兄樣と二人で、城山に入つて、すみれをつんだのは、一昨年の春、其の時しをりにせよとて下さいました、花すみれ、私大切にもつて居ります。少しも色は變つては居ませぬ。美しい香り、うす紫の色、どうしてかはりませうか、あゝあの山、あの川、目の前に浮び出でられます、必ず今頃は、兄樣の御袖に、清ひ香りが、通うて居りませう。

（兩評）筆まだこなさなくはあれど、其の情は可憐にきこえたり。人とす。

秀逸

○故郷の弟に送る文

備後　池田しとみ子

谷間の雪、池の氷もおほかた解けて、昨日今日はとみに暖かに覺え申し候、此の分にては、櫻の咲かんも、その中の事と存ぜられ候。尾崎山のあらしも、定めてなごやかになり候はん、御二方樣には、御かはりもなくゐらせられ候か。さて、そなたには、此の春高等小學校に御入學の段、目出度きことゝぞんじ候。入學後は精々御勉强なされ、よく先生の仰せに從ひ、お友達に劣らざる樣、平生より御心がけ肝要とぞんじ候。昨秋移し植えしと聞き及びし紅梅は、恙なく開花致し候か、學びの暇の折々は、よく御注意なされ度く候。暖かになりゆくまゝ、馬洗川にての舟遊び、沙魚釣り、はた、城山の蕨折りなど、とり〴〵に面白かるべく、わけて氏神祭禮の折り、運動會の時などは、一しほの愉快ならんと察せられ、うらやましく存じ居り候。今年は菓實のあたり年なれば、楊梅、梨、枇杷など、あまた成熟致すべく、今より待たれ候事と存じ候。妾とそなたと二人して植え置きし葡萄も、いたく蔓のび候うてならん。ちゑちゃんは、未だ得走り申さず候や。小さき足にて覺束なく、一足行きては倒れ、倒れては又立ち、立ちては歩まんとして又まろぶ樣、目に見ゆる樣に覺えられ候。

昨夜をかしき夢を見候。其方と妾と、いたく口論をなし、はては妾はえ堪へで、其方の頰べたを打ちしに、父上よりいたく叱られ、手をつきて其方にあやまり申し候、夢さめてのち、獨り蒲團の中にて笑ひ申して候。けさ後庭の木立の中にて、鶯しきりに鳴き申し候。御地はいか許かと存じ候。夕日に映じて、うす萠えの草色、一入あざやかに、やがて又、麓の方より墨繪の樣に薄黑うなりゆくる仙養の峰を眺めつゝ、右認めをはり申し候。

（雨評）口論をしたる夢を添へたる、友愛の情なか〳〵に面白く、文も整ひたり。

○故郷の母に贈る文

越中　長瀨きみ子

花のさかりも夢の間にすぎて、まどちかき若竹の卷葉の露心地よき頃と相成り候折柄、母君には、如何渡せ給ふらん、妹なども定めて愛らしう成人せし事と推しはかり參らせ候。私もいとゞすこやかに學の道をたどりつゝ、他の人に劣らじと、心の駒にむちうちて、い

そしみはげみ居り候へば、かまへてかまへてみ心になかけ給ひそ。修業の爲めとは申しながら、海山へだてし都の中に、御膝下をはなれたる身の悲しさには、御傍近く侍りてなぐさめ奉るともかなはず。雨に付け、風につけ、故里の事のみ思ひ出でられ、何となう物淋しう存ぜられ候。心にはいさゝかも怠らず、あけくれふるさとの空のみながめやりて、御兩親樣の御事のみ思ひつゞけながら、學の業のしげきまゝ、ふりはへても み氣色伺ひ奉らず、打ち過ぎ候ひぬる罪、さる方にゆるし給はり度候。御老體の御身をいつまでも、わづらはし候と妾しのび難きわざには候へども、來たらん休みには、御膝下へ歸りて、厚き御恩のかたはしをだに報い奉らばやと、夫れのみ樂しみ居り候。此の寫眞、不出來ながら、すこやかなる姿を御目にかけ候、申上ぐるまでもなきことながら、をりをりのかはり目にはあしき病流行致し候まゝ、御身大切に遊ばさるゝ樣はるかに祈り上げまゐらせ候、かしく。

（雨評）しとやかにまとまりたる筆、其の心も見えてゆかしけれど、文としてはやゝ平凡なるををしむ。

○都の友へ

越後　綾子

露おく四ッの袖を、沼垂停車場に分ちまゐらせ候ひし折の悲しさは、今も尚ほさながらなる心地いたし候を、げに流れて早き飛鳥川とやら、夢の間に年さへ改まり、またもや世は花の時と相成り申し候。君には如何に此の頃を眺めさせ給ふらん。佐保姫の情は、ここ山里にもあまねく候て、彼方の丘も此方の堤も、ただ白雲のそれのごと、ソヨ吹く風にもただならぬ香の送られ、野には菫蒲公英蓮華草など時を得顏に咲き亂れ、雲雀は空に、胡蝶は花にうたひつまひつ、長閑なる此の春景色、去年まで共に袖をつらね、青毛氈敷きつめたらん若草の上や、櫻花咲く下陰に興じ合つゝ、流石に長き春の日の暮るゝも知らで、母樣のお迎へに驚きし事も、まゝ有之候ひしを、今は斯く幾重の雲にへだてられ候ては、花のあした月の夕べ、一入君の忍ばれて、東の空のみ打ち仰がれ、かひなき袖をぬらし居り申し候。今日ゆくりなくも、此の景にふれ、いとゞ懐しさの余り、丘の櫻に野の菫、二花三花封じ込めまゐらせ候へば、せめては故郷の春を思ひ浮べ給ひて、學びの間もあらせ給はゞ、兼て御たしなみの御歌ども賜はらば、ひとり花のみの面目ならで、妾の喜び如何ばかりか。そを汲せ給はゞ、いかで一ひらのお返り事を、な惜しませ給はでや。

（雨評）筆も整ひ、情も整ひ情もよくきこえたれど、新しく取り立つべきふしなきををしむ。

○都のもとに

徳島市　住友登喜子

あはれなつかしき花子の君。

春景色至らぬ隈なきけふ此の頃を、玉敷の花の都には、いかに暮し給ひつる。好ませ給ふ學びの間には、香ばしき花の下を、親しき友と逍遙し給ひてか。いぶせさ田舍の學び屋に通ふ妾も、ぶじに候へば御心ゆるべ下されてよ。さて、今日は空も朗かに、ふく風もいと心地よう候まゝ、むつるゝ蝶の行へにあくがれ、一人家をばさ迷ひ出でて候。去年朧夜君と戯れ遊び候ひし月見橋の柳は、煙らむばかり芽出し、山邊の野は黄金紫紅に、花美しう咲きいでゝ舞ひのぼる雲雀の影も、いと長閑かに面白う候、されど、何につけ、親しき御許さまと共ならぬの恨みを覺え、ゆるう流るゝさゝ川に、はからず姿寫しては「春の女神の秘言か、はたまた戀のさゝやきか」と、君が美聲に歌ひ給ひし歌の一節、今猶耳にあるやう思ひ忍ばれ、御なつかしさに堪へえず候まゝ、せめて筆にても申し述べばやと、とく歸り、文机に向ひから染め申して候。

別封の寫眞は、戀しき君の御面かげ拜したきまゝ、やつれし妾の姿を、恥かしさを忍び、御目にかけ候ふなれば、昔の契をあはれみて、君が寫眞一葉惠み給ひてよ。此の卷きこめし花の、去年御許樣と共に賞でし吾庵の櫻にて候が、思ひつきしまゝ送りまゐらす。申しあげたきことは澤山に侍べれど、これにて筆とめかし。

あゝ、何時のひまにか、春雨いとしめやかに降り出で候。封じえらるゝものならば、この春雨も參らせんに。いざさらば。

（評）末段春雨の趣向は一寸面白けれど、これを以て文を結ばんとせば、前段に春雨を出だしおきて照應せしむるをよしとす。

○借りたる書籍を返す文

宮城縣　齋藤たまを

一筆走り書にて、いと失禮ながら、用事のみ聞え上げ候。扨て〱、靜子樣大變な事が出來申し候。妾は何と御謝び申し上げてよき事やら、最早分別もつき申さぬ程に御座候。何卒御許し下され度く、地に伏して御願ひ申し上げ候。そは昨日の夕方の事にて候ひし、御拜借の御本、面白く拜讀致し、讀了候儘、伊助歸り來なば持たせて御返し申上げんと存じ、本はそのまゝ机上に載せ置き、妾は植込に參り、五葉松などを眺め、又南天は雨後の事とて、實も一隨目だち紅深う匂ひ渡れるに、輝やく露の白玉は、其の葉面に葉末に並びて、實と紅白の美を競ふ樣、得も言はぬ眺めに候儘、我ながら見よと云ひけん露の玉をば落しつ、一目なりとも御覽じ賜はらんものと存じ、振よき一枝を手折り居り候

處、「姉ちやん〳〵」と室内より妾を呼ぶ正ちやんの聲に、「ハイ」と答へて一枝を手にし室内に戻り見候處、こはそもいかに、こは如何に、正ちやんが正しく机前に座りて、御本の表紙へ……、あー、靜子樣、斯くの如くに致し候。妾は御申譯なさ、悲しさ、腹立しさの餘り、「正ちやん、お前ですか、御本を斯んなにしたのは……」と、目に角立て、散々叱り申し候處、「僕、書いたの、字」と幽に泣きさうな聲して答ひ申し候。誠妾を呼びて賞められんと思つて書きたるなりしならん、に、さなればこそ呼びもしたらんに、そを案外にも……と思ひ返せば、可憐さ餘りて、叱る事も得ず……只々……、あー、靜子樣、實に濟み申さず候、御申し譯も無く候。昨日より、あー、どう仕樣〳〵と云ひて、只今迄て机上に向ひ忙然致し居り候。されど〳〵、いつまで斯くしつるとて、墨の消ゆる譯もあらねば、御謝びして御許得んには……と存じ、面厚がましくも、進まぬ心に筆取りて、誠意を捧げて御謝び申し上げ候。御秘藏の御書物を、御腹立あらんは、御尤に候へど、妾が胸をも御察し下され、御許あらば、此の上の嬉しさとてはなかる可く、魂も天外に飛ぶとは、み許賜はりたる其の曉の妾の心に候べし。先づは御願ひまで斯くの如くに御座候。猶此の女子文壇は、今月發行の物、二冊求め候儘、御分け申し上げ候。南天は少しく色褪せ候へ共、御文机にもかざし賜はらば、幸甚の至りにこそ。あなかしく。

（両評）其の情はよくきこえたれど、雖洗煉を欠くところ多し。

○おとッちやん

明石　茶谷喜美子

お父ちやん、早く歸つて頂戴。

家の庭の梅は、きれいに咲きました。毎朝鶯が來て啼きます。父やちん、此の梅の花が散つて、實が黄色になる時分には、歸つて下さるの。妾はうれしくッて、毎日待つて居ますわ、ヱお父ちやん、ほんとなの。今日學校で滿洲は大層寒くて、兵隊さんは皆土の穴に住んでゐられると敎へられました。お父ちやん、風を引かない樣にして頂戴。早く露西亞を征伐して、歸つて頂戴。昨日も義雄が「おとッちやん、どこへ行つたの」といつて、お母さんに縋つて、針仕事の御邪魔をするのですもの。妾は「おとーさんは鐵砲や劒を買つてお歸りになるよ、さあお迎に行きませう」と、鐵道の側まで來ますと、恰度汽車が來まして、兵隊さんが澤山に乘ッていらッしやいましたものですから、義雄は喜んで、「おとッちやん、歸つた、おとッちやん萬歲」と、手を擧げますと、兵隊さんも「萬歲」と國旗を振られました。義雄は喜んで踊りました。

汽車は黑い烟を殘して、森蔭に隱れて仕舞ひますと、義雄は「おとッちやん！ おとッちやん！」と泣き出してしまつたのです。妾も悲しくなッて、共に泣きました。

お父ちやん、こんなものですもの、早く露西亞を退治

して、歸つて頂戴。

おかアさんは毎日田甫へ行かれます。妾も學校より歸ると、すぐに田甫へ行きます。おッかさんと共に日の暮れまで働きます。おとッちやん!、麥は大そう大きくなりました。麥苅の頃には、歸つて下さるの。でないと、おッかさんが、大そう難儀なされますもの。

おとうさん、早くロシアを退治して、かへッて頂戴。又おッかさんは夜おそくまで、針仕事をなされます。妾は讀本や算術のおさらひをして、義雄に桃太郎の話などを敎へて寢させます。朝は夙く起きて御飯を焚きます。お休みの日て、お隣りの花ちやんや光枝さんたちが、美しい着物を着て遊んで居られても、妾は田甫へ行きます。少しも辛いことはありませぬ。只お母さんも義雄も妾も、毎日〳〵おとうさんのことばかり話して、一日も早く惡い露西亞を征伐してお歸りになるのを待つて居ります。

おとッちやん、からだを大切にして、病氣におかゝりにならない樣に、一日も早くわるいロシアを亡ぼして歸ッて頂戴。只そればかりを、毎日〳〵西の空を睨んで待つて居ります。

(雨評)　可憐なる少女の情、やゝきこえたりと申すべし。

○戰地より妹に(兄に代りて)

札幌　ゆかり女

故郷に居るなら、今頃は文さんと二人で、若菜摘みてもして居樣といふのに、此方では未だ白雪皚々といふ有樣だ。雪は未だしもだが、朔風と來たら、防寒具も何もあつたものぢやない。ピユー〳〵とウナリを立てゝ、耳とはいはず、鼻とはいはず、凡そ其の行手に有るものは、皆其の利刄で殺ぎ去るかと思はれる位。ロスキーの鐵砲の玉より、此の方が幾ら恐ろしいか知れない、然し、僕だけは此の勢力範圍から免れ得べき或る物を持つて居るから、安心してお呉れ、……とばかりでは、何んの事だか解らないだらう。文さん、其の譯を話さうか。譯をいへば、斯うである。

過日寄贈毛布の分配があつた。僕も其の一枚を得たが、何心なく手に取て見ると、驚いた。其の片隅に附いて居た少さい紙切に、水莖の跡も美しく、……何んと書いてあつたと、文さんは思ふの。實は○○國○○町○番地高松文子寄贈。之れが驚かずに居られ樣か。オヤッと思うて、能く〳〵見れば、正しく見覺えある白毛布。計らざりき、萬里の異域で、文さんが春の朝、秋の夕、可愛がつて呉れた此の毛布の君に廻り逢ふとは。げに運命の神の奇しきかなと、其の時は無量の思ひに打たれたよ。其れからといふものは、鍾愛苟しくも怠らず、毛布の君は、文さんの優しい手から移されて、僕の武骨な手に、陣中の寶として珍重せらるゝ身となつて。といふ樣な譯て、朔風が如何に猛烈だらうが

何に、文さんの情の籠つて居る此の毛布の君が付て居るから、心配しないでお呉れよ。失敬。

（評）趣向は一寸面白けれど、情熱の足らざる心地す。筆もなほ一段の推敲を要するものあり。

○櫻見に誘ふ

千葉縣　すみれ子

霞たつ春の山べは遠けれど、吹きくる風は花の香ぞするとなん、古の人のよみたりしは、げにうべも春の心をよみたるまのかな。枝もならさぬ長閑けき空に、たな引ける霞の奥ぞ、いよ／＼ゆかしきに、えもいはれぬ香をしめて吹きくる春風の我れをさそふとおぼゆるにいよ／＼たへがねつ。且は鶯の和音をかしき梅がさかりは、學びやの一年の一里づかともいふべき試験にせきとめられ心やりとはいひながら、香もなき簪に鶯をむかへ待りたれば、今は中々に猶豫なしがたく、明日は幸日曜なれば、霞に匂ふ花の吉野をわけ行きて、一日を小蝶の夢と過さんと思ひ立ち侍りぬ。心なき春風や、花誘ふあらしの、いつ誘ひ來んとも計りかたければ、花の旅寢は明日よりとてそきめ侍れ。君にも如何で思ひ立ち給へ。隔てなき友とつらねて、花の玉ともいはるべき櫻花を、心長閑に分け行かんは、如何にたのしかるらめ、君の疾き御うべなひを、ひたすらに請ひ奉るになん、あなかしこ。

（評）文整ひたりと申す外、別に申すべき方なし。

○出征の夫に送る

栃木　秀子

春と申すも名のみに候て、寒さは未だ去年よりもきびしく候を、わきて、雪ふかき滿洲の荒野に、草枕しまさん御身には、いかに凌がせ給ふらんと、日毎に打ち案じ申し候。留守宅にては、母上をはじめ、皆々いとすこやかにて、家業をいそしみ居り候。殊に一郎のみは、寒さもいとはてはひまはり片足立て／＼いざり出づる樣のをかしさに、見る人毎にふきだし申し候。又腕力もよほど相增し候ことゝて、食事の時などには、しば／＼御膳を轉倒さするなど、此頃の活動實に驚くばかりに相成申候。御丹精なされし庭前の老梅、二つ三つ綻びそめ候も、愛でにし人の在さねば、ゆかしきかをりにつけても、そゞろにそのかみの事ども忍ばれて夢心地いたされ候。只今ふと雨戸を押しやれば、いつのまに降り出しけん、白雪のいたく積りて、見渡す限り、一色の世とかはり、破れ垣の古木の枝も、香はぬ花に一しほの眺めを打らそへ申して候。あはれ、此の地に埋火かき立てゝさへ堪へがたき今宵、しべりやの野べの寒さやさこそと思ひやられ候。かしこ。

○出産を祝ふ文

埼玉縣　茂木なを子

かれてより、今月と承り、よそながら御案じ申し居り候ひし折りから、只今御玉章うれしう、拜見致しまゐらせしに、昨夜いと／＼御平らかに、御産のひもとかせ、御母子とも御障りなく、すこやかに御日立の由、特に御初産の御手柄、玉にもまさる御男子樣にさへいらせらるゝよし、郭公の初音よりもまさりて、嬉しうなん覺えまゐらせ候。ましてや、御父君樣には兼てより男子ならばやとの御望みに候ひしまゝかざしの花も物かはと、父君の御いつくしみ、如何ばかりに候はん、初孫の笑顔に氣も若やき玉ふらんと察せられ候て、御館の内の御賑ひ手に取る如くにて候、早く上りて見參らせ度く候へども、據なき用事の爲め上られかね候間、御初着の料として御恥しながら、黄八丈一反、聊か御祝のしるし迄に進じ上げ候。やがて參上、赤さま抱きまゐらせんを樂しみに思ひ居り候。

あなかしこ。



廣津柳浪先生選

地

○行く春の怨

淡路國洲本町　さよ千鳥

「何だか厭だよ、そりや女學生を一般に惡くいふのは少し酷だけれど、槪して當時の女は矢鱈に戀だの愛だのと。昨日も僕が招魂社の邊を散歩してたと思ひ給へ、十八九の女學生が二人、櫻の下で、いやはや聞てゐられない談さ、あれを淑德ある婦人といはれやうか」

梅野春彦、忌々しげに斯いつて吸さしの紙巻を火入の灰に埋めつゝ、思出したやうに微笑んで

「然し君の御令閨は除外例だよ、第一實に靜淑しいね、愼重深くて優しくて之加美人ときてる、君は美い妻君を娶ひあてたよ」。心中の淋さを秘むとやうに、緋桃白桃春日に傲る庭に見いつた。

主人の秀夫は稍俯向て其濃い八字鬚を弄り乍ら微笑で

「褒められてるのか貶されてるのか分らないね、まア何でも宜い君も早く好い細君を娶ひ給へ」

「いや僕は……」

椽側に裳ずれの音さや〳〵とやさしい足音、夫人靜子であつた。

「よくいらつしやいました」

長の黒髮にリボン艶美とみた昔よりたち優るゆかしさ乍ら、實や親友の夫人である。

「久濶いらつしやいませんでしたから如何なすつたかと毎日お噂致してをりましたの」

「さうでしたか、何毎日でも參り度のですが、何程親友だからつて新夫人の御前もあると思ひましてね」

笑を含んで秀夫をヂロリ、是は身を斜に聞かず顏である、豊頰さと赧うして

「まア大變でムいますねえ、昔からお知合の妾に其樣ご遠慮遊ばしては……」

「昔といへば梅野君、昔の君は中々式部崇拜家であつたぢやないか、どうして今は嫌になつたろう」

「當然さ、當時の式部に女らしい優美のがないのだもの生意氣な奴ばかりて」

「否さうても厶いませんよ、妾の朋友で姉妹の如親しくして居る人なんぞ、それはいゝ方ですの、決して不足のある方ぢやございませせん、奥様にお世話致しませうか。」「有難う、が、僕は生涯獨身の決心なんです」

「まアどうしてゞ厶います？」

蝶二つひら／＼と舞入たか離々に小窓をぬけた、恍然と眺めて人知れず吐息したか

「どうしてといふてもありませんが面倒ですからな、僕は次男だし、獨身の方が氣樂です、はゝゝ」

思ひなげに笑つた聲の妙に寂て靜子には聞えた

麗かな春の日はいつか薄れてしまつたのである

「やアもう晩だな」

「いゝぢやないか、緩りし給へ。」「眞平に何も厶いませせんけど御飯でも召上て」慌しく立上らんとする夫人をとめて

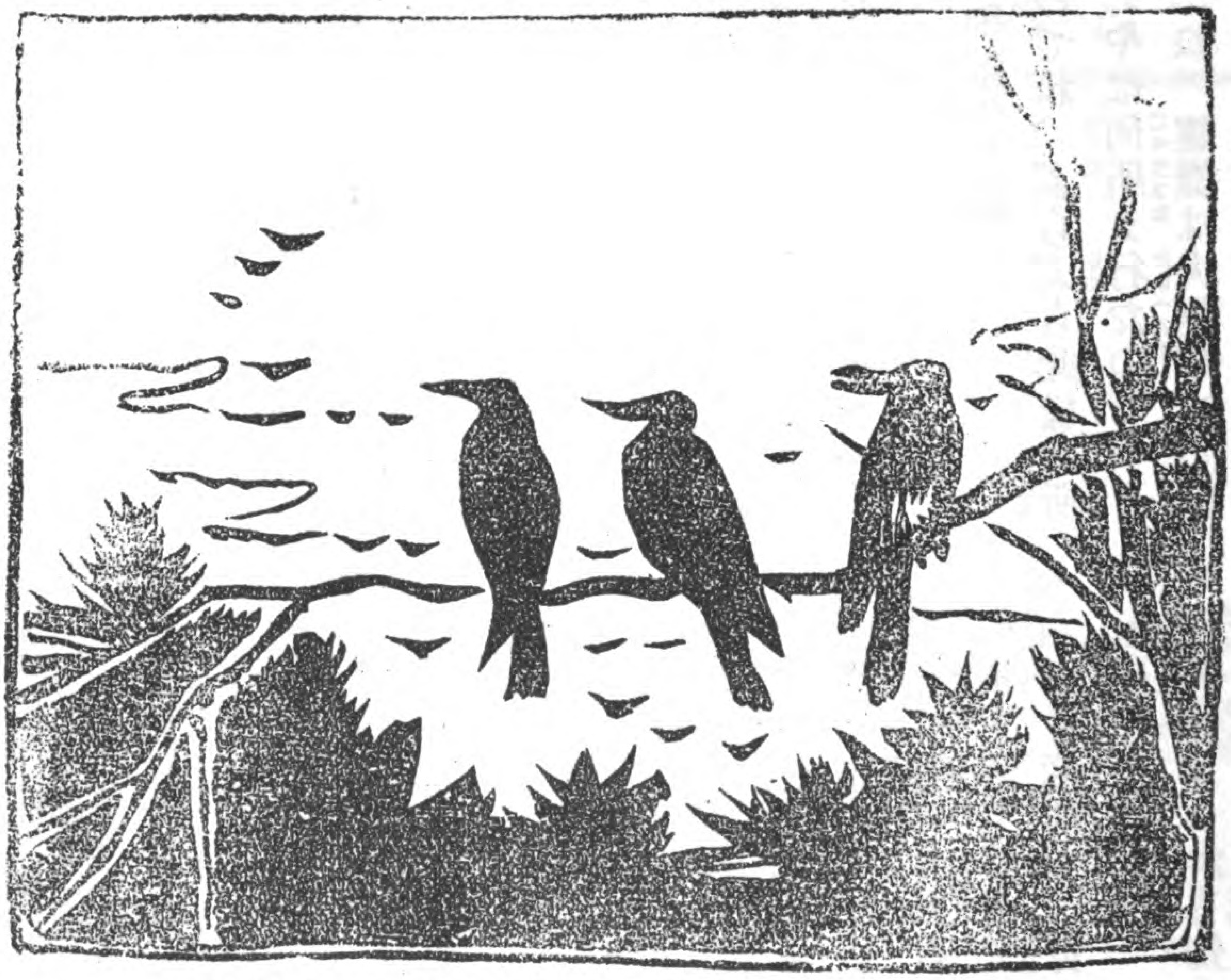
「いや奥様、又今度御馳走になりましよう僕は今日は……」

「まアいゝぢやないか、えゝ君」

強て止めるを振拂ひて庭に下りた春彦は、猶とめんとする夫妻に輕く會釋して

「僕は心底から、眞に御夫婦の幸福を祈る、奥様是が貴女に：…………いや是が僕の眞情です、ぢや失敬」

屹と見上た春彦が二十八の若眉の曇り。心弱く俛首て黄昏の椽に靜子はわれ知らずおのゝいたのである



曙光　〔地賞〕　兵庫縣　山本菊子

構想は一わたり世間にもありふれたものであるが、極めてつやつかな筆つき、一語一句、むだはない、引きしまつて優に作家たり得る技倆を示し

てゐる、淡路島、通ふ千鳥は須磨ならぬ武藏野の都の人が優し名と見たば僻目か。

人

○里の夕ぐれ

下谷區上根岸百二十五　太田樂子

華かな夕日を浴びて里川のほとり、烟る靑柳の下に馬をつないで休んでいる老爺がある。靜かな春の景に醉たか恍然としてゐたが、やがて腰から煙草入を拔き取て、長閑に一服吹した。

「老爺じやないの。」と若い美しい聲。

見ると聲の主は一面黃色く咲いた菜花畑の間から。年は十七八色白の氣高い顏に艶かな髮を水の滴らん計りな高島田に結ふて優しい微笑を浮べ乍ら近寄つた。之は別莊の令孃光子といつて村で評判の美人。

「やあ孃樣」と見上げたが「御散歩かね」

「あゝ、妾餘り能い心持なのでね、ぶらぶら此樣な所まで來て仕舞つたのよ。老爺やは何所え行たの」

「俺は田沼まで行ましたどがね。孃樣は大變來さしつた物だね」

「ほんとに來過て仕舞つだんだよ」

と涼しい目に柳につながれて、下萌の若草食むに餘念ない馬を見たが、鞍に付けた桃の枝を見て。

「まあ老爺は中々、風流なのね。此何所に咲いてたの、好い花だね、妾に一本お呉れ、え、老爺や」

「えゝ持て行かつしやいとも、俺もね孃樣に上げようと思つて持て來たどもの、丁度宜いだから」

「だつて皆貰つて仕舞つて能いの」

「いゝだとも、元々孃樣に進ぜようと思つて折て來から」

立上つて桃を附た繩を解初めたが、一寸手を止めて。

「だけど孃樣、道もあるだから、お前樣持て行かしつて荷物になるだ。夫よか俺が靑に附てつて、歸りに屆ける方がよか有りや仕ねへだか」

「さうね、夫もさうだから、じやさうして貰をうよ、靑には氣の毒だけれど、ホヽヽヽ」

「何どうせ空身で歸るだから、荷にやなりましねへよ」

「でも老爺や、靑の身に成なきや分りやしないわ、ホヽヽ」

「夫もさうかも知んねへだ。あはゝゝゝゝゝ」

高く笑つたが繩を元の樣にしながら、

「あゝさうだ孃樣、いつも忘れてお禮も云ましねへだ

がお鶴が毎度有難う御座いますだ。お蔭樣で編物が餘程出來て來ましたよ、お鶴も喜んでいるてね」

「なに爺や、妾だつてよくは出來やしないけれど、鶴ちやんは地躰が器用なんだからぢきお出來なんだよ」

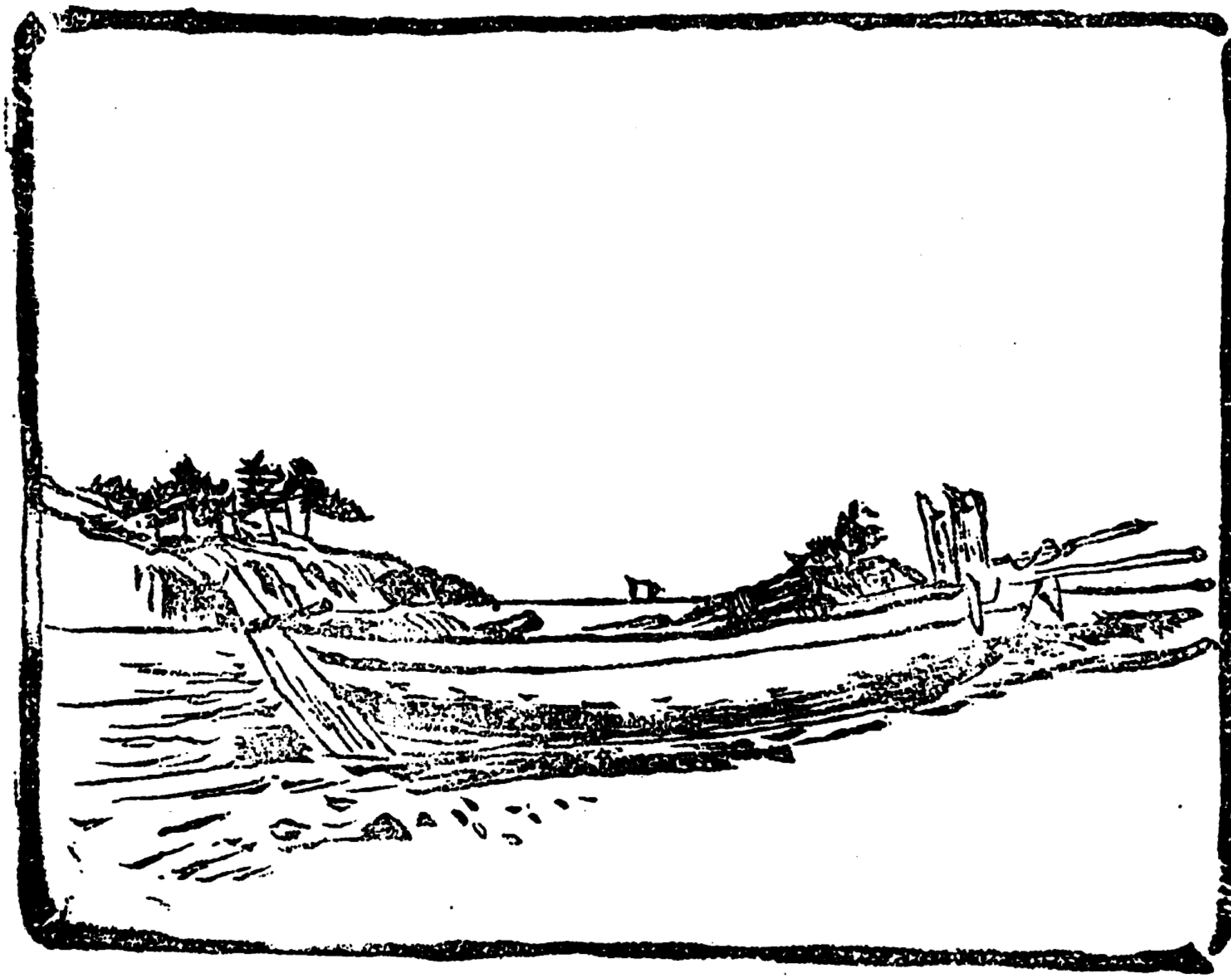
「いやそういふ計りで無いだよ。孃樣がよく敎へて吳らつしやるから」

と又一服吹したが煙管をぽんと叩いて。

「じやあ孃樣、俺もう歸りますだ。お前樣も氣付て早く歸らつせいよ」

「あゝ、有難う妾も之から歸ります。夫から老爺や晩に鶴ちやんをお寄越しな、ね、東京から來た珍らしいお菓子も本もあるから」

海濱 〔人賞〕 紀伊 木村香園



「はい有難うございます、晩にや上げますべい。じや孃樣左樣なら」

「あゝ左樣なら、じやアきつと晩にはお寄越しよ」

「はい上げますだよ。さあ馬よ歸るだぞ。どうどう」

別を告げて馬を曳出すと鞍に附た桃の花がひら〱と散つた。

馬牽く爺も面白し、令孃も面白し、殊に令孃は同情ある人として能く現れて居る、珍しく心持の好い作である、牛熟の戀愛など描きてベタ臭き作を成さんより此かる着想こそ望ましけれと就いて言ふ。

秀逸

○庭の椿

越後 藤山魚川

朝の驟雨に庭の老木の椿の花は大方散らされた。池の

畔に咲亂れた山吹の花はしつとりと露を帶びて靜かに戰ぐ風に搖てバラ〳〵と散る雫。

雨雲は何時の間にか散つて仕舞つて天は蒼く澄み渡つて、日の光が松の梢をもれて溫かに射し込む。

椽に腰を掛けて、趣の有る庭の景色を眺めて居る老人。白い髮が少し許り後に殘つて、眼窪み、頰骨高く、瘠枯れて居るが、何處となく品位がある。

皺枯れた手に握つて居た、雁首の大きい眞鍮の煙草に煙草を詰めやうとしたが吸殼の殘つてるので、傍に在つた煙草盆の火入の縁で二三度輕く叩いた。

斜に口に啣へて甘味相に濃い烟を燻らして居る、續けて三四服も吸つて、額に預けて置いた眼鏡を其窪んだ目に掛けて、懷中から一小冊子を取り出した

小冊子には「日記木村生廿四才」と書かれてある。

皺多き口元を動かして聞きとれぬ小聲で讀んで居たが、嬉し相に冊子を綴ぢて、莞爾として庭に落ちた椿の花を、珍らし相に見遣つたが

再び冊子を開いた。

　四月十日

春子より左の手紙と椿とが來た。

「前略、妾の名は春、貴郞の性は木村、妾は貴郞に添ふ身、木村の木の字に妾の名の春の字を添はせますと椿と云ふ字になります。紅き花は妾の赤き心を表はして居ます。妾は永く心を變へませぬ。と云ふ誓のしるしに椿一株鉢植のまゝ差上げます。御手づから御庭へ植えてください。

貴郞が年取つて髮が白くなり、妾の腰が弓の樣に成りますと、此小いさい椿の木も、貴郞も御承知の公園の白椿の樣なあんな大きい木になりませう其頃、年寄つた老爺樣の貴郞と、婆〻の妾とが腰を曲げて、此椿の木の下に莚を敷いて、濁酒でも酌交はし、赤く咲き揃ふた花を見上げた目で、見るかげもない皺だらけな妾をつく〴〵見て、これでも昔はお春と云つた若い女で俺を可愛がつてくれたことも有つたが一期の夢であつたからな、など〻當年の事を思浮めなされて、感に耐えないで、貴郞が

「變らものは花ばかりだのう」

と恁う仰有る。妾も同じ思で、

「左樣ねえ」

と淋しさ笑て貴郞を見上げる。

其時だけは二人とも若返つて、薄月夜に公園の白椿の根に腰掛けて盡きぬ話を仕合つて居つた心になり

ませう。若い氣で。……今から固く約束して置な
ますよ。御忘れなきやうくれぐ
れも御願ひ申します。
椿は直ぐ、御手づから御庭に植
えてください。

四月十日　春より

「木村様まゐる」

と恁う老人は小聲に讀終つた。

「自分獨り生殘つて此椿を眺めやうとは思はなかつたア、浮世だな……」

老人は悄然と目を閉ぢた。

其時、烈しく山吹の雫が落ると、朝風に老人の髮も白くなびいた。椿の花も極く紅いのがハラ〱と萎淋しく心有り氣に散つた。

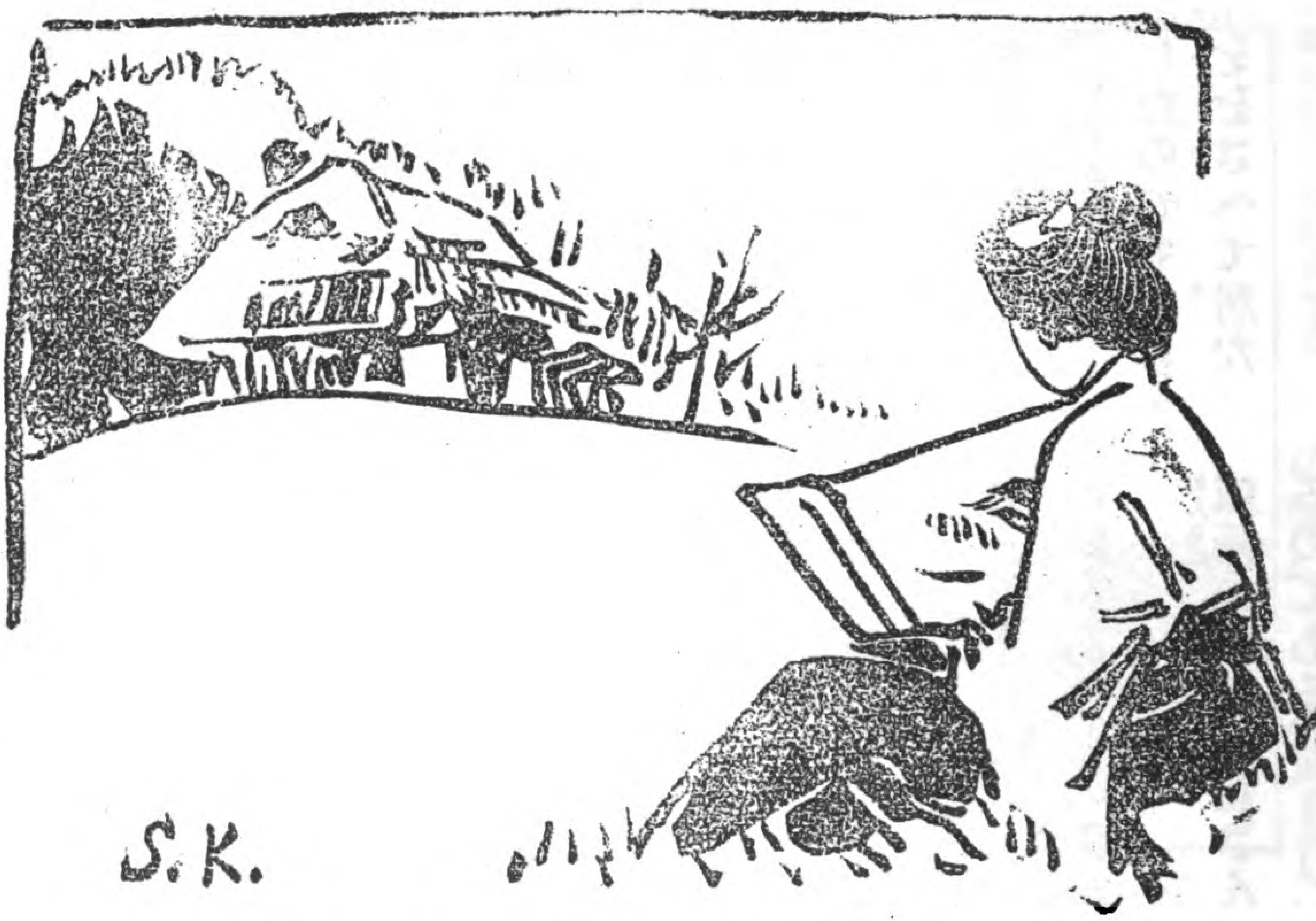
寂しい裡に華やかな處がある、一種の着想、「戀らぬものは花ばかり」はよかつた　春郊

〔人賞〕　神戸市　木田繁子

○兄と夫

上野伊香保　さくら

一



溫泉の流が深い深い谷底に微かな音を立てゝ、對岸の若葉に雨後の夕日の美しさに、恍惚して眺入つて居るのは八重さんと文さんである、二人は毎日携へて散歩するのであつた。

「湯治場へ來てゐるとお手紙が戀しいのね」

何を思ひ出してか突然に文さんは斯う話しかけたので、

「えゝ、妾も、だけど手紙の度に驚かされるんだわ」

と八重さんは悲しげに答へた、

「なぜ？」と文さんは不思議さうに友の顏を覗いたが

「あの今日のは何處から」と語を次いだのである、

「あれは戰地からのよ」

「戰地からですつて、お兄さんなの、

「いゝえ兄ぢやなくつて」と八重さんは小聲に答へたがさと薄紅に其美しい頰を染め

たのである、

「妾の兄さんも戰地へ行つて居るんですわ」

と文さんは急に悲しさうに俯向いてしまつた。

二

文子の小さな胸にも悶はある。自分には一人の兄があるのだが、未だ見た事もない、それは死んだ母が先の所で生んだのだと、乳母やから話された事があるので戀しくつてなつかしくつて、ねえ母さん何故兄さんは妾と一所に居なかつたんですつて母の墓前に泣いた事も幾度かある。で去年の春乳母やが里からお墓詣りに來た時、お墓の前に泣いて居た若い士官を見たつて、そして其士官が母さんにも孃さんにも生寫しだつたつて話したので、おやあ兄さんに違ないと乳母やと二人で停車場へ行つてみたらもう汽車の出た後なので、人目もはゞからず泣きぬいた、すると其翌日出征するとの手紙とリボンやショールなどを小包郵便で送つてきたのに、只兄よりとばかりで名前さへ知れぬ悲しさに、またも乳母やと泣いた、事など思ひ出したのでもあらう、文さんはいつかハンカチーフで顏をおさへて居たのである。

三

「文さん何うなすつて」と八重子に問れて我に歸つた文さんは

「妾、兄さんの事思ひ出したら悲しくなつたんだわ」

と顏を拭うて寂しい微笑をもらした。

「貴女のお兄さんも十五聯隊ですつて」

「えゝ中尉ですつて、だけれど父さんが違うもんですからよく知らないのよ、それに御實家もなくつて高崎にお一人で下宿なすつて居たのだそうですの」

「そう、ぢやあ二十四五位にお成りなさるんのでしやう、そして未だ奥さんもお持ちにならないでしやう」

「えゝそうですつて」

四

八重さんはいたく驚いたのである、戀しいなつかしい一日も忘れた事もない、其夫と定まつた人のあまりによく文子の面影に似てゐるのに、日頃いとしく思つた文子の今の物語り、あゝさては骨肉とては唯一人異姓の妹があるとの御言葉、ては此文子さんが！

五

感極まつて八重さんは文さんをしかと懐いて泣いてゐるのである。

夕日は今沈まうとして、此可憐な二人に優しい名殘の

光をあびせてゐる。

佳人薄命の怨、描き得て妙なり、且之れだけ複雑したことがらを之れだけ短い内に分るやうにしたのは手柄である

○幼な顔

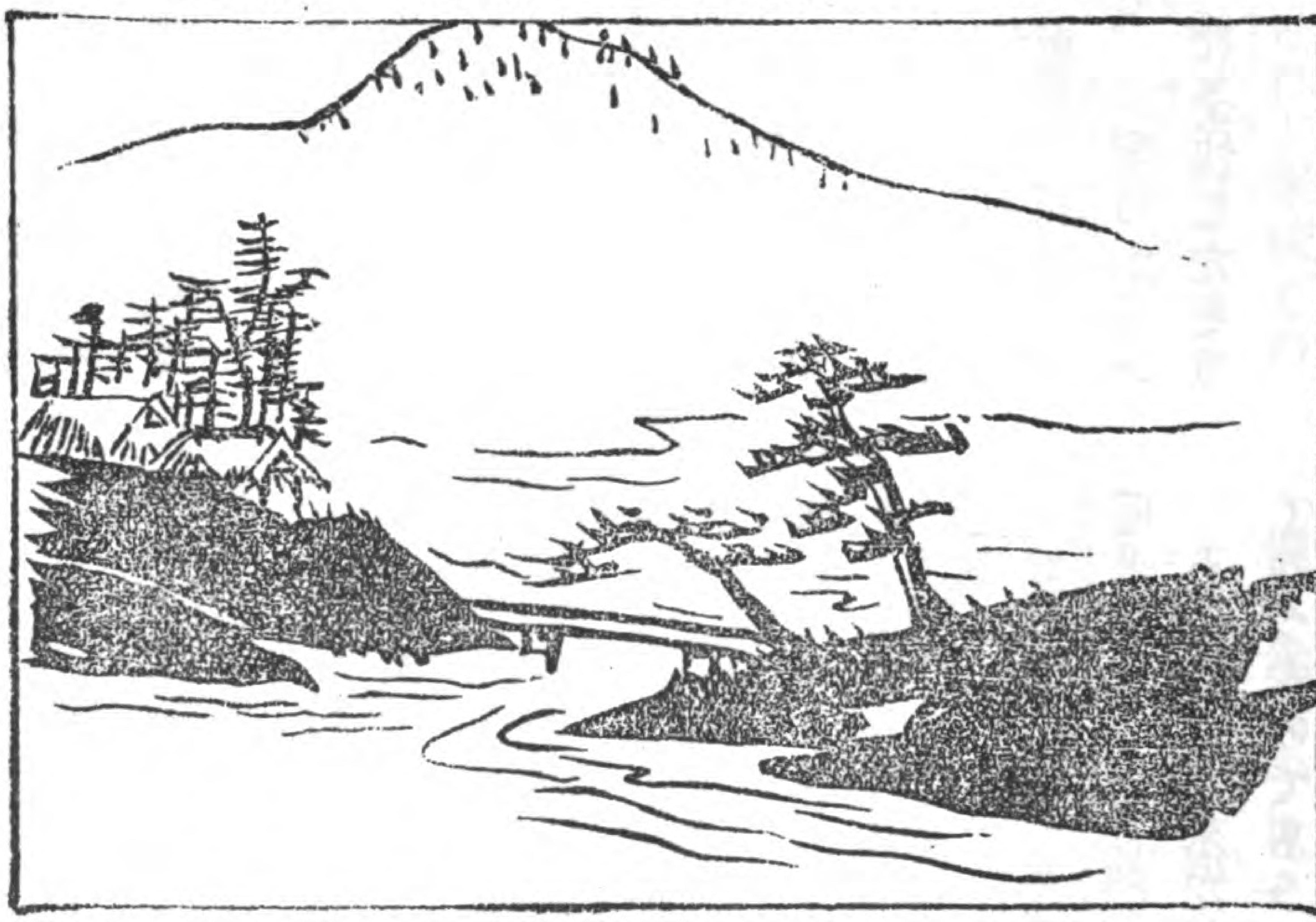
北多摩　蝶花

僕の五六才の頃一番に恐ろしかつたのは祖父に叱かられるのであつた。祖父の眼玉といふのは近郷きつての大眼玉て、僕ばかりではない出入の奴等も皆恐れて居たさうだ。今尚童謡に殘つて居るのは、

波岡の宮に光るものは何ぢや、和田の杢左衛門サの眼玉。

六ツの時であつた、或日三ッになる従兄をつれて田圃へ遊びにいつた、どうしたはづみか従兄は用水へ辷り落ちた。僕の力ではあげられぬので、聲を限りに人を呼び、やう〳〵ひきあげて貰つたがそれから病になつて死んで仕舞つた。

山水　〔賞外〕　京都市　渡部愛子



七八才の頃向ひの寺の叔父さんに茶の湯やお經を頻りに習つて、可愛らしいお子と譽められるのが何よりうれしかつた時分である。高岡の米商會社で何かの宴會のあつた時連れていつて貰つて茶席へ通つた、上席の髭のある人は濃茶であつたのをガブ〳〵と皆呑んで仕舞つたので、皆が呆氣にとられて居る時、ヲリヤアノ旦那ハンナ茶の湯を知らんか子、といふたので髭の先生這々の體てにげていつたこともあつた。

僕は極く鼻垂れなので、お經を習ひにいつた時など鼻を垂れる、すると叔父さんが默つて立つていつた薪を持て來て、サアこれで鼻をかめとくゝりつける眞似をするので、それが非常に恐ろしかつた。矢張り其頃である、向ひの寺へ四書も習ひにいつた或日行くと花園へいつて居られるので、そこへ行かうと思うて一枚橋を渡りかけて眞逆樣

に落ちて、水涸れの川てあつたから、石て頭をしたゝか打割つた、其名殘は今尙兀となつて左の方にある。

一時好きな話は、大岡政談てあつて、何の話の尻にもすく樣大岡樣はどやるのて、終には百貫の大岡樣といふ名は同級生から貰つた、百貫とは僕は並勝れて大きかつたからてある、入道も亦の名。

學校へ行く時。車屋の一本松の下を通つた、折しも枝に搆へて居た鳶がばたりと物を落したので頭からぼんのくぼへかけてべた／＼になつて、家へ泣いて戻つた、

僕と大熊菊水君と共謀して、源平の旗とりをやつて居連中の這入つて、其の中の一人を引捕へてぶつ倒した膝頭をすりむいて大疵になつた。

十三才で立山へ登り、歸途十八里を歩いて平氣てあつたのが死ぬまでの自慢!、

七才の時長い病でもう死んで仕舞つたといふので、母は膝からかき下して北枕にし、枕元へ輪など持寄り、念佛申して居るとまた息を吹きかいし、其翌日から〆き／＼よくなつて、流石の大病も一月に全快したそうだ。

火燵櫓の上に居つて、說敎のまねことをやるのが得意てあつた。

自分の幼な立をきれ／＼に述べた一種の美文 小說と謂ふ程の態は成して居らぬけれど、小說氣のある書きぶりてある事は確かに認むる。

○思ひ出

京都 松永幸

「いつまでも兒女の樣にして居てはいけませんよ。」と母上の言はるゝに。

「はい一寸お友達の家まで。」とばかり裏の枝折戸をそと拔け出て。

町から見に來た洋服姿のお役人らしい人やら學生等がもう歸りがけてあろう、酒に醉ふて面白相に唄ふ聲やら可愛らしい聲で軍歌を歌ふのやらで街道はいと賑やかてある。

妾はそれをよけ／＼桃園の入口には入ろうとしますと、もうこれも駄菓子の荷を擔いて歸り途の近所のお笹婆が。

「おやお孃さん今頃から――、」と不審相に云つたのに唯會釋した計り門の內へ這入つた。

小川の邊へ來たが利雄さまは居ぬ。妾が來るのが遲くなつたのでもうお歸りになつたのかしらと少時佇んて居ると口笛が聞えたので嬉しやと近づいて木の間をすかして見る、利雄樣とは思ひの外の英夫さま!

ハッと思つてそつと後退りして蔭れた。あゝお父様は英夫様に妾を嫁けようとお仰やるけれど私は嫌、成程財産はあり容貌もよいけれど學校での成績と云へばいつも落第で高等小學も碌々卒業なさらないで遊んで居る。

妾はどうしてもいや、それよりか利雄様!!財産こそなけれ、溫順で男らしく試驗の成績はいつも優等、中學校も卒業なされてこゝ四五日の中に御上京なさるゝ筈、私は彼のお方が——種々な想ひに腦まされて知らず／＼桃の花片をとつて流れへ散らしてその行く方を見つめて居ると。

「十重子さん。」とそつと妾の名を呼ばれたので驚いて四邊を見たけれど誰れも居らぬ、ふと氣がつけばはや日は暮れて四邊は薄暗らくなつて居る何したのであろうと彼方へ行かうとする刹那。

「どこへお行てです」と現れたのは利雄様。



子もり　〔賞外〕　牛込　矢野志津子

「あら貴郎はいつこゝへお來でになつて。」と走り寄て手を握ると。

「僕は先程から。」

「そう妾一寸も知りませんの。」

「もうこれてお別れですな。」と利雄様はおっ仰る。

妾に何にも得云はず涙ぐんだのであります。

「お月が。」と利雄様が獨言の様に言はるゝに見れば花片が散つて紋をなして居る地上に二つの影法師が淡く畫れて。

仰げば薄紗に包まれた様な朧ろ月がやゝ上つて見渡す限りの桃園は恰好夢のやう茫然として居る。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

早はそれも五年の昔語となつた。

そむき難きは親の言葉、まゝにならぬは浮世の常、妾は英夫さまの家へ嫁いで間もなく財産は失くなつてしまつて今では小學教師、妾はさらさらこんな事は恨

まないけれど、利雄さまは高等文官の試驗にも及第なさつて不日町へお歸りなさるとのこと、現今の妾の身の上を見られたら笑はれるてあらうか、不憫そうだとお思ひになるてあらうか。

ひとり思ひ出しては歸らぬ夢路をたどる桃園の花の木蔭。

○新道

福岡　片岡實

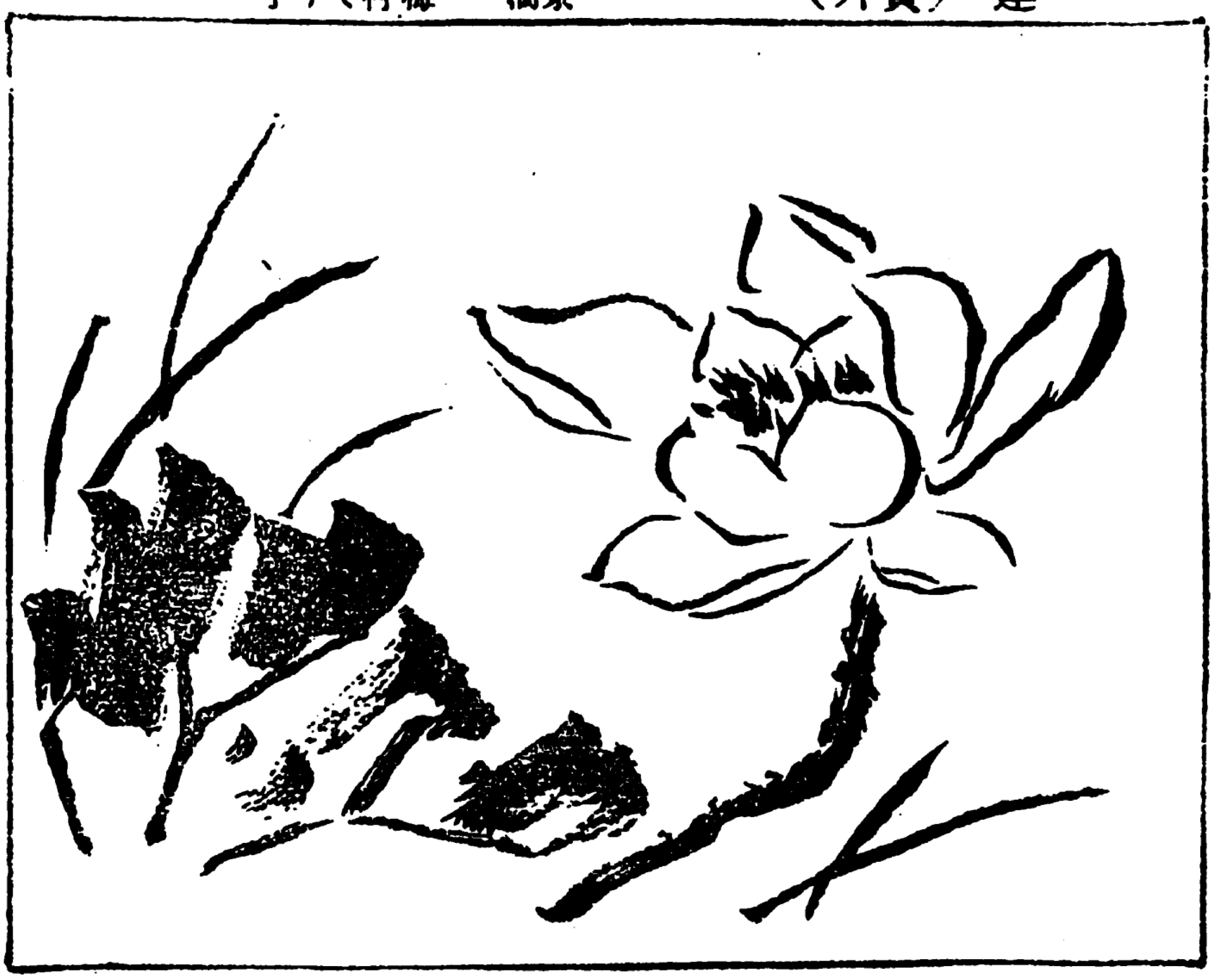
散亂と降る、雪を避けてか、長男は杉木立の社に、腰打ち掛て居たが、此處を立ちて、徐兩手を紺絞の帶に挾み、一歩々々に佛蘭西帽を、左右に傾けて、姉樣は如何なすつたの、四時に此處迄歸ると、約束して於てもう二時間にもなりさうだ、日は暮れてしまふ、今日は歸らないのか知ら、姉樣に虛言をつかれたのは、始だ、と獨言ちて一二町も往つたが、不圖思ひついた樣に、振り返つて元の道を進むだ、十分立つか立たぬに海老茶袴の君子は鳥居の外で、車を下り小走りに、社に驅けつけた、おや長男さんは歸つたのだろ、私余り遲刻なつたものだから、ほんとに濟まなかつたわ、と泣き出し想な容貌で、社を出て、あゝ實にあの道を行くのは厭だなあ、と考へてゐたが、そゝそうと小膝を打ち、新道が出來たつけと、獨りうなづき、左に岐れた道を取つて足を早め、草色のリボンの落ちたも覺えず、時の間に十四五町も進むだが、日暮れ果て、雪は益々降つて紫の肩掛も白の肩掛と變つた、琉球下駄に挾まる雪を落しながら約束の時間を誤つた私の罪は何程かわからない、と身を縮める途端、後よりノソリノソリと外套被つた大の男、君子は驚いてキヤーと叫むで其儘斃れた、大の男は近く寄りあれお孃さん可憐想に、私恐い者じやないがなあ、と言ひながら手早く外套を脫ぎ君子に着せ、脊に負つて雪踏み分け歩み出した藁屋の十軒斗り集りたる村の、我家に連れ歸つた、妻も走り出て共に勞はり介抱せしに、全身の暖まると共に目醒むる如く、人心に歸つたから、夫婦は一方ならず悅んで色々問ふまゝに、父の姓名、村の名、姉弟二人なる事、自分は十五て、弟が十二なる事、今年の春高等女學校に入學して今度寒中休に始めて鄕里に歸る事、五里は車通へど、一里は山路なれば弟が迎ひに來る筈なりし事、學校にて荷物片附に時間取り約束時間の四時に遲れし事など委しく、物語つた、夫婦は兩方より脊撫でながら實に可憐想てござんしたな、そうして道を間違へなさつたんてすね、さうと君子が振り向けば、お內儀さんは語をつゞけて、此處は國分つて云

ふとてですよ、あなたのお家までまだ一里ありますよ、併し心配なさらないで好いてすよ、主人がお供して參りますからと振り向いて主人の顔を見やれば、主人も快い顔して、ね貴孃は御存じあるまいが、私は能く存じてゐますから必ずつれて參りますよ、君子は唯首俛れてゐた、主人は思ひ出した樣に、それてはお孃樣行きませう、と提灯に火を點けるのである。

○紅梅　紀伊　はくらむ

某校の制服制帽を掛けてある四疊半の机の横に、廿四五の美しい青年が心配氣に首を垂れ其前には、青年に能く似た十二三の色白の小娘、名は春子、油氣の無い髪をお下げにして、薄桃色リボンで結へ、筒袖の海老茶袴傍に紫

蓮（賞外）　京橋　梅村てう子



包を置き、學校から歸つて來たと言ふ風で何か口惜し氣に涙をためて

兄樣、眞個に殘念だわ、私モー明日から學校へ行かないわ、モー退ちまうからいゝわ。

何故？　何うかして？

何故て？今日も八重さんが學校て、木村さんや金子樣に、春子樣は彼んな美しい衣服を着てお出でだけれど、家でお金貸して上げ無きや此學校へだつて來られないのよ、そして春子さん家の好い事私内の兄樣から聞いてよつて、皆に秘密話をして、……私一人遊んでく……呉れないの……、皆て私の顔ばつかり眺めて……。

八重子、岡田の……彼の高利貸のかい、あきれた奴

だ子ー、高利貸だつて借手が無けりや干上る癖に、生意氣なッ。

と力を込めて殘念さうに手を握り天井を仰いだが、眼を轉じて妹を氣の毒さうに見下ろした、春子は未だ何か氣に懸るかして

兄樣、お金借りたの？　眞個？

兄を見上げたが、兄は無言の儘眼をそらした。

僞なの？　よう兄樣、僞なんだわ子ー、私口惜しくて堪らないわ、而して子ー兄樣、八重子樣の兄樣が門の處で健次樣にモー明日迄ですよ、猶豫しませんから其積りで……て。

エッ、明日迄？

あゝ、未だ言ふてよ、君の家は餘程妙だよ、親父は軍人で滿足に戰死したが母樣は藝者上り、息子は意氣地無しつて……、私殘念よ……。

ウン、而して……。

私ね、意久地無てゝ貴君の御世話に成りませんと言ふたら、駄目だよ、其樣事言ふと後悔するよつて、外の人なら未だしも、彼んな人に……、兄樣や母樣の惡口言はれて、私口惜しいわ……。

聲上げて健次の膝に泣きふした。

健次は腕を交き春子の美麗な衿足を見て永き歎息を洩らした、良久して、

春子樣、モー其樣な話は止めて、早くお袴をお取り明後日は日曜だね、上野へ行こうね、岡田なんか打捨て置けば好いさ、子ー春樣。

恰も此時下女の梅が新聞を運んで來て春子を見て、

お孃樣、何日お歸りでしたの？　先程奥樣が尋ねてゐらつしやいました。

と言ふに春子は驚いて、

私未だ母樣に御挨拶し無かつたのね、余り口惜しくて忘れつちまつてたわ、兄樣、明後日屹度、連れてつて頂戴よ、よくつて。

言ひ終るが否や、母の部屋へと、驅け出した、後に健次は、

つまらぬ〳〵、義理に友人の連帶者になれば出征して負傷する、期限は來る、父は戰死、母は病氣、妹は未だ子供、一層自殺、否々後の二人が……と言てあの田中家へ……モー一度運動して見樣か、否々、彼の人非人が何うして延期を……母に洩らそふか、氣の弱い母は……父の遺骨の來ぬ爲の世評にさへも思ひ惱んだ程、噫、明日迄、明日迄明後日は……エ

ッ殘念……。

思ひ餘て、宛然生きたる人に物言ふが如く、父の肖像に向ふて、罪を謝し男なきに泣いた。

＊　　＊　　＊

翌々日の日曜には、散歩に出る兄妹の姿は見えず、却て嚴しい、恐ろしい、執達吏が田中家の門をくゞり諸道具は勿論病母の物品迄も封印して去り、夕方には蒼白な健次と眼を泣きはらした春子が、此後の所置に惱む姿の憐れ氣なるを見た者があつた。

○わかれの風

磐城　たく子

夕靄は四方をこめ、燈火は彼方の森蔭、此方の小川の畔、目さめし如く閃めき初めぬ、野邊は人々去りて、後はいと靜かにて憐れに鳴いて我上を飛びゆく鳥の聲もなんとなふ身に染みて聞こゆ。

あはせ鏡（賞外）　福岡縣　中村清香



口にはあのように勇しく云ひ給へど、妾が身になりては、戀し、懐し、慕はしの君と、遠く隔つる滿州とやら、朝鮮とやらへ行く、これが別れ。それも世の常の別れならかくまで悲むまじ、復の逢瀬を頼みとして、憂い事、辛い事も樂しく堪へて過ごすべきなれど……この別れ萬一……さる不祥なる事あり得べしとは思はれねど……あはれ、今此晩、此一刻が見おさめか、かのやさしき言の葉も今よりは聞くを得ぬかと、思へば、胸もさけんばかり。女の身の果敢なさに、何故世の人は戰などして、妾が戀しき君をも、死ぬる如き地に行かしむるやら……死なば諸共にと契りしものを、今はそれもならず。噫今更生くるに甲斐なき此命と餘りの悲みに、前後も知らず泣き伏しぬ。

されど、こは唯女子の愚痴なりき、あゝ愚痴。大君の

爲めに勇みて戰に出づるものを、如何に淺果敢なる、女の身なればとて、如何に身を捧げて戀したる君に別るゝなればとて、別れを惜しみて悲しき顏、君に見せしとは…悔ゆとて、詮なき事なれど、われながら、耻かしき事してけるよ、たとへ身は焦れ死ぬとも、愛着の絆を絶ちて勇ましく、君をして、戰場に向はしめざる理やある。妾がかくと心を定めては、今迄て生躰もなく泣きくづれ居たるも、急に涙を收め、身つくろいし、君に打ち向ひぬ。あゝ戀しき君よ、此身をばつゆ心にかけ給ふな、妾は…今こそ、涙をはらいて君と惜しき、惜しき、袂を別ちはべるなれ、されどゆめ、雁の便りのあらば忽せになし給ひぞ。あゝさらば君よ。それにても我身はいと心安し。これでこそ、大君の爲めに戰場に出てゝ目覺しき働はなし得らるゝなれ。嗚さらば…と言ひて別れんとすれど、妾は握りつめし君が手をはなす事もえて、胸は千々の思に亂のごと、互に手を携へて此わたりを徘徊するもこれきり。あゝすこやかにておはしませ君と、覺えずもハラ〳〵と散らす涙の露…

折りから遠く聞こゆる童の唄の
　別れの風だよ…別れてからは…

二人は急に吾にかへりて、妾は、又涙の君は力つよくも手を振り放ち給ひてさらばとあなたに。月は朧にかすみて出て、二人を照す！
　復た何時逢ふやら…逢はぬやら…

○別莊の令孃

大阪市　久保田　幸

（一）

紀州和歌の浦と云へば橋立に次ぐ名所であるが日露開戰以來、後送された名譽の傷病兵は、三々五々打連立ちて、徒然を慰めんが爲、漫歩して紀三井寺に行き暫時憩ひて四方山の話をするのが例となつてゐる

甲『オイ君、僕はれ君遂に褒んで貰ひたい事があるのだ』

乙『ウム、琴の主か、よほど氣になると見えるね』

甲『馬鹿云へ、春山君が渴望に堪へないだろうと思つた許りさ』

春山と云はるゝは、よく云へば善人、他から、よき慰物にされるのである

春山『何だ〳〵美人に就てならば、早く承りたいね』

甲『迷ふといけないぞ』

乙『先方は某大家の令孃てふ事を忘るゝな』

『ヘ…………隨分嚴しいな』

此三人の物語をきけば、月余り前から○○別莊へ妙齡のエンゼルの樣な婦人が病氣保養の爲とかで來てるとの事、時々琴、バイオリンの音が漏れて、少からす兵士を慰むるとか、然れば又其主を拜まばやと、暇なるにまかせ、其門前を繁く往來して、例の甲先生此頃ヤット御庭散歩の處を、チラと見て、之に增す幸は無しと云ふ調子て、友に、ふれ廻したので、何時の間にか彼等の中に高き噂となつたのである

（二）

彼嶂高き別莊にては、令孃靜子と乳母のお安、四十前後とが、中庭に面した稍々奥まりたる一室、慾ぎはの机上の豫備少尉の軍服を着したる寫眞に對し火鉢を中に主從睦まじげに眺し合つて居る

『れ乳母や、今日て丁度四十九日だよ』

『左様て御座いますれ、誠に若旦那様は、御いとしう御座いますれ』

『兄様が今頃戰死なさると知つたら、御母親の訃を知らすのてなかつたにれ』

『若様の御氣性として、如何に御嘆き遊ばしたてしようれ』

『ほんとに、其ばかり悔しくて』

『孃様御心は、此乳母やが存じて居りますよ』と二人は暫し無言。

『れ乳母や、今頃は御兩人共、天國て樂しく御出てだろうれ』『もう其んな事を御考へ遊ばすな』

『ても行きたいわ、早く迎ひにゐらして下さればれ……』

『御氣晴しにお琴ても、御出し申しましようか』

『進まないけれど兄様の御靈を慰むる爲に……』

（三）

『御氣分がよくてゐらつしやいますから私誠に嬉しく存じます』『乳母や汝を恨むよ』『何故て御座います』『何故つてあの時打捨つて置いてくれゝば今頃御母様の庭へ行つてるのに』と又もや顔をハンカチーフに埋めぬ『御病氣の御勢て御座いましようが、左様な御心細い事を仰つしやらずに早くれ……』

『あゝいやだ〳〵』

『孃様には御立派な旦那様がお有り遊しますのに』

靜子は淋しき笑を浮べホツト紅葉を散しぬ

『ても遠くに御出だから、頼り無いわ』と又靜ぎ込む

『又御惡くて、ゐらつしやいますか……ては御休み遊ばせな』

下女花と乳母とは幸無き主の身の上に就いて互に袖を絞つてゐた折しも睡つてゐた靜子が寐返りしたので乳母は

『御目覚になりましてか』『あゝ妙な事、今れ夢て東京の秀兄様に合つてよ』＊……＊……と耻しそう

『ホ……ゐらつしやるかも知ませんれ』『まさか……』『ても一度御見舞に來るとかの御文て御座いました』、『知したのまあ……』

（四）

久振にて今日、而もバイオリンと琴との合奏に青年將校二三人集り又も噂をして居る

『君彼レデーこそ我等の理想通りだ』

『ウン、僕もれ、スタイルと來たられ、君』

『淸水の鐵石君も一本參つたそうだ』『あゝ天賦だな』『僕等に旅順を落す天佑が有つても、レディを手に入れる事は出來ないかれ』『實にそうだ』今入り來りし少尉は早速彼等の話を受取りて

『靜子孃の事か、そうだ、なか〳〵の尤物だ』

『あれはれ僕の學友故〇〇中尉の令妹さ』

『エッ!!〇〇中尉の』『會たければ紹介しよう、今も寄つて來たら彼女のヒユーチヤー、ハスバンドが來てたよ、其て合奏だ』『フ・ム、且の人物は……』

『大學出身の秀才さ』『御拜顔の榮を得たいれ』

『會ふなら早きを要すよ、近日共に旅行するそうだよ』

『ホネムーンか』『ても無だろうが兎も角レデーの病氣には旅行がよいのだ』『羨ましいな』

『全快次第式を擧るそうだ』と話してる中、兵士がガヤ〳〵する、ふと耳に入たのは『琴の主だ〳〵』と云ふので出て見れば二十六七の嬢とした大學生と破布姿の令孃と下女て有る『靜様疲たろうれ』と見れば早露の玉を宿して居る、『又過去つた事を追懐てるの』と快活に慰められて、稍々勢付き『人が眺めますから、早歸りましよう』『餘り靜さんがヒユーチーだからだよ』『アラいやですよ、御人の惡いへ』＊……＊……

＊　＊　＊　＊　＊　＊

『〇〇少尉此から立つよ失敬』

『どうか御身御大切に御全快を祈りますよ』

『有難う存じます、ては失禮致します』『失敬』

別莊が又老夫婦となりてより一日々々令孃の噂も少くなつたのてある



尾上柴舟先生選

天

○春の夜

越中西礪波郡西五位村大字三日市荒木作造方　森山ます子

紫のとばりはたれて、降りたゝす夜の姫神、
平和げる春のみ空は、小羊の夢にも似たり。
中々にかすめる月は、たとふればたをやめのごと
乳色の絹なすおもわ、ゑむところ、萬象光あり。
また更に蒼冥の空、紫の星坐しづかに、
集ひよる聖きひとみの、またゝくは何の啓示ぞ。
高樓は花にうもれて、風しづか、枝に通へば、
さゆうげるその花瓣に、まだ若き生命こもれり。
花を縫ふ水のせゝらぎ、似たらずや、か細き指に。
溫きいのちをこめて、かきならす妻琴のこゑっ
いひ知らぬ希望の呼、かぎりなき慰安のかげ、
歌秘める唇ときて、春の夜の光に醉はん。

句々玉、言々金、誦し終って、恍然たるものあり。

地

○君を思ひて

青森縣三戸郡八戸町長横丁八番地　汀蘭女史

光り玉しく露滿ちて　百合も薔薇も蘭(アラヽギ)も
馨りあふるゝ園あらば　君が踏み行く路とせん、
流るゝ花を誘ひて　海原遠く香をはこぶ
清き野中の川あらば　君がかゞみの水とせむ、
夕の空に現れて　笑める光に塵の世を
慰めてらす星あらば　君がかざしの珠とせむ、
清くたふとく汚れなく　戀も涙も憐みも
滿つるやさしの胸あらば　君が心の宿とせむ。」

よくとゝのひたり。女流の作としては、上乘ならむ。

人

○君が腕

麹町區飯田町六丁目十番地　重田春子

磯山松に月すみて、　波の小琴のしらべよき
まさご路幾里影ふみて、　辿るによるや君が腕。
すをう色こき貝がらに、　うたをしるしてさゝげんの
我手を取りて何氣なく、　笑こぼるゝ君が腕。
ちる花びらを袖にうけて、　見ませと云ひてうつむきし
うなじをまきてさて暫し、　ふひる烈しき君が腕。
座の莟の朝夕に、　立ち迷ひては身に迫る、
位や富や名や財や、　あゝ何せんの心ぞや。
詩にゑまひてひたすらに、　我はよらましあつき血の、
あふれて出づる愛のため、　ふるひくすしき君が腕に。

うつくしさ、やさしさ、花やかさ目もあやに、心もときめきて。

秀逸

○萍

北多摩　小寺社女史

花のかざしをふるはせて、　彈きたる絃の手をとめて、
ほろりと落すひとしづく、　只おほかたの戀ならず。
春の日遲し暮れがたし、　寮の紅梅たゞちりて、
秋の夜長し明けがたし、　空房の雨おとさむく。
胡蝶も羽は交せるを、　燕も雙びすむものを、
あゝ我戀はなる期なし、　なるなき戀に我は泣く。
夕日さびしき奥津城の、　あるじの名をば問ふ勿れ、
語るかひなき歌ひ女と、　はふれし身にて淸き戀。
路傍の柳墻の花、　手折らんとする人憎し、
さはれ漂ふうき草の、　うたてや花に身を餝る。
こよひは許せ許しませ、　滿たしても引く盃を、
時雨降る夜を燈暗く、　いとゞ愛の増しくるに。
彈けとや絃をよしひかん、　歌へよ君はからうたを、
醉へば必ず誦し玉ふ、　其樂天の琵琶の曲。

艷麗の中、無限の恨あり。

○星の光

富山縣　澁野はるさめ女史

西の國なる歌人が、雪よりきよきこゝろもて、
み空の花と歌ひたる、星に絶えせぬ匂ひあり。

風の前なる白露の、貫きとめぬ玉の緒に、
しばしは影を宿す時、星には脆き光あり。

戀に煩えしうた人が、靜かに眠る奥津城の、
銀杏の梢にきらめける、星には奇しき光あり。

散りたる花を抱きつゝ、とはに眠れる蝶々の、
小さきむくろを照す時、星に涙の光あり。

類歌の有無はしらざれど、夕つゞの影のやさしく、清き節多くて。

○妹のかた身

上毛　安藤むき女

おぼろに霞む春の月　妹のかたみの笛ふけば
聲に愛あり恨あり　窓靜なる春の雨
妹のかたみの文よめば　歌に情あり涙あり
一人かり寢の肱まくら　そゞろ秋風身にしみて
はかなき夢のさめしとき　かた身の笛をいだきつゝ
かた身の歌をあはすれば　ほのかにみゆる妹の影

着想は新ならねど、すてがたし。

○臨終の笑

神奈川縣　月岡綾子

やせさらぼへる容顔に、かすけき光うかべつゝ、
言葉はなくてひそやかに、ゑまひて君はゆきましぬ。
長きこの世の夢さめて、心のなやみにたゆりばか、
天つみ國に近づきて、つみの絆の解くればか。
まだうら若き青春の、希望の血しほわくものを、
快樂のいづみ汲みもせで、闇にきえにし君が身や。
神の迎のにじのはし、ゆふべの空に懸れども、
かよわき君を唯一人、渡すはいとも悲しきに。
君がゑまひの消えしとき、君がまなこのとぢしとき、
この世に遠きみすがたの、たふとかりしも涙かな。
たとへばゆるき浪の上に、しばし入日の匂ふごと、
しばし落花の浮ぶごと、臨終の笑のはかなさよ。

佳句頻々、凡手にあらず。

○若き鐘樓守

長野市　安孫子美子

眠げに見ゆる春の宵　登る七段鐘樓に
そと息つきて綱とれば　大天地のさびしらを
冷たく迫る夜の氣や、
聖鐘に刻む五つ文字　そは一ふしの普門品
「罪の滅び」を音に誦して、更けゆく丑を高う撞く、
三年をこゝにうらぶれて　榮なき春の二十一
温き血潮の胸なれば　許せ一夜の音のみだれ、
吁行く雲に散る花に　追憶の夢を今消して

残れる二つ眉閉ぢて　力を籠めし一杯に
震ひて崇き夜の暗、

深きところ見るべし。

○白薔薇

京都市　桂　蘆　風　女　史

筆をのこして世をいにし　わが夫の昔なづかしみ
今日加茂山のおくつきに　昔の卒塔婆をとぶらへば
緑のかげのふかくして　そこともわかず鳥のなく
泣きくづをれて人の世の　はかなく暮るゝ夕まぐれ
山立ちいでゝ眺むれば　流れ靜けき里川の
岸べのばらの花ちかく　浮ぶ水鴨の一つがひ
わが得し幸の奪れて　今なほ君の世にまさば
水しづかなるあを淵に　みなわと結ぶ汝が夢を
うたにも入てもろともに　うたはむものをあなあはれ
わが得し幸の奪はれて　今なほ君の世にまさば
夏はまどゐの狹筵に　なれも由緒ある繪とはなり
われも苦痛にかくまでは　痩せざらましをあなあはれ
渚に寄するさゞなみに　夕づゝのかげうつる時
そこにさゝやく聲ありて　翠のかぜのあふるごと
胸のそよぎにまぼろしの　夢こそわれは戀しけれ
よしある家の人の子の　榮えのはてのさすらひも
しばし漂ふ雲の上に　築きし宮の高殿も
夏はすゞしき風の前　さて妬ましき汝が幸や
新室祝ふ富人の　うたげの酒に狂ふとき
形見の歌をうたひつゝ　また川の邊にさまよへば
露をこぼして草の上に　散り亂れたる花の白薔薇、

とゝのはぬ節多けれど、佳句もまた少からず。

○朝の湖

美濃　内藤みち子

朝日の影はさしそめて、　波靜かなる湖は、
紫深く立つ靄の、　朧の中に現はれぬ。
岸を蔽へる老松の、　枝は湖上に差しいてゝ、
龍のさはいのおもしろく、　靄の暇より見えそめぬ、
うすらぎゆける朝靄は、　水の面に溶け入りて、
再び凝りていでつるか、　浮べる白き鷗の群。

全篇繪の如し。結末ことに妙。

○山　里

上毛伊香保　香　山　俊　子

鎮守の宮の廻廊の、　五作とお初のまゝ事や、
むこ樣よめご泣かしたと、　それやいく年二昔。
あそびなかまになぶられて、　振分髮の幼氣に、
ふたり泣いたは寮の前、　これやいく年二昔。

緋桃白桃花さいて、柳にけぶる春の雨、
寮の尼御は年老いて、宮の榊は茂りたり。
かくて平和の山里や、春風わたる軒の下、
お初が機を織るそばに、五作が遊はず稚兒一人。

輕妙宛轉、妙言外にあり。

○谷川　　京都　竹下千子

高き理想にあくがれて　空のみ仰ぐ少女子よ
暫深山の谷におり　流るゝ水をのぞみ見よ
朝の空の彩雲は　夕の風に色失せぬ
岩根を洗ひ草を縫ひ　流れながるゝ谷川は
平和の歌をうたひつゝ　永久の海へと注ぐなり。

簡浄の中に、無限の味あり。

○鷄　　大阪　げい花

羽ぶりの風に雨雲を　呼ばふ力はもたずとも
とさかの色は血に燃えて　熱き焔をかたどれり。
羽色はいづれ神の手の　ふかき技藝になりにけむ
輝く匕さながらに　朝はなれ行く峯の雲。
潮に沈める白珠は　かりに其眼の光かも
靜かに歩む花の野に　曉の風はれ〳〵し。
あゝ鷄よいつの世に　神の啓示を悟りけむ
迷ふ横雲朝づく日　たゞ汝が歌にわかれゆく。
纖雲いつる朝日子の　そこに希望の光あり
薄るゝ光夜の帷　そこに夢あり安居あり。
夢は秘すべき我世ならば　など汝が聲の低くあらぬ
さてこそ神のみさとしに　汝が歌はしもなりにけむ。
いかに小鳥の歌だにも　神は自由をあたへたり
市路の塵にさ迷ひて　耻ずやいかに歌の子よ

淡々叙し去りて、しかも、着想清新。

○虹　　備後　池田仙翠子

海邊山べを行き巡り、柳櫻にあくがれて、
塵にまじらぬ詩人の、出入る呼吸の凝れるか。
赤き紫はたみどり、七色の絲染めかけて、
たな機まつる少女子の、戀の息吹の通へるか。
墨雲迷ふたか山の、尾上に高く根を占めて、
汐立ち擾ぐ荒浪に、遠くもかゝる虹の橋。

價は結末にあり。

○露　　越中　諏訪やゝ子

花の月夜にあくがれて　少女の眉にくだけつゝ
はかなき戀をもろ共に　なげきし者は汝ぞかし
月影しろき秋の夜に　尾花の袖を宿として

浮世渠なむたをやめに　あはれ添へしも汝ぞかし
花の翠のうるはしく　憂き白つゆの優しさも
哀れや夜半のさむ空に　霜となりしぞはかなけれ

群馬　荻原かなえ

○蝶と壺

あはれとおぼせ　やよこてふ
たのしきのべに　ほゝゑみて
きみがゆめをば　やどせども
やがてはさとの　わらはべの
ほそきおよびに　つみとられ
しをれもはてん　わがみなり
なみだのつゆに　うなだれて
さはなげきそ　すみれぐさ
もしもわらべの　きたりなば
まふやはそでの　ひら〳〵と
われはかなたに　さそひゆく
なれをつまする　ことはせじ

秋田　石澤千香子

○春は來ぬ

あな面白き春は來ぬ　あな心地よき時は來ぬ
日はうらゝかに花さきて　野べに山べに鳥うたふ、
いざもろともに手をとりて　テニスコートにかけ行かむ
めぐるボールの球のごと　男みてかけむとも〳〵に
心をいれてうちやれよ　力をこめてうけいれよ、
よろづさかゆる春の日に　望みの光仰ぎつゝ
たのしき春のくれぬまに　我が世の春もすぎぬまに
心のまゝにあそばなむ

美濃　中島きく子

○秋野夕

宵の明星またゝける、　森よりひゞく鐘の音に、
夕榮こめし大空の、　雲は紅葉と散りしきて、
靜かに渡る天鼓の、　幽けき歌は聞えつゝ

もやに消え行く秋の野の、　あゝ夕ぐれのおもしろや。
自然の樂を奏でつゝ、　清く流るゝさゝ川や、
千草の花の香を浮べ、　胡蝶の夢を醒せて行く、
夕月淡き野邊の末、　影うるはしき畫に見えつ、
靄に暮れゆく秋の野の、　あゝ夕ぐれの快樂さよ。
眼路の限りはる〳〵と、　野外興ある物すさび、
天地にみつる平和の、　あゝ秋の野の夕ぐれよ、
今將た雲のいろあせて、　かすかに傳ふ蘆笛の、
音にくれてゆく夜の道、　きけ一節の木樵歌。

鹿兒島市　森　荻子

○花吹雪

妾しが在所は櫻の名所　春は三月末から四月
北山おろしにみだれてくれは小村十戸は櫻よ花よ。
村で名高い源太が娘　のどのよいのは七村十村
おきよさんとて、あちらでこちて若衆達の噂のたねよ
赤い手拭姉さまかぶり　意氣な小唄で通るとき
ありに亂れたさと一吹雪　花がおきよかおきよが花か

群馬縣　津久井軍子

○獨吟

朧にかすむ春の夜を、　我高樓のおはしまに、
獨り靜けくよりそへば、　神秘は深し夜は戀し、
思へば早も我こゝに、　生を受けたる十九年、
あるは悲しき闇の路、　あるは魔の淵鬼の山、
屍高く血汐湧く、　すごき旅路をたどりしが、
こはそも神のみ力に、　よらではいかに送り得ん、
例へ世の人逝うせて、　情は海に沈むとも、
淡は火の山に溶くるとも、　萬古を照す愛の神、
光りはいつか消えぬべき、　あゝ人生れ人は去り、
あゝ花は咲き花は散り、　水は流れて返りこず、
春秋ことに幾星霜、　靜に衣紋つくろひて、
空を仰げば空悠々、　地を眺れば地は悠々、

仰ぐみ空に恋あり、

○病床の吟

重傷になやむ背の君を
時しもあはれ凄じう
纏ふ白衣血に染む。
あなと驚き眼さむれば
あゝ夢なりき夢なりき
嵐に狂ひあられたばしる。

○流るゝ雲

玻璃に映ずる色あせて
灰色の雲流れゆき
外の敗れや内の証
朽ちし柱にもたすれば
空を流るゝ灰の雲

○亡妹

春は花見と連れ立ちて、
塵に染まらぬけだかさを、
夏は川辺に螢狩り、
螢の暑さを流しつゝ、
秋は取りわけ淋しさに、
仰ぐ月をながめては、
冬面白き香爐峰、
雪のけしきのなつかしと、
無常の風のさそひきて、
四季をり／＼に睦み来し、

○紅楓賦

（一）

見よ落日の影とれる、
眞紅の色に燃え立ちつ、
刹那のさまの崇厳を。

のぞむ地上に誠あり、

越後　藤枝女史

双のかひなに胞きあぐる
無惨や弾丸の飛びきつゝ
身は是れ病の床にあり
燈火は淡き怨の外

熊本　富重星の家

早暮れかゝる西の空
淋しき風ぞ荒ぶなる
幸なき身をぞ玉宮の
セントピーダースブルグの
ちぎれ／＼てまた一つ

栃木　すみれ女史

巖の奥に咲く花の、
めてはやしつゝ歸り来し、
秋を通ふ河風に、
籠を捧げて辿りしが、
琴瑟調ぶ虫の音に、
秋の哀れを語りけり、
日頃見なれし荒庭の、
火燵に宵を更かせしも、
はかなく花の散るゝ如、
嫁け歸らぬ旅に出でにし。

弘前　佐野翠坡

名残の光身に浴びて、
満山紅を潮したる、
眩き斗り燦爛と、
錦の帳建て連れ、
秋の女神の立てるかな。

（二）

あゝ花やけき紅葉よ、
秋の命の短かくて、
かたみに競ふ色深し。
かゝる儚けき紅葉の、
入日の影を眺めつゝ、
谿間を閉づる霧白し。

（三）

来れ詩人よ筆執りて、
あはれ妙なる紅葉の、
力の限り寫し見よ。
名残の色の影薄く、
二つの色は消えはてぬ、
天地を深くおほふなり。

○桃の里

緋桃白桃咲きみちて、
のぼる煙もゆたかにて、
けふしも小旗おしたてゝ、
太昔ながらの神杉に、
白地かぶりて少女子の、
謡ふ節うた節もよく、
塵の世遠きひと里は、
平和の雲につゝまれて、
面に映る夕栄に、
粧ほい凝らし婢として、
燃ゆるが如き落日よ、
入日の影の淡くして、
その一枝を手折らんと、
秋の深山路踏み行けば、
来れ畫工よ刷毛さげて、
その崇厳の一刻を、
世は落日と黄昏れて、
夜の幕遠くひろごりて、

岩代　丹藤ふぢ子

むき／＼匂ふ軒先や、
静かにくるゝ桃の村。
いつきまつれる熊野宮、
興作も酔ふか美し酒。
田芹や洗ふいさゝ川、
餘韻かすかに消えて行く。
争ひもなく煩悶なく、
栄えある夢やめぐるらん。

○我が妹

光りけたかきあめの星、
詩のみ冠の眞白珠、
やさしき情かゞやかむ、

○おもひて

綿毛みつなる小羊の、
君やわらかう音もなく、
夏を渡る瞑目の
夕霧、迷ふ、水の面、
其の靜けさの翼にも、
ゆめの姉なる思ひ出よ、
こゝに悔ひあり恨みあり、
不斷の琴を彈じては、
くしきものなるおもひてよ。

○身の運命

吹きすさぶ
着かむ港の
紬綱切れし
流れ流れて
見渡す限り
風荒びなば
風起らずば
漕ぎて港に
楫無き舟に
行方は天に

○お花

村で器量の宜いのはお花
甚の五作は果報な者よ
昨日は畑今日は田と

德島　住友登喜子

あけぼの淸きはなの露、
それよりも猶美くしく、
まなざし持てる我妹子よ。

大阪　岡　千代子

足にふまるゝ若草の、
胸のとばりをかゝぐ時、
人なつかしき思ひあり。
緋桃をかこむうすけぶり、
人泣かしむるふしばかり。
涙は過去に親みて、
あゝ奇しきものいづこより、
怨嗟こゝに生しむる、

富山　いうけふ

かぜのまによ
あてど無く
わが身ふれ
今は今は
蒼うなばら
舟は沈らむ
楫無き身舟
着かむよしなし
乘れる我身の
任せなむのみ

小田原　内野すゞ子

年は十八番茶も出花
お花手に入れさも嬉しげに
馬の背中にお花を乘せて
共に樂しく歸りも行きも
髮にひらめく白手拭の
「お前正宗わしや錆刀

○漁村の夕

夕潮みちて長き日も、
綠したゝる島の影、
夕映赤う照りそひて、
干しゝ唐網とり入れて、
蟹逐ひし子も手をとめて、
やう／＼近き舟唄は、
舟具收めて舟とめて、
糧にかへれる魚の籠、
さしのぞく子の笑顏にも、
得て小肴に田舍酒、
軒の若葉のすきもれて、
影長うひく宵月のうみ、

○牧場の夕ぐれ

呼子の笛のいとたかく
夜のとばりはしづ／＼と
やさしき戀にあこがれて
跫音は銀のすゞのごと

○怨吟

あらき浮世のなみかぜに、
あくまの放つ毒の矢に、
なれが心は朧夜の、
あしたに開き夕にうす、
里で自慢の追分ぶしを
風にふくませ手綱をゆるめ
お前切れてもわしや切れぬ」

千葉縣　榎本しづ子

入相近くなりにけり、
夏うら若き海の色、
歸る帆影の二つ三つ。」
磯邊に立つは母ならん、
見やる沖の父が舟、
大漁いさむ兄が聲。」
兄と父とがさし擔ふ、
重げに見ゆる嬉さしは、
母が顏にもあふれたり。」
思ひなげなる夕餉かな、
光りさしそふ夕月の、
明けむ朝もなぎならん。」

上總　白井文枝

牧場の丘に日は落ちて
平和の村に垂れんとす
道に迷ひし雌雄の鹿
いづちか歌をのせて行く、

長野市　飯塚ぎん子

なやみもだゆる人の子よ、
あたりてたふる人の子よ、
月の光ににたるかな、
あだなる花の香にまよふ、

なれが耳には聞えざる、　みゝかたむけて聞きれかし、
かみのさとしの響けるを、

○散る花につきて　下谷　太田業子

流るゝ水は花のせて　春の運命やはこぶらん。
我云知らず悲しくて　涙はそゞろ胸にわく。
華かなりし世の春に　酔ひて自然を唱ひしは
げに其花の陰なりし　春のいのちと歌はれて
誇る榮華も時の間よ　もろきは花のさだめ哉。
人に無常を知らすべく　神の造りし春と知れど
やがてはゆかん此春に　さても別れの辛きかな。

○旅順の春　豐後　森げん子

天動く砲筒の音、　地震ふ吶喊の聲、
早や陥れり旅順港、
高壘跡なく打ち崩し、　憎き暴露を攻め盡し、
旅順の山川平和なり、
腥風去つて跡もなし、　怒濤收つて靜なり、
春風に飜るは日章旗、
花は麗しく笑へり、　鳥は快よく歌へり、
自然の神は再び來て、
若草萌ゆる旅順の山に、　波靜なる旅順の海に、
深くこめたり春霞、
廣くひゞくは歡呼の音、　高くあがる萬歲の聲、
遠く滿つるは平和の風、

○悲哀　宮城縣　角川花園女史

千々の歎に胸せまり　臥房ごもりに夏の日も
吾身ひとつの秋にやと　枕の下は涙川
流れ／＼て行末は　いづこの浦に注ぐらん

○田舎の夕暮　北越の里　木幡やい子

流れも緩き里川の　水車の廻りに日は落ちて
丸木の橋の朽たるな　平和になれて樂しくも
流りつられて物思ふどち　鄙歌唄ひ歸りくる
里の少女を歌人は　太古の面影其まゝと
暮れ行く空に歎むや

○春宵微吟　宮城縣　大槻入洲子

胡蝶、菫を夢む時　春の女神の御まれぎに
朧の花の香をかげば　さながら酔ふる想かな。
さあれ獸せる野の末の　寂寞をやぶる小夜風に
湧くや快樂の春の曲　酔ひし想のさめよとや。
君が唇血に燃えて　有情な妙の音に吹けば
我はすがゝく十二絃　恨は長き琴の糸。
餘韻は高く雲に入り　女神の夢にふれぬれば
眠める月の照り添ひて　散り來る花の光あり。

○笛の音　越後　五十嵐美波

すみれ花さく春の野を、　縫うて流るゝいさゝ川、
夕榮え雲のうすれゆきて、　黃金の波のうつくしき。
やがて昇れる月かげの、　淡く柳にかゝるとき、
誰が吹きすさぶ笛の音か、　春こひそむる一曲を。

○すみれ　徳島縣　さゞなみ

うき世のちりにそまじとか、　いさゝ小川のかたほとり、
淸きすがたを水鏡に、　かけてうつせるつぼすみれ。
あはれいとしの花よとて、　小手さしのべし一刹那、
たちまちひゞく神の御こゑ、　アゝ我悔いぬゆるせすみれよ。

○春の夢　越後　武藤枝子

歌にはもだえ詩には倦み　春の花野に逍遙へば
小鳥の歌に興を得て　薫れる花の香に酔ひつ。
身はいつの間に新草の　和き蓐に眠りしぞ
蝶の彩羽に打ち乘りて　やがて訪る梅林、

園守る人の許可得て
やはき手のべて一枝を
せゝらぐ水の響にか
はしなくさむるうらめしや
出征にし背子に送らむと
折らむとするの一刹那。
春の女神のさゝやきか
あゝうらめしのさゝやきや。

○西行法師鳴立澤の圖に題す　長野市　佐藤□子

光も薄き夕まぐれ
飛て行方も白雲の
浮世の外に墨染の
鳴立つ音も身にしみて
淋しき澤に佇めば
衣の袖に秋風ぞふく

○春の夕　愛知縣　S　H　生

夕日は入りて春の日の
霞美しくたなびきて
胡蝶を追ひし子供等も
野邊に唄ひし農夫等も
柳にかゝるおぼろ月
吹くと知られぬ夕風は
おもむき多きこの夕
花咲く野邊にきて見れば
霞もうすくあやなせり
若菜をつみし少女らも
家にかへりて影もなし
櫻に匂ふ夕がすみ
はなのかをりを送り來る
一刻千金この時ぞ

○止り水　伊豫　天野八重子

流れ澁りし止り水、
何時靜かなる時もなく、
あゝいつしかと忘れしが。
清き眞清水谷底の、
落ちしかれ葉の肉もおち、
獨り淋しき思ひかな。
曇りし靈も今は亦、
竊ふ稚兒の笑がほ見て、
唖するもいじらしや。
稚兒の惡戯に、
轟く胸に秘めし戀、
巖を出てしその時よ、
今は稚兒にも見離され、
谷の清水に異ならず、
そゞろ昔の偲ばれて、

○捨　子　上野　長坂英子

汝よよく聞け　なれ生みし
今より十年の　其の昔
或夜隅田の　川べまで
母はこの世に　いまさぬぞ
はくゝみ育てし　この母が
せの君共に　來かゝると
いづれの人か　わからねど
木の下かげに　捨てにしを
蝶よ花よと　いつくしみ
今は二六と　なりにけり
明日は身の上　語らむと
なにも知らざる　汝をば
今日まで何も　云はざりし
十年の昔　今宵しも
うかびて語りし事なるぞ
さなげかずに　きけよかし
少しもかはる事ぞなき
何も知らざる　汝をは
姿の拾ひて　わが子とし
育てし甲斐のあらはれて
今日はこの事　話さんか
思ひしこともありしかど
くるしませむが　あはれさに
このすむ月を　見るにつけ
ひろひしことの　目の前に
我が美しき　少女子よ
今となりても　わが心

○胡　蝶　神奈川　平本喜代子

朝は菜花の露をすひ、
花より花にとひてゆく、
かろきやさしき其姿、
美なる翅をひろげつゝ、
夕べは薫に宿をかり、
胡蝶の身こそゆかしけれ、
虹の七色そめ出し、
汝れは何處迄とび行くや、

○浮　世　茨城縣　栗原龍

常なき物は浮世かな。
その名浮世のその如く、
朝の錦ははかなくも、
果なき物は浮世かな。
片身と頼みし友垣も、
昨日は東今日にしと、
噫まゝならぬ浮世かな。
望みはそれは朝ぎりの、
忍びし戀は白露の、
昨日の花は今日の塵、
夕の襤褸となりぬべし。

情誼忘れて浮雲の、
移り行くこそうたてなれ。

少時榮ゆる蜃氣樓、
消えも果つべき身となりぬ。

○うつし世　大和　井上さち

一樹のもと一河の流れ
けさ咲きそめし櫻花
恩愛の契深き身に
そこに縁はこもるなり
夕むなしく散るならむ
薄倖の魂は宿るなり

はがき文

天

○母樣の涙

京都市生酢屋橋通西洞院西入寺島方　桂菫風女史

お父樣が戰死なされた時にも、泣きなさらなんだ、お母樣は氣丈だと人は云ふけれど妾が先月から給仕に出て今月初めて貰つた月給三圓七十錢をお母樣の前へ出しました時に妾の顔を凝と見て目に涙を一杯ためて居られました。

人情の弱點いしくも、うがたれたり

地

○袂の針

下總八木第一校　榎本しづ

只今と歸つて來た貞ちやん、紫包をといて一ツ〳〵讀本を倒にふつて居る、バタリと膝におちた縫針、母樣是が私の袂にあつたの、山田樣の美ちやんに、みかんやろうと手をいれたらチクと刺したよ、これが……。

又、母の胸をチクと刺す

人

○櫻

越後長岡坂上　野菊女

新開の畑中にたつた一本取り殘されて枝いつぱいに花をつけてゐる櫻を鍬荷た與作一寸眺めてやア咲た〳〵悠然にをつゝけ薪か寄木細工だらふと云ひ捨て行てしまつたが花は無心に春風に吹かれて居る

古句あり、白炭や燒かぬ昔の花の枝

秀逸

○夢

越後　藤枝女史

緋桃の蔭に萠え出づる綠草を藉き、白妙の衣ゆるやかに熟睡する春の女神、夢の間中か羽根黑き蝶、一ツ神の懐の寶を探り出して飛び去ぬ。夢より覺めし春の女神今や世の常の少女とはなりぬ。

想像力あり

○此次は

富山　島　幸子

幻燈に現はれし將校の寫眞七八枚、お母さん此度はお

父さんが出るの？母は無言、目には涙を催して。

ハガキ文の妙所

○春の郊外　名古屋市 平野金子

城一面暖な春日を浴て緩く輝て居る金鯱の下を流るゝ黒川の堤、蓮花、菫の香に酔ふ桃の二片三片、風無きに枝を離れて最を軽う摘草に餘念なき、子守女の頬をなて去る

新しい風土記

○自轉車　信濃東筑摩郡 帯刀きさへ

愛輪ピアス號は今日も妾をのせて桃多き村に入りぬ。春風心地よくリボンを吹き紅の花瓣輕くハンドルを打つ、道の傍の小家の日當りの軒白髪の老人草鞋をあみ屋前の小流老嫗米を磨ぐ、忽ち至る緋桃さく乳母が家。

老翁草鞋編む手を止め、老嫗米磨ぐ桶を抱いて驚く、眼をみはつて見送れば一道の薫風は嶽のにほひ

○出征の夫に　徳島 住友登喜子

惜しき袂を別ちまゐらせてよりいかなる不運か遂に工女と落ち果て候。針持つ爲に授けられたる指先糸繰る爲に腫れ上り候へども、草葉の蔭の佛様も、國の爲家の爲夫の爲なれば夢さら歎げき給ふまじくと存じ候。

氣の利たる消息

○夫婦の菫　埼玉 山下芳葉

無情なる花子の手より小川に投げ込まれし夫婦の菫、初めてこそ合ひ居たれ聴て水に流されて離れ離れとなりつ、婦菫は思はずも浮草の根に捕はれぬ、夫菫は救ふべき術もなくて、恨めしげに下へ下へと・・・・。

文致、今一いきなり

○愛弟　磐城 あやめ子

今年五ッになつた悪戯盛りの愛弟、妾の留守な後て机の上へ置いた書物の表紙繪の金鵄勲章の部分を、むしつたやうに切り取てそれを綴糸で胸に下げ、喇叭吹きくきつちよん／＼。

能く可愛がつてあげなさい

○下駄の雪　陸前 鈴木幸子

奥庭の履脱石に誰がはき捨てけん、丸き駒下駄の牡丹色の緒、鮮かなるに、あはれ雪は之れにも降りたり。

一絃千鈞

○春の日記の一節　伊豫 高橋かめよ

私、今かあさんと摘草に來たのですけれども手をつけずに見とれて居るのですなぜならば小さい蝶の花にきて居るからですどうしてつまれましよう。

やさし

○春の野　長野市 安孫子美子

例へばそれ乎、ぬるき血汐！見よ、溶くるが如き春の野！、詩人來り、童子唄ひ、牧牛眠り、双蝶舞ふ、花、

装へば、水低語き、風微笑めば草獣頭く、畫工、筆を投じて去り、鳥、飛ぶに、倦んて、日、やかて、昏る蕭々、注ぐ一犂の雨、是、天界が、慰勞の贈物、意氣頗る昂るかな

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

○野遊　　鳥取　上山千重子

今日しも日曜、妹の花ちやんと、弟の太郞さんに强請られ、野遊びに出る事になつた、野に出ると太郞さんは、雲雀の聲を聞て手取にせんと、右左と駈け廻る、花ちやんが聲を限りに、何程とめても聞ばこそ、終りか此文の生命

○むらさき　　淡路　貞子女史

紫！紫濃いむらさき！何と美しい色でせう可愛らしい蝴蝶も美しい菫も優しい野菊も皆此色てすお丶さうよ懸しい茂さんの買つて下さつたシオルも其色！妾は取り出して接吻しました。
ショール羨むべし

○聲なき聲　　紀伊　はくら本

軒はかたぶき、雨は漏る、水鷄は訪へど、人訪はず。庭は荒れたり、垣破れたり。
花は語らず、月又言はず、而も聲なき聲を聽く、噫、聲なき聲や何の聲。
胸に響く聲

○春の夕暮　　埼玉浦和　小林春子

「美ちやんたいさう遊びすごしてね。」「さう……あらこんなに暗くならうとは」來れや友よ！うちつれて！うたふ唱歌の餘韻は暗をぬうて、風に送られだん〳〵夕かすみにつつまるる野一面、もう人の影は見えない。
我家は近し

○朝　　岐阜　野村靜香女

夢さめて急ぎ起き出づれは今朝の暖かさ靜かな大空そよ〳〵と吹く風は庭の櫻の香を送る小鳥は飛び來て枝より枝に、妾はあかず眺むるのてあつた

○小兎　　靜岡　名倉貞子

春風そよと吹き來るに、さら〳〵と草木の音するそこを見れば、やすやすと眠れる小兎の姿、今しも上り來し月に見えつ、あはれいかなる夢か結ぶらん、

○妾の幸福　　伊勢　伊藤縫衣子

嬉しい哉、妾は貧しき家庭にも有難い御兩親を頂いて居ます爲女學校てふ樂園に遊んて居るのてす、只御兩親を悦ばす爲、前途光明の彼岸を夢想するのみてす。

○花賣乙女　　富山　しづえ

露未だ深き朝まだき草履もはかず素足にて右手に美し花の幾枝、「花よ花よ」と優しき聲にて、呼ばりつ丶、我家の前を過ぐる愛らしの乙女、張のある目に滿々なる泪は軈てホロリと花にかゝつて淸き露となつた

○雲雀の君へ　　越後　田中たつ

雲雀の君よ！下界は不潔なりと思ひて、常に高きみ空に舞ひ上り囀るか。わが搖籃の地は、小さき川の流るゝありて、凡ての物皆淸かなり。されば明くる日より鶯と共に我園に來りて遊べや。

○白梅　　鳥取　ゆり子

何と云ふいゝ天氣なんだろうと思つて窓を開けますと昨日まで自分の心をなぐさめていた梅はもうあの淸い氣高いそして優しいあの影はどこへやら。

○夕の海　　新潟縣　すみれ女

日は今しも、名殘の光を波間に投げて、四の海に沈まんとし、磯邊にくりかへす波のさゝやきは、己が運命を語るが如く……
あゝ靜かなる夕の海よ！

○春の夕　　麹町　花野露子

棠に、棚引ける、霞の内に、鎭守の杜は、消え入りぬ。青葉を、滿たせる梅の木の、太やかなる、丘を廻りて、水車小屋の臨に入る、小川の小波、何事をか、さゝやく川上に、咲ける櫻の、二三瓣を、載せつ。

○破障子
愛媛縣　加藤　秋月女史

破障子から吹き込む風を面に受け勝き破蒲團を破り四十路餘の母らしき人疲れ窪みし眼に涙を浮べ十一ばかりの男童の手を取り頬に何か論して居る時々軍人の弟、主人大事など云つて居るそも誰の遺族か、あなあはれ。

○片破月
美濃　臼井　茂子

片破れ月に、薄黑い姿をみとめていかにも邪慳な濁聲て、露ちやん、なぜ家へ這いらないのと呼ぶは其少女の後添ひのお母さんなのでもあらう呼、呼ばれたる、この少女の行末は如何なる運命が宿るてあらう、

○夕ぐれの月
越後　五十嵐　美波

色あせし櫻花のひらくと梢はなれて泥土に委するあはれふかき夕ぐれの門に立ちて遠征の背の君を慕ひ無限の感に沈める姿は今し遊び勞れて歸れる爲男清に呼びかけられてわれに歸りぬ

○蕨にそへて
麴町　廣瀬　蝶子

深山の奥にも春が參りましたと見へ今日田舍の知るべの者がはるくと蕨を持つて參つてうちの娘がお孃樣にお目にかけたいと申て山からつんて參りましたと云つてくれましたから少してすが御福分致します其親子の眞心をお味ひ下さい

○菫
長崎　岩岩　俊子

見よ艷なる菫の花を、今日しも二つ三つ八重櫻の下にほゝ笑みかけた。其床しい香は絶えず春風にたゞようて居る。花に醉ろつるつがひの蝶は、羽衣輕く舞ひ下りて、濃き紫の花瓣に宿をかりた。

○桃
兵庫縣　三浦　ひさ

たゞ靜かなる聲、賤が窶家にやさしきふしの唄、梭の音と共に聞ゆる。やがて唄はやみて、垣根しづかに、桃の花はらり。

○順　禮
美濃　梅　村　たい

親子なにをか、語りゆく順禮の、すそのへに、ひらひらと、胡蝶は從ふそぼそぼとふる春雨に菜種はなちる夕ぐれの野邊

○軍國女子
新潟縣　齋藤　小夜女史

愛讀の諸姉よ、此の女子文壇は吾々の文の筆戰場ではありませんか、我忠勇なる將士を、よく慰籍するものは何、又よく志氣を鼓舞する者は何、曰く文章てある諸姉益々奮勵したまへ。

○旅　僧
千葉縣　宰　菊　女　史

名も知らぬ花咲ける春の野を、墨染の衣まとへる行脚の僧たゞ一人、とぼくとたどり行く姿は、萬象長閑けき春の野に、秋のあはれやあるといはまほし。

○墨繪の梅
大阪　田　中　萩　雨

食堂ての雜談につい花が咲て、閉め忘れた離の書齋、ふと氣が付て廊下、ガラく、響の薔薇一瓣、肩を滑て漆闇の泉水を僅に白く染め抜たのも知らず、遽て來て見れば椽の障子にオー、月が畫た墨繪の梅。

○露　玉
上毛　江　葉　民　由

小川の土橋の上て見て居る程に、下駄を手にして小走に來る、一人の里の小兒、何如に思ひけん、其の泥足をば川にて洗はんともせず、堤の凉しき草葉の露て、心地よげに微笑つ下駄を穿ひた……。

○たねまき
宮城縣　二階堂　さだ子

風なぎて靜かなる朝、六十近き腰の屈みかゝりしぢいさん、白はちまきに若がへり左手に大なる籠持ちて田の畔をまわりながら、きれいにならせし苗代に小波うたせて種下ろしみのれよかしの手のふり樣あゝ面白し

○滿洲の野
宮城縣　二階堂　さだ子

戰ひ終ひたる滿洲の廣野は、いたく荒れはてゝ、夜半吹く風さへなまぐそう加へて、雲間もれ出づる片われの月、いよゝ冴え渡りて四邊寂然たり、折柄物すごき野狐の一聲……二聲いとかすかに

○籬の山吹
京都　岩　村　芙　蓉

籬の元に今を盛りと咲き亂るゝ八重山吹の花にも葉にも露もたれて粹いと重げにうなだるゝ、一枝手折らんとしてたゆく居る我妹の姿こそげにやさしかりき

○お隣りのおばさん
山口縣　大　井　滿　瀨

只今戰地の息子より來た無事の御知らせと聞いて、久しい間寢て居られし隣りのおばさんがイロハのイの字も知らないくせに飛び起きて、我れにも見せよと、やせたる顏をよめの前にさし出したるもいとをかし。



佐々木信綱先生選

天

○　神奈川縣鶴見五四一　佐久間芳子

わが家は春日よき家桃さきて
　朝な〳〵を小鳥來る〳〵家

（評）平淡なる中に田園の淸きたのしき味ひこもれりこたび中の秀逸

地

上毛碓氷郡岩野谷村　花岡滿子

折にふれて

紐ゆるう白衣つけたる韓の民
　春日ゆら〳〵牡丹に暮らす

（評）亡國の民のおもかげ見ろやうなり

人

笛

越中　島ゆき子

朧夜の花の御空に忘れたる
　笛よ今宵は神吹きまさむ

（評）其調いかに淸からむ

秀逸

○　下總　小高せい女

島守が昔を戀ふる春の宵
　京の錦繪くりかへし見る

（評）そのかみの思ひ出いかに多からむ

○　姫路　毛呂正子

春の御神下りませよのみちびきか
　雲間がくれに雲雀囀

（評）其聲人の心をも空にあくかれしむへし

○　近江　春醉子

美しき虹の彩色帆に浴びて
　海士の小舟の島めぐり

（評）うたも亦うつくし

○　越後　しん子

賤の男が鎌とぐ流水あせて
　浮藻の花のかれ〳〵にさく

（評）畫のごとし

○　弘前　佐野翠坡

たゝずみて笛ふく人の影黒し
五條の橋の春の夜の月

（評）いにしへの御曹司のおもかげもうかゞひて

○　福島　星俊子

なき人のかたみの兒等をはぐくまん
數ならぬとも益良雄の妻

（評）雄々しき心亡き夫も地下に瞑すべし



本居豊穎君筆

○　長野　安藤子美子

若者は召し出されてうぶすなの
祭さびしく秋暮れて行く

（評）太鼓のひゞきもさびしかるべし

梅　福岡　高松ひて代

笛の音の遠くひゞきて
梅の細道月になり行く

（評）一二句原作かすかなる笛もかをりて

○　越中　五十嵐美波

うなゐ等が置き忘れたる花籠に
眠れる蝶のさめんともせず

（評）長閑なる春の野の夕へ紫色なせる雲間に入日の光今や沈みゆくらむと

○　淡路　露子女史

戰友のうたれしあとを弔らへば
枯野五十里遼陽の月

（評）一句原作戰友は三人うたれぬ

○　駿河　小澤紫桂

草刈りてかへる少女の籠の上に
一と枝美くし山櫻花

（評）三四句原作花うるはしきさくら一枝

○　越中　諏訪やい子

行く春をたれこめかちに病ふして
窓の柳にそゝぐ雨見る

（評）二句原作賤かふせやに

○　芝　白木菊子

去年の春得たる獨り子失ひて
　思ひ出多き花の下蔭

（評）母の情さもあるべしとの感深し

○　本郷　堀内直枝子

うまいせる子をゆりあげて吾がせ子の
　かどて見おくる夕べ淋しき

（評）いくさの門出か

梅　熊本市　柴尾菊子

咲きぬれど父はまされは奥つきにせめて手向んしら梅の花

すみれ　伯耆國　伊藤春子

ちぎりてし妹は逝きぬ俤はきぬ小野のすみれをたれとつまなむ

軍の兄を思ふ　志摩國　小林君代

浪荒き磯べの岩に只一人軍の兄を思ふ夜半かな

○　栃木町　今村清子

戀衣もきつゝなれにし昨日より島田の形の髷とかはりぬ

○　岩代　永戸初子

心地よの窓の戸あけて眺むれば花に興あり朧夜の月

○　茨城縣　石塚雲孫

仰ぎ見る星もかすかにうす曇り雨にやならん明日の修羅場

○　青森縣　汀蘭女史

冬ふかきねやのうづみ火かきおこしよな〳〵しのぶ戀の古里

春雨　常陸國　西野春女

河そひの小村しづかに暮れて岸のやなぎに春さめそゝぐ

○　岩代國　丹藤ふぢ子

宿り子の若しも男の子にありもせば亡せにしつまのつるぎとらせん

○　栃木　すみれ女史

蛙鳴く片山里の薄月夜かぜ吹くにさくら花ちる

○　東京　野口はる

つばくらめ柳のえだをたづねきて來なれし宿に古巣つくろふ

○　弘前市　翠坡子

いわけなき箏の音もるゝおぼろ夜の垣根靜かに桃の花散る

○　越後　市野靜子

憂きことは皆打わすれ野に山に花をたづねて一日暮さん

○　越後國　藤枝女史

香の煙細う棚引く夕風に母の奥津城花吹雪する

春　石見國　千代延倖子

東に花のとばりのかゝげられて神の冠の七色にほふ

軍人　岩手縣　沖館ちか

武夫の手にとる刀のつかのまもくにの心はわすれざるまし

○　熊本市　富重歷子

雪白きみ山の奥の細徑を墨染の人さびしげにゆく

山路の梅　群馬縣　吉村花子

うぐひすの聲をしるべに來て見れば山路の梅は今さかりなり

梅花　茨城縣　栗山松波子

東風に香を送る我が國の梅の花こそ今盛りなれ

○　横濱市　岩瀬まつ子

外國のみれにもあかる日の御旗是ぞ御國の譽れなるらん

看護婦　磐城國　片寄かく子

戰ひて手負になやむ武士に厚き情を捧げゝる哉

月前花　神戸　尾崎翠

はるの夜の月もよしのゝ山ざくら花ぞ匂ほへるかげの長閑さ

紀元節　鳥取市　上山千登子

類なき我御國の礎を今日たてませし橿原の宮

○　富山縣　裴島錫子

大君の大御心もひろ島の行幸をいはふよろづ代のこゑ

○　本郷　堀内直枝子

梅　水仙いけてなつかしき君のかへりの歌をよむよひ

○　埼玉縣　飯島鐘子
我が心清く靜かに進みたや春野の川の流れの如く

深山櫻　長門國　大谷末子
此花の馨りたづぬる人や誰山路に散らす事の惜しさよ

折にふれて　群馬縣　津久井草子
なにげなく窓おしあけて冬の夜を見上ぐる空の星ぞさびしき

クロパトキン包圍せらると聞て　富山縣　地崎ふさ子
昨夜見し夢はまさしく黒鳩の網にかゝりし知らせなりけり

初春　富山縣　房子女史
野邊みれば雪解のひまにみどりして庭の草木も春めきにけり

○　筑前國　兒島桃枝子
ひねもすを花よ蝶よと狂へども歌もなくてや春立たんとす

軍國の婦女　佐賀市　照露草
御軍のうへのみかたり明すよりみにふさはしき業や務めむ

○　伊豆國　古見彩子
白壁に歌をそめます房に落ちて細虹きゆる岳陽の城

小女　美濃國　宮部鈴子
雪消えて梅の花咲く峠道に何を思ひて少女佇む

○　千葉縣　小川恭興子
長閑なる春の野つらを眺むれば霞かくれに夕雲雀なく

○　千葉　吳いち子
池水を鏡となして青柳は亂れし髮を梳る朝風

折にふれて　福岡縣　金原品子
けんをさげつゝたかつきてをさな子が我れ大將といさみまはりつ

○　上總　麻生みよ子
柏手の音もまだせぬ御社の青葉涼しく朝の風吹く

初春　渡島國　堀井つせ子
鶯のねむりやいまださめざらんしづかにあくる春の山里

○　京都市　松永幸子
女の神の殘しやしけん岩かげに淸く氣高き白百合の花

○　大阪市　露香女史
切髮の女ぬかづく新墓に三日月ほそく椿花散る

○　麴町　小島仁子
住吉の御室さびはて草むす庭に白衣の露鈴虫のこゑ

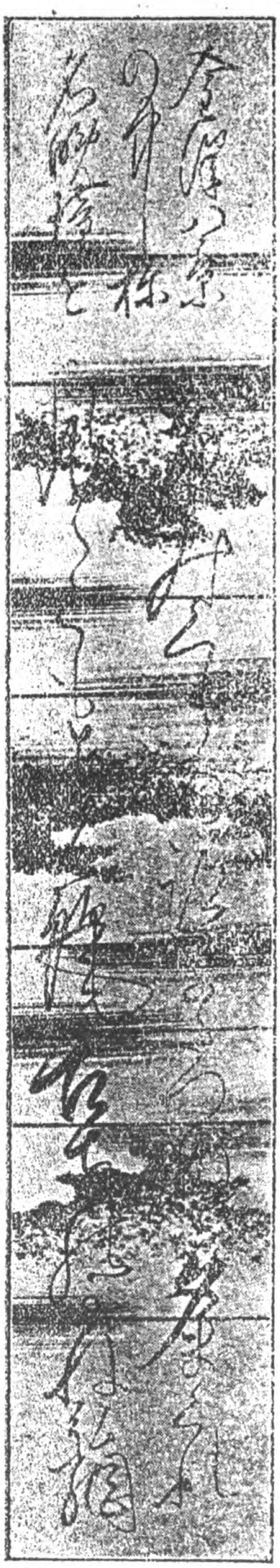
なき母　赤坂　高瀨あはみれ
なつかしき御寺の鐘の聞ゆなり母の御姿胸にうかびて

○　神戸　青山文子
色かへぬ松の緑のそれのごと幾千代かけてたのむ願ひを

○　和歌山　池田松枝
病癒えし祖母をたすけてさまよへばたのしき袖に花ちりかゝる

○　長崎市　栗田すが
なぐさめの袋に春の風いれておくらまほしも雪のあれ野に

星　京都市　桂菫女史
折々はつゝ音寒くひゞき來て劍の[illegible]めく



故佐々木弘綱君筆

浦春風　　美濃　内藤みち子
櫻貝ひろふ少女の袖ふきて長閑に霞む浦の春風
春雨　　美濃國　中島きく子
若草の色もまさりて春雨は霞とばかり見ゆる頃かな
○　　上毛　中内しづえ
春の戸をいてゝ歌よむとりもあれな春たつ園の梅咲きにけり
梅の小道　　鹿兒島　森　秋子
花の香にほのかにあけし梅のみち小唄きこえて馬のすぐなる
○　　佐賀市　永野壽子
氷なすやいばにうつる平円月斥候一騎影斜めなり
春の夜　　越前　河越愛花
春雨の靜かなるよを梅の窓に戀かたる子の影うつくしき
○　　埼玉縣　山下芳葉
少女子が草摘み遊ぶ春の野に勝瀬中佐の歌いさましき
川千鳥　　神田　平田俊子
引きあぐる障子の窓に月さえて川風寒う千鳥なく
鶯の聲　　磐城國　横山八重子
愛らしく花さき香ふ梅が枝に初音ゆかしく鶯のなく
○　　信濃　帶刀きさへ
梅が香にひとり微吟の朧夜を枝折戸たゝく文使のこゑ
春の朝　　下野國　櫻井とし
一しほはゆかしく聞ゆうすもやのたなびく谷の鶯の聲
○　　富山縣　宮田巳惠智子
美しとひとり見て居し虹の輪のうすれゆく時鐘は響きぬ
谷間の櫻　　薩摩國　崎山玉子
時ならぬ殘んの雪と思ひしは谷間に咲ける櫻なりけり
許嫁の不可な歎きて　　大和　かなる子
世の中に悲しき事も數あれど思はぬ方にとつぐ歎きは
○　　廣島市　和知廣子
わが鮎の影さへ淸き川の瀨に散りて浮べる白桃のはな
○　　石川縣　とみ子
神にまつるみちのべの石に苔ふりてたそがれ時なこうもりの飛ぶ
○　　近江　北堅蛛子
征兵のシャツを縫ひつゝ更けにける春の夜風は寒くもあらじ
春雨　　岐阜縣　知久ため子
故鄉の老木の櫻いかあらん春雨降れどとふ人もなし
雨後の庭　　紀伊　松山季子
何となう書窓を押せば空晴れて蝴蝶ひら〳〵しろがれの庭
弟の心にて　　岩代　服部てい子
母君のみ使なして犬つれて輪まはしてゆく蓮華草小道
春雨　　美濃　梅村たい
去ばしとてやゝ立よれば琴の音のゆかしくもるゝ春雨のゝき
○　　弘前市　平山ちい子
ほのじろう梅ちる苑の石燈籠灯かげおぼろに夜の雨ふる
○　　岩代　服部節子
なきあとは母をたのむと出征ましゝあゝ我夫よさきくましませ
○　　越中　濟野はる子
いざやいざふけよ春風ふれよ雨櫻の花のさき出てぬまに
○　　上毛　今井八百子
笹舟のちる花のせて浮びけり柳の汀人はあらずして
○　　播磨國　常深　花
夕暮を木魚の音の途絶えして若葉にそゝぐ雨しづかなり
○　　紀伊　山本美妙
銃とれど風流の人もあるものぞ沙河の夕べに笛の音ぞきく
菫　　豐後　加藤百子
詩人が淸き寢耳に懐しき菫の花のさゝやきの聲
折にふれて　　熊本縣　市原美根子
朝日かげ寺のおし間に有明の鐘も靜に明渡りけり
落花　　岡山縣　勝野　琴
櫻花かねのひゞきにさそはれて二ッ三ッちる夕ぐれの空
紅梅　　伊勢　伊藤縫衣子
紅梅の一ひら二ひら舞ひ散りぬ調べゆかしき笛の音して

さちはへ給へと祈りしもかひなくて 横濱市 小林とき

少さき時父母逝きぬ今年また兄は戰死の寂しの春よ 長門國 倉岡月代

○

春を歌ひ我が世のかぎりながめてむそのおぼろ夜の上花の月 備中國 川合房枝

○

島畑のたがへし終へて歸る舟にうつくし一枝早咲の桃 備中國 泣琴しげ子

○

つがひとり暫しうたなきひろ下り谷の一つ家落つばきする 東京 武島みれ子

○

つぶすなの森に怪しき音すなり夜な夜なすさむ小枯の風

落花 岩代 芳子

日の本の御軍人は君のためかくこそあれとおのれまづちる 淡路 碧涙子

○

海士が子の障子に淡ばし朧月主あらずして偲ばるゝかな 徳島市 住友十喜子

○

征く君をしばしとゞめて思ひ出にかたらまほしき花の下蔭

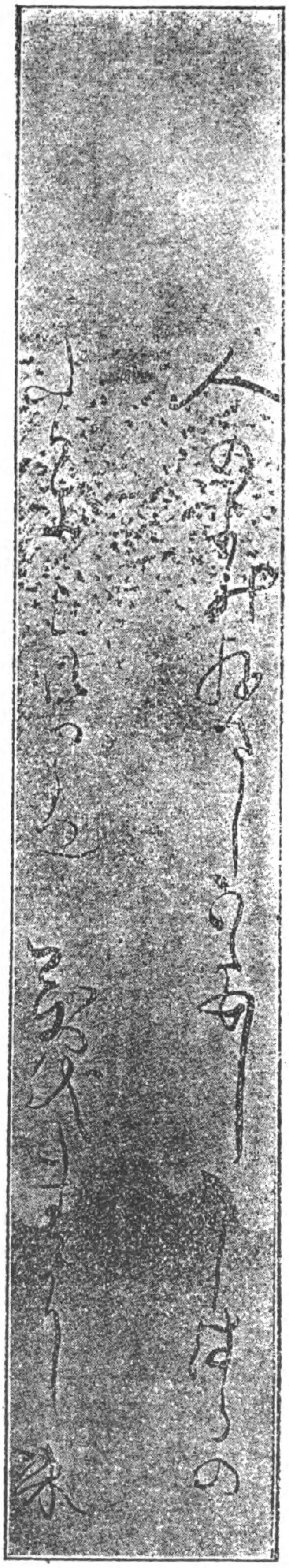
落花 神戸 中村薗子

ちごだきて此世をかこつ女あはれ櫻ちりしく山寺の庭

愛子 大阪市 今出渓花

眠むる子やいかなる夢を結ぶらむ我がせ逝きし秋雨の夜に 熊本縣 吉村千代子

鐵



小出粲君筆

あやにしき織り出す賤の少女子が身にはつゞれなまとひながらも

月前納涼 肥後 吉村千代子

影うつる門の小川におりたちてむすぶもすゞし夏の夜の月

春の水 備後國 池田しとみ

芋洗ふ背戸の小川の柵に翡翠とひ來蔭かげにして

春の夜 近江 桐山みゑ子

梅香る一夜を君の玉章に昔の戀を泣き明しけり

白藤 下谷區 太田樂子

めでられし君永久にかへりまさぬ恨みぞ長き白藤の花

梅 京都 平禮壽賀子

ならずともやがては散らむ梅の花一枝ゆるせ亡き君のため

遠征の君を思ふ夜 京都 淺野たれ

せの君は今宵いかにと眺むるに涙もこぼる木枯の風

○ 群馬縣 上原きよ子

牛ひきてかへる童の見ゆるかなたれ花咲く川添ひのみち

○ 麴町區 高橋ゆかり子

舍人曳く御所の牛車近うなりて都大路は春さめけぶる

若菜摘 青森縣 新谷竹子

若草を摘みて遊べる少女子の赤きりぼんに蝶のとまれる

○ 山梨縣 一倉はまじ

歌の友におくらむふみに花瓶の花散りかゝる春の夕ぐれ

○ 備後國 桑原え留子

いかのぼり如何にたのしき春風のふきのまに〳〵空にのぼりて

春月　　神田美生子

わかなつむ里の少女の影消えて野末にかすむ春の夜の月

新潟縣　五井かほる子

○

見渡せば面白さうの涼み舟若き美人のあちら向きけり

越後國　田中つた

○

行く春の色香を見んとさすらへば草葉の露の裾をぬらしぬ

上毛　すみれ女史

○

君と共に同じ里なるまなびやに行きし昔の春ぞこひしき

鶯　　千葉縣　ゆきえ子

霜とけの山路とぼ〳〵辿る翁鳴く鶯に耳傾けつ

折にふれて　　群馬縣　上原なか子

妹の手振かはゆくうゐたりし緋桃は咲きぬ其の主はなき

落花　　岩代　よし子

山里は花の吹雪にとざゝれて流れもあへぬ谷川の水

○　　上野國　倉金閑子

世の中はまゝならぬとは聞きゐしが今は我が身に知るぞ悲しき

梅　　伏見　秋上紅雨

紅梅の白雪かざして笑めるかな大和をのこの心うつして

○　　宮城縣　花園女史

七夕の深き契りも下からは皆空事と見ゆる星合

梅　　宮城縣　菊田とこ子

友とち小川を渡る夕月夜水の音清く梅かほるなり

寒蘆　　神奈川　月岡綾子

風わたる浦のあし原霜かれてつなげる舟もさびしかりけり

若き尼　　横濱　川口ふみ子

風誘ふ花よりも尚姫君のかへにし姿に櫻散るなり

○　　宮城縣　阿部美子

若草のもゆるしぼしよ少女子の罪なき顔を花にむけたる

○　　島　文子

靜かなる海に縦ける眞帆片帆初日に映えて色麗はしき

鮎つり　　伊豫　高橋かめよ

川あしの青き葉陰に糸たれて今日もひねもす小鮎つりけり

蝴蝶　　長野　飯塚ぎを子

そのむかしなれがやさしき其まひはいづちの神のをしへさづけし

○　　越後國　武藤枝子

病む母に藥すゝめてつゞれ窓そぼ降る雨も聞くにえ堪ぬ

人の許に　　越後　前崎照子

心あらば峰の白雲よそにしてひとりすみれのやどをとはなん

藤花　　神戸　きく香

手をうちて鯉よぶちごの肩の上に長くさがれる藤の花かな

○　　石見　山崎春江

東より西へ航路を空の海に梶なく進む月の大船

折にふれて　　越後國　吉田にこう

亡き姉の手植のうばらほゝ笑めど今はたむけのはなとなりぬる

櫻　　滋賀縣　藤井旭櫻

吉野河涙の底にも影見えてこの世の外も花や咲らむ

折にふれて　　上野國　長坂英子

思ひあまり語る友なく只一人眺むる夕べ春の雨ふる

海上春　　神奈川　平本喜代子

うごくともわかぬ白帆に春見えて南の海に霞しくなり

○　　上野國　安藤多喜女

別れつる君がうつしゑ眺めつゝうらむにあまり顔うつくしく

落花　　三州衣浦の瀾頭　傘松子

のどかなる門の小川に花のせし笹舟二つ流れ來にけり

梅　　越中　有澤みわ女

玉だれの小簾にもる風誘はれて手折らぬ袖に匂ふ梅が香

春曙　　大阪　岡千代子

ほのくらき松原つたひ磯に出ぬ浪より明くる春のあけぼの

櫻峠　　下谷　加藤朧月

追分の唄に栗毛の勇ましく馬子の菅笠に櫻花散る



俳句



巖谷小波先生選

天
律院やあさ日冷きしろつはき　廣島縣高田郡甲立村　中村東雲

地
風の吹やうに小鮎の散にけり　大阪東區上難波南三町一五　武藤愛子

人
衣あらふ上に散るなり桃の花　横濱市南太田町　岡千代子

秀逸
鼠ひなの片そで引きにけり　奈良　竹田菫江
花盡きて小寒き婆の渡し哉　富山　大瀧菊枝
うす暗きふる燈行や桃の宿　栃本　秀子
青柳や雨に灯點すくるわ町　筑後　芝翠子
菜の花やあくた捨たる塚の上　下野　櫻井とし子
こふしから陽炎の立つ仁王哉　久留米　石井みつ子

靈の口元さむくはつれかな　長崎　花園晴子
人の爲め都み殘しけり花すみれ　山梨　一倉はまじ
忘れたるりおゝのそばや花菫　近江　春醉子
たが爲めにゑくほの露や壺菫　靜岡　高木ひほ子
藪入や犬の出迎ふかどの先き　安房　渡邊ぬい子
古雛と菜の花と流れ來りけり　府下　伊東正子
行き越えて菜の花見ゆる山路かな　兵庫　山本利子
面白く暮せし春も行きにけり　新潟　園山廣子
春の夜を歌召されたる式部哉　岩代　丹藤ふぢ
春雨や花うるはしきみづ溜　大和　峰畑節
陽炎や海士が藻を干す指の先　肥後　三浦たけ
爐塞ぎて雛立てしくさ屋かな　長門　梅田糸子
神主の下垂長し藤のはな　遠江　坂田泉子
撫子のこちたく咲いて小雨哉　福岡　靜濱女史
鋤の柄に眠る蜻蛉や畠の晝　能登　杉下ふみな
父島や母島かけてかすむらん　神奈川　埋花
自轉車の一むれ續く日和哉　美濃　宮部俊子
曳く駒の鬣ながし春の風　岐阜　勝子
近うても夜になる花の戻哉　遠江　芳江
春の夜や犬も大きな欠する　紀伊　木村寬知枝
寺路や四五本なかき土筆　石見　青柳秀子
細巻の煙草いぶるや壺菫　伊豆　古見杉子
緋桃咲く蜑蝦の小家の雛祭　埼玉　みち子
初霞見送る見を包みけり　常陸　晩翠女史
宮人の短冊もあり里の梅　東京　武笠きく子
春深し標本の蝶飛ばんとす　埼玉　貫井桃吟
庭下駄の儘て野に出る日和哉　鹿島　季子
小按摩の笛覺え來る春の宵　福島　柏木宵子
落晩の音尙ほ血あり半風子　東京　靈溪
下芝にみどりを移す柳かな　三河　傘松子
初櫻酒亂の人の劍舞哉　下谷　加藤瀧月
南朝を語る僧あり花吹雪　東京　近藤榮子
日並の俳句の會や桃の村　伊勢　伊藤縫衣子
淀川を下るに船やおほろ月　淡路　貞子女史
見すかせば鶴の古巣や松の花　神戸　青山文子
牛の背の主は霞みて春野かな　美濃　内藤みち子
當てゝ見よと妹が握れる菫かな　京都　桂菫風女史
葬列の人寂として梅薫る　富山　はるさめ女史
日の當る椽に忘れし頭巾かな　茨木　生田目ふぢ子
山姫の乳と味ふ淸水かな　札幌　ゆかり子

誌友倶樂部



○諸嬢と記者

○春秋の二季には文壇の臨時増刊を御發行になります様御願ひ致します私は今春の増刊が一日も早く發はれるのを待て居ます（靜子）（記者日、今は女子文壇の編輯に全力を注いで居りますから今春は増刊を出しません、初秋には最も有益な且斬新な増刊を出す筈て既に計畫して居りますから折角お待ち下さい）

○誌友の諸姉様私は誠におろかな者てすが愛讀者の一人ですから以後御交際を願ひ升又記者様文と其の他の新翻詩の如き物を別々に書き同封にして出してもよろしう御座いますか伺ひます沼津の八代さん御手紙有難う〱皆様も何卒御文通を願ひます（三島加藤涌子）（記者日、詩と文とは用紙が別てあれは無論同封て差支ありません、一寸序てすから申します、此はがきのやうに諸嬢の交通やら記者と諸嬢やら、ごつたに書いたのは編輯上困りますから、以來どなたでも、別々のはがきに書いて下さい）

○私は此度此美しい清い女子文壇の愛讀者となりました皆さん何卒末長くつきあいいたしましやう、又記者様投書するには何歳迄なのてす（沼津八代三四子）（記者日、左様、年齢に制限はありませんが、本誌に投稿せられる方は若い方が多く、若くて十四五才から以上、二十四五才迄が最も本誌の誌友に多からう思ひます）

○記者先生に伺ひますはへがキに二十四字宛認めて振假名を付けろのてすか（澄子）（記者日、左様）

○記者先生様私も第二號より引續き愛讀者の一人て御座りますから何卒御愛顧の程願上ます、就ては先生様のも投書致したう御座りますが叙事文、叙情文の區別が善く了解致しません、又、投稿規定欄には圏點は一切施すを禁ずとありますが是は一文章の意味の完結する處へもつけては悪いのですか又は諸姉様の投稿文が本誌へ出て居りますが之に做ふて圏點句點を施して宜しいてすか何卒第四號の誌友倶樂部欄へ御答を願ます（埼玉縣内田みの子）（記者日、文章の句ぎり、句ぎりに打つ點は圏點とは申しません、句頭を切ると云ふのです、句頭は勿論、打つてよろしい、圏點は選拔の時、諸先生が名句の處へ打たれるのて御自分て打つてはいけません）

○まことに愚な事をお伺ひ申ますが三月發刊の分締切は毎月十五日に繰りあげとありましたがたとへば五月發刊の分は三月十五日締切と云ふのでございますかまたは四月發刊の分締切は三月十五日と云ふのてすか一寸誌上てゞも御教示を御願ひ申ます（死子）（記者日、前々月の十五日即ち五月發刊のは三月十五日に締切るのてす、それは多く他の諸先生に選を乞ふからて編輯局て見るもの例へは誌友倶樂部の如きは右の限りてはありません）

○（イ）記者様（イ）圖謠は二寸五分と三寸に切つたのへ書くのてすか、（ロ）圖謠を送るには、どんなにして送るのですか（五人兄弟）記者日、イは御尋ねの通り、ロは普通の郵便てよろしく、開封なら二錢て來ます）

○私は女子文壇第一號からの愛讀者てすがまことに適當なのてよろこんで愛讀して居ますが思ひきや目出度い初號からの剽窃文まあどうした事てせう神聖なる女子文壇の愛讀者として大に恥づべき事てはありませんかその方々はこの後はよくかへりみて改め給ふ様はるかに願ひ上げますまう一つ願ひます記者様あの眞似目な記事文を載せて下さいませんか（私は今年十四、父上から別記の名を賜りました（筑前福岡春鶯女史）

○貴社ます〳〵御繁榮のよしこよなきよろこびに候さて拙きものとして差上候ところうれしくも有りがたき御撰にあづかり何よりの書籍澤山賞として下されまことに〳〵ありがたく候（福島縣耶麻郡奥川村杉原たかやす）

○一寸記者先生に御伺ひ申ます私共は姉妹てすが二人同封て宜しう御在ますか、且又群馬縣の伏島直子様より芳名は少女界誌上て承つて居ります同縣人のよしみを以て是非〳〵御交りを願ひます（群馬縣富岡町今井八百子、房子）（記者日、無論同封てよろしい殊に御姉妹て本誌に玉稿をいたゞくなどは最も本誌の光榮とする處て結構な仕合せてす）

○記者様に御願ひ申ます何卒ぞ天地人のみてなく秀逸迄の住所を明記して被下ませんか妾しは秀逸迄の御人の和歌を寫して本にして居ますから（姫路毛呂正子）（記者日、なるべく然う致しませう、おうつしになる御熱心に賞てゝも然うしたいと思ひます、次號からても實行致しませう）

○記者さんにお尋ね申します、本文壇投稿は圖謠の外各欄共一人一章としてありますが一ケ月に一稿以上は出來ませんのてすか例へばハガキ文を二稿投書致せば一章は御没收となるのでありますか是非御教示を乞ふ（韓國一婦女史）記者日、一度に一人一章以上は不可と云ふ意味て一ケ月に幾回投稿あつても差支ありませんが只成る可く傑作を一篇御出しになる方が得策てす

○第四號にかるた遊びと題して、叙事文を作ッた、名古屋の永田加須尾と云ふ人は、男てすよ然も、隨落書生だから驚きます、彼の人は永田曉星とも云ひ、一男とも云ひます、あんな者が此の立派な雑誌へ、飛びこんてくる、なんて、ほんとに、困ります、（すっぱぬき生）（記者日、斯云ふ注意も折々は願ひます、實に失敬極まる人間てす）

○剽窃詩文の注意

三州の都筑靜子様に一寸申上ます本誌第四號に御投書なさッた「梅を觀る記」は決して貴女の作てはありません、私は婦女の文藝て一句も違はないのを見ました、しかし靜子様罪を悔い過を改るは善の最善とか、此後はきッとおつゝしみなさいよ（山口縣村田みさを）○近刊の貴社發行女子文壇を讀みもてゆくに其ハガキ文欄に天筬を得た三河國碧海郡大濱町の都筑枯梗女史とか云ふ婦人の出した「米搗男」なる短文は全く剽

盗文なり是の文は與謝野鐵幹氏の主筆せられし明星雜誌第五號の終りにあり（大分縣安東白潮）

〇記者さまへ一寸申上げ候、女子文壇三號にあい子さまとか仰せらるゝ御方か第一號に掲載されし消息文雪見に招く文の剽竊文なることを誌友倶樂部に御發表被成候ひしが、作者麹町ゆかり女と有之甚だ困却仕り候、該作物は妾の作にあらざる事第二號の掲載たよりに明白に候へども、同幾萬の讀者の中には未だ御承知も無之方あらんを恐れ、今一應正誤頂き下され度候但し右の文が剽盗文か否かは妾の知らざるところ、原作者の御誤解なからん事を祈り候（麹町區川元町三丁目一番地高穏ゆかり女）

〇四月一日發行の本誌第一卷第四號の消息文中（寫眞にそへて友の許に）と題し氏名を加賀の倣子と發したる者は全く本人の作に有らず東京明治書院發行の橋詰孝一郎著中學書翰文範中に有る者と殆んど同一にて少しく其の文字をかへたるに止る者なり斯くの如く他人の文章を剽竊して迄も誌上に名を穢はさんとするは憎みてもあまりある者共なり（遠江夏子女子）

〇本誌四號の論文の部て地位を得た小野靈枝子の「鏡面に向ひて」といふのは女子の友臨時發刊の第二才媛詞藻にある岐阜縣木村えい子の（鏡面に對して感あり）といふのから剽竊したのです前は七字ばかり終の方は二三行ばかり違はしてあるのみあとは皆同じです靈枝嬢よ四五年前の古い雜誌ですから誰も知るまいと思つて盗んでも天下には何千萬の眼がありますよ貨品をめあてに盗みをするなんてさもしいお心では廿世紀文明の女子とは云はれませんね又圖福て平本きよ子の「畔道」はだいぶ前の女學世界にありました御兩人ともよく〳〵反省なさい（秋田白梅子）

〇第一卷第四號にある新體詩中の「新征衣」てふ題にて、三河國都筑靜子様の作は、明治二十八年に、大日本圖書株式會社より發行した、大東軍歌、ふゝの花卷の二十五頁にある、世外佳人の作歌て、美濃の高橋民子の作曲て、しかも堂々たる唱歌と寸毫の違もないが、都筑靜子様の作歌ですか、記者様お改め下さいませ（花枝）

〇平本喜代子様本紙を拜讀して一筆申上ます第一卷第四號畔道（賞男）の斷確けよもやあなたの作ではありますまい女學世界秋期增刊第二卷第十二號三十五頁の所に有る圖を剽竊したのでしよう平本君よ過を改むるに憚るなかれ（すみれ女）

〇京橋、田中秋子君よ君は女子文壇第一卷第四號に投稿せし新體詩「郡少女」は君が作なるか妾はかつて〇〇文壇上にて見受けしなり其は君が作と同一なりと言ふも過言にはあらざるべし參考に其の詩を記さん「金絲きらめく晴衣選。求むるなかれ郡少女。母が手織の木綿衣。あつき情のこもらずや。眞玉かゞやく髪飾り。羨むなかれ郡少女。神の惠みし野の花に。くしき香りのひそますや。妻寄とらね身なりとも。つらしと云ふなる郡少女。朝軒端の松の風。夕小川の水の音。そこに戀妙のひゞきあり。遊ぶ友なき身なりとも。慾しと云ふな郡少女。五畝の山畑十歩の田。種をおろして收穫れて。そこに無限のけらくあり」。此の詩も御作か東北の郡少女なる妾都少女田中秋子の君に願ひあり返し音樂を給へてよ――（野の花）

〇女子文壇第四號論文に於て地賞を得し小野靈枝子の「鏡面に向ひて」といふ文は女學世界第二卷第十六號にて木村えい子といふ人の文と同題同文なり。又同號秀逸にて「讀書の樂」賠山柳子のは女學世界第一卷第十三號の「讀書の趣味」號濱しげ子の文と同じなり記者に御注意まで（登代子）

〇記者様ほんに無念でたまりませんわ神聖な發愛なる女子文壇に剽竊文あるんですもの本紙四號の神奈川縣の小野靈枝女史憐の「斷腸」は卅三年三月廿五日發行の春の卷即ち中學世界の三卷四號の三重縣津市岩田町出口平松請燦の「斷腸條」の文を只中程少しぬいただけですわあとさきの文は一字一句の相違もありません（岩代永戸初子）

〇女子文壇第一卷第二號の和歌人なる越後國長岡千手町武藤枝子の「亡き姉が形見の指輪ゆるうなりて思ひ山多き春の夕暮」此歌は有る雜誌て一度賞を得た歌だ又三號の秀逸の部なる北多摩小寺とめ子の「春川のふちの松かげ柳かげいづれのかげに舟とどむべき」此歌は「春川の岸の花かげ柳かげ何れのかげに舟とどむべき」といふ歌の燒き直しにさうぬない此歌もある雜誌て賞を得た歌だ、大に猛省した可なり（三重縣志摩郡文神村忍告子）

〇いまさき子に云ふ本誌一卷二號はがき文欄「四季のわが家」なる一篇は、既に明治三十七年十月十日發行第六年二十一集百五十一號中學文壇に掲載せられし高知縣、竹崎藤兩なる人の作なり、左に竹崎氏の文に汝の文を記し見ん「春は霞に埋もれ夏は緣に木がくれ秋は紅葉に埋もれ冬は氷にとざさるゝ鳴呼面白き四季の吾が宿」汝が投ぜし文は「春は霞に蔽はれて夏は緣に木がくれて秋は紅葉てはとられて冬は氷て閑ざされる鳴呼なんと眺めのよき四季のわが家よ」。（本鄕湯島天神嗣畔原雪誤）

記者曰本號にも剽竊詩文の注意が斯くにぎやかになりし事を悲む、是を驅除すべき事の困難なるは此頃、野に萌え出づる雜草と同じく刈るばかりては又萌ゆる、併し今に根を引拔いて再び雜草の繁らぬやうにしたいと思つて居ります、因に云ふ、剽竊詩文の注意は成るべく雜誌の名と號數と頁數とを詳しく知らせて下さい、折角御注意下すつても出所が明かでないと剽竊なる事を明かに言へませんから

〇諸嬢の交際

〇皆さん、妾はこぞの三月、高等三年を修業して退學し、今は奉公の身、皆さん、妾を妹と思つて、御敎へ下さい、年は漸く數へ年十五歳です、末永く御敎訓下さい、

越後の内藤ゆき子さん、貴女、妾と文通して下さい、妾は貴女の才を慕ふのです、失禮ながら御承知なら、御手紙下さい妾の住所は（長野縣小縣郡中塩田村甲田英勝方工藤松子）

〇駿州の蔭池たけ子さん、あなのた様のおん身の上は倶樂部で一寸承りましたが實にお氣の毒でなりませんお察し申します私も實は先頃負傷致されました者でございますがせめてお互の心慰めと思ひますから敗しい者ではありますけれどお文にても交したうございますから、お氣に召しましたなら、お住所をどうぞ詳におきかせ下さいませんか、私は何となうわづらわしくつて確と居所は申上られよせんで失禮ですけれど（磐城國親子）

〇妾は遠國の方々と、別懇の交際を致したいのですが、御同意の方は、何卒下記迄御一報下さい、そして寫眞交換も致したいものです（佐世保市下宮田町六丸ノ丸、三谷方　横山柳子）

〇私はもの辯へぬ無學の

者てありますが本誌は第三號より我手に入りましたので第二號は或友達に見せていたゞきましたので兩方とも大變に面白くよろこんで居りますが中に悲しい事には何所の御方かは知りませんか他人様のお作りになつたのをかぎ取つて投稿なさる方があるともれきゝますが是等の投書投稿に付いて最早二三の愛讀諸姉からも御投書ありましたが私の様な者でも斯くの如く愛讀の雑誌がけがされたかと思ふと口惜ふございます皆々様も御同感だろうと存じます記者様も御多忙ていらつしやいませうがよろしく御しらべの上御注意下され度尙本誌も益々御繁榮の程祈りあげます私もへたながら稽古の爲投稿致升尙々誌友の諸姉方々よ御氣長くおつき合ひ給はり度御願申します（京都二條城の近傍花子より）○妾は賢明なる皆様と交際致したうございますからどうかうるはしい御玉章を舊つて綴々寄送して下さい、すぐ拙筆ながら御返事を送りますから、て淺學なるふつゝかな妾でも御見拾なく御交際を願います（和歌山縣和歌山市廢濯中之町二丁目早川りよう子）○妾も本誌愛讀者の一人てす以後は宜數御交際下さいな：：（富山縣西礪波郡福岡町地崎ふさ子）○三の宮露子様私あなたの御芳名は存じています、女學世界て、私しなんだかあなたがこひしくてふつゝかなる私しですけれ共此後は御交際をおねがひ申上ます（越後岩船郡入幡村字勝木齋藤周子）○神戸青山文子様貴女は津村丸子さん總田菊子さんの御二人を御存じてすか。私は大中よしよ少女界てのなんです。眞誠なる文壇の方々と文通したいわどうぞ皆様御文通を願ひます（栃木縣宇都宮市大寛町一二六田野郡子）○記者様妾も愛讀者の一人です何卒御見知りおき遊ばしてなほます〱女子文壇の榮へん事を祈りますなほ幾萬の愛讀諸姉よ淺學の妾を御見拾てなく末ながく親しき御交際を願ひます（兵庫山陽社前柳田のぶ子）○妾ねー親愛な御方と交際をしたいわ！どうぞ妾のやうな無學なものでもいつまでも永く交際してかわゆがつて項戴な（大阪府豐能郡池田北新町四十三番邸清水方菊藤壽賀子）

○繪葉書交換

○皆さんと繪葉書の交換をしたいのですが、どうぞ美しいのを送つて下さい、私も直ぐにお返事しますから（武藏寶珠花局内目淑伊京樺子）○皆様〃妾もお仲間に入れて頂戴ネそして繪葉書交換致しませう妾共には何より自謠のが好いと思ひますわあの神戸の園子さんてお仰る方、どうか御住所をお知らせ下さいませな（芝西應寺町六十番地白木菊女）○御社發行の女子文壇はほんとにいゝ雑誌てすネ私大好き、是から愛讀者になりましたから記者様を初め皆様どうぞよろしく繪葉書交換いたしたう存じます、皆様御自分てお書きになつたのをお送り下さい私も拙きながら差上げます（山口縣下ノ關阿彌陀寺町重田春子）○神戸の神山園子様、ゐはがきをありがたう、けれどをしいことに美しいゐに消印がありましたよ、住所を詳しくをしへて下さい、それから下谷の加藤朧月様神戸の青山文子様東京府下西川登代子様大阪佐々木芦江様にもあつくお禮申しあげます、（四月一日千葉すみれ）○千葉榎本すみれ様、栃木金澤保様、岡山葉芳女史様下谷加藤朧月様其他親愛なる壇友諸姉繪葉書の交換を致したう御座います故皆様も御送り下さい私もきつと〱送ります故（札幌北星女學校白島柳子）○皆様、繪葉書交換を望みます、其の節住所を何卒明記せられ度く候、私も差し上げますから（東京府下北豐島郡巣鴨村宇上駒込一六一田中舞月子）○繪葉書の交換を願ひます（鹿兒島市平ノ町新納殿小路馬場方竹之内遊子）○皆様私も女子文壇の愛讀者の一人に入れていたゞきましたから此れからは皆様と繪端書を交換したく存じます（大阪府豐能郡池田町字北山口笹井寒晦）○妾は繪葉書大好きてすが親愛なる諸姉よ何卒御交換下さいませんか妾ドシ〱送りますそして今度次の處へ宿がへ致しましたからよろしく（神戸市楠町六丁目壹六五阿部方青山文子）○文壇の諸君繪端書の交換を望みます私も御送りし申ますから御送り下さい（北海道室蘭港創成館にて但木こてふ）

記者曰、近頃繪葉書交換と云ふ事大いに流行するやうてすから特に此欄を置きました、繪葉書交換に就いて記者の意見は別に諸嬢に申上る時があると思ひます

○文藝と學校

○博文館發兌溫知叢書十、十一、十二の三卷御讓り下さる方はありませんか、若しあれば本欄までお知らせを願ひます、相當代價て御受け申しても、他の圖書と御交換してもよろしい（たそがれ）○記者様妾和歌大好きなのですけども下手で仕様がないのです和歌初學者に適當なよい本が有ましたら御知らせ下さいねがいます。それから誌友の諸姉御交際願升（鳥取縣米子町杵村武子）（記者曰、和歌初學者に適當な本はいくらでもあります、博文館發兌佐々木信綱氏著「歌の栞」はまだ御覽じやありませんか、未だなら御覽なさい、初學者にも便利です）○記者閣下に御伺ひ申上ます。私は只今高等女學校に居りますがいまれ卒業しましたら東京の女子大學の英文科或は女子英學塾へ入學いたしたいと思ひますが學資が御座いませんから苦學をいたそうと思ひます女の苦學に適當な事を數へて下さい（ＳＮ）（記者曰、あなたの志は誠に嘉みすべき事てすが、抑も苦勞と云ふこと、男子にあつても一通りの困難に止まらず、弊害が多くて結果は不眞、まして女子の苦學と云ふ事は男子に比べて何れくらゐ困難か知れません、身躰と精神の健全は言ふまでもなく、それでも猶は社會の誘惑に勝ち自活して學問して行かうと云ふには或る點まて無謀と言はればなりません、苦學は我々の見地から言ひますと先づ反對てすが猶ほ他日機會を得て別に論じて見ませう）

記者曰誌友倶樂部を成る可く趣味多く實益多ならしめんため此欄を置きました、諸嬢が書籍、雜誌の交換の便も計ります、又學校の事など簡短な事ならば此欄てお答へしませう、又々諸嬢が各自の地方の女學の隆盛、風俗人文上の出來事など本欄へ投書下されば面白いと思ひます



編輯たより

▲次號の表紙。次號から又本誌の表紙が新しくなります、今回佛國から歸朝された新進畫家中村不折先生に揮毫を請ひ、既に印刷に着手しました、如何に斬新に如何に優美なるか、次號の出るのを待ちて見られよ

▲誌友倶樂部の擴張。誌友倶樂部は愈よ益す繁昌しますので、諸孃の便宜を計り「文藝と學校」「繪葉書交換」の二欄を增しました、詳しい事は其欄に就いて御覽なさい。

▲賞品の發送。賞品が屆かぬとて催促される方もありますが本社は念に念を入れて其作者の眞僞を糺しますから自然後れますが正當なる優等者には無論規定通り送ります、二號分の賞品は四月下旬に濟みとなりました、三月分は本月十日頃發送致します。

▲畫の當撰者。前號繪畫の當撰者「月」と云ふ雅號「高」とあつたのは本名が分らないて無名氏として披露しましたが實は群馬縣群馬郡久留馬村三七後閑齋子孃の玉稿てした、本人から申込まれましたから玆に披露して置きます。

▲沒書。御自分の作が紙上に出ない爲め規則違反で沒書となつたのか、或は平凡採るに足らずと見られたのかと嚴しく手紙で申越される方がありますが投稿規則は別項の通り守り下されば違反てはなく、御作も必ず平凡とは限りませんが、月に幾萬通と來る投稿を限りある紙面に載せ切る事は出來ません。又選者の選に落第される事もありませう。併し一度や二度で懲りず努めて宜い作をお寄せなすつたら必ず出る時があります。

女學界



▲女學校評判見立。ある人曰く第一高等女學校は君子的、第二學者的、第三貴族的、女子大學は壯士的、華族女學校は洒脱、虎の門女學館は卑俗、御茶の水高等女學校兎に角紳士然たりと

▲女子淸韓語講習所。淑德婦人會の企圖に係り岩倉公爵夫人を校長とし伊澤修二、黑田眞洞二氏を顧問とせる同校は去る四月十七日午後三時より小石川區表町淑德女學校內新敎場に於て授業を開始せり

▲紀貫之贈位策命使。昨三十七年四月十八日は紀貫之朝臣の一千年忌に相當せしも朝臣の墳墓不明の爲め遂に贈位策命使を參向せしむる場所なかりしが小畑美福男及び故渡邊淸男等の盡力に依り朝臣の墓の近江國比叡山西坂本人與に在る事を確認したるに付き去月十八日午前十時贈位(從二位)策命使滋賀縣知事鈴木定直氏は同墓前に參向し親しく策命文を捧讀する筈なり尙ほ贈位と同時に畏き邊りよりは國風一首を賜りたる由

▲世界の女子敎育。歐米を巡遊して最近時歸國したる某敎育家の語る處によれば、英國の女子敎育は四十年前獨逸は五十年前より盛運に向ひたる次第にして米國は比較的に以前より勃興せしが如く、而して其學風は英國は概して賢母良妻的、米國は獨立生活的、獨逸は二派の學派が今尙ほ爭論を繼續しつゝありと又英國の女學生は修業後は大半敎育に從事し其他は文學、新聞雜誌記者、慈善事業に從事するもの多く又高等敎育を受けつゝあるもの、成績は決して男學生に劣ることなしと云ふ

毎號懸賞文藝募集

選評大家
文學士鹽井日本女子大學教授、巖谷小波君、佐々木信綱君
文學士尾上女子高等師範校教授、廣津柳浪君、山中古洞君

○論　文　　○抒情文　　○敍事文（各半紙廿四字詰三十行以内）
○消息文（半紙廿四字詰二十行以内）　○ハガキ文（端書かな付廿四字四行）
○短編小説（半紙總かな付廿四字六十行内）　○新躰詩（半紙一枚十句以内）
○短　歌（半紙二ツ切一枚一首）　○圖　畫（二寸の三寸判風俗景色）
○新體俳　句（はがき判紙一枚一句）
▲各欄とも一人佳作一篇　但着色無用可成臘皮紙を用ゆ
▲此外家庭教育に關する事項並に讀者の通信等何でも寄稿あれ

賞品規定

○論文○抒情文○敍事文○消息文○小説○圖畫、當選者へは左記の相當價格品選定の上贈與すべし
▲天賞　金壹圓五拾錢　▲地賞　金壹圓　▲人賞　金五拾錢
○新體詩○ハガキ文○短歌○俳句、當選者へ贈與品左の如し
▲天賞本誌三ヶ月分▲地賞同二ヶ月分▲人賞同一ヶ月分
毎回の本誌により當選者は贈品に差支へざる樣前以て住所氏名を通知あれ○賞品は發表二ヶ月の後に故障なき者へ美麗なる名譽賞狀を添へ贈呈すべし○當選者は速に寫眞送られたし
〔投稿〆切＝毎月十五日〕

▲嚴守すべき投稿規定必一讀を要す

○投書は各欄とも決して政治的時事論に涉るべからず、○用紙は規定の紙に限る○投書は一行廿四字詰に認むべし、但し句點も一字に數ふべし○投書には題の下には必らず本誌に倣ひ住所姓名を明記し、書體は楷書にて假名は平假名を用ひ明瞭なるを要す○各種の投書は必ず別に認むべし○封筒には『女子文壇原稿』の文字を記すべし○投書の中には他の用事の文句を記すべからず○投書には各自句點を施すべし、圈點は一切施すを禁ず○投書は他人の作物を剽竊するを禁ず之を犯したる當選文は無効たるべし○投書は一切返附せず○此規定に背く原稿は一切沒收す○投書は不足、未納税は一切受取らざるべし○投書丈け取纏め郵送するときは開封にして差出せば卅匁迄二錢にて事足れり
▲寫眞歡迎＝各地女學校舍及校長教頭を始め卒業生又は教育上參考となる寫眞寄贈あれ寫眞版に印刷して紹介すべし
▲其他の事項は毎號の「編輯だより」欄に就て知らるべし

定價

女子文壇（毎號三宅氏水彩畫寫眞口繪數葉挿入）　毎月一日發行

一冊（六十頁判）	前金拾錢	定價郵税共一冊金拾壹錢
六冊	前金五拾七錢	定價郵税共六冊金六拾三錢
十二冊	前金壹圓八錢	定價郵税共十二冊金壹圓廿錢

外國行郵税共拾四錢

愛讀者の再讀を乞ふ

○（愛讀は男女を問はず）○本誌は前金の外送本不致候○御申込の前金相切れ候節は無斷送本停止仕候○代金過不足のなき樣注意被下度候○領收書は一切差出さず着本にて領收と見做被下度候○御注文毎に何號より何册及御住所氏名等は明瞭に御認め可被下候○御郵券代用は必ず定價の壹割増（可成壹錢券）に願上候○御狀の未納税は一切受取不申發信の際御注意可被下候○御問合は返信料添ひ願上候▲御申越の號數賣切の時は近刊の分を送本仕候

廣告掲載料

種別	一頁（二十四字六十行）	半頁（二十四字三十行）	一行（五號活字二十四字）
普通	金九圓六十錢	金四圓八十錢	金拾五錢
特別（表紙二面四面）	金十二圓五十錢	半頁以下は御斷申上候	○

〆切　發行前十五日

▲廣告特約取扱
神田區千代田町二番地　博報堂
神田區花房町九番地　富士原秀穗
京橋區南佐柄木町二番地　日本廣告株式會社

明治三十八年四月廿八日印刷
明治三十八年五月一日發行

不許轉載

定價金拾錢

編輯兼發行者　東京市京橋區大鋸町十一番地　野口竹次郎
印刷者　東京市京橋區西紺屋町二十七番地　石川金太郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町二十六七番地　株式會社秀英舍

發兌元　東京京橋區大鋸町十一番地　電話本局六〇七番　女子文壇社

直接特約大賣捌所
東京市神田區表神保町三番地　東京堂書店
東京市京橋區尾張町二丁目廿六　東海堂
東京市京橋區鎗屋町十三番地　北隆館合資會社
東京市神田區裏神保町一番地　上田屋書店
東京市京橋區鎗屋町九番地　良明堂

with your sister?", asked father.
かい」，と父は問ひました。

"Oh, father, I want to go out with you, but"—
「アー，お父っさん，御一所に行きたいの，けれども」—

"Now, Little Mary (taking out his watch),
「サー，メリー，（父は懐中時計を取出して）

I will give you three minutes to decide, and then, if your mind is not made up, I shall decide for you."
行くか，行かぬかをきめるため三分間あげよう。それでもまだ決心が出來ないなら，わたしがきめて上よう。」

"Oh! but, father! just wait one minute before you begin, because I want to know where you are going."
「アラ，けれど，御父っさん！御始めなさる前，一寸待つて下さい。なぜってば，何處へ御いでかを知りたいのですもの。」

"Half a minute gone."
「卅秒過ぎた。」

"Oh, but, father, *father*, do you think you will go to"—
「アラ，御父っさんてば，御父っさん！あなた，入らっしやるお積ですの，彼處へ，あの」—

"One minute gone."
「一分間たった。」

"Oh, dear, dear! Sister, what do you think you'll do if I go out, because."—
アラ，マー，マー！姉さん，私が出たら何を遊ばすの，なぜてばね」—

"Two minutes gone."
「二分間過ぎた。」

"Oh, dear me! if you would just stop for a minute, and let me find out what sister is going to do, because"—
「ヲヤ，々々，どうしましよう！一寸待って下さって，姉さんが何を成さるか檢さして下さると」—

"Three minutes up. You'll stay at home with your sister."
「三分間たった！御前は姉と家に留守おし。」

"Oh, father!"
「アラ，お父っさん！」

flowers. This pretty custom was handed down and even to-day the first of May is celebrated in Europe and in America among the girls.

ほ欧米諸國にて五月一日は女の子等に祝はれてあります。

A long pole is erected on the green, around which the maidens dance and sing with music.

長い柱が芝生の上に立てられその周圍を處女等が音樂に合せて歌ひ且つ踊るので御座います。

The pole is always decorated with garlands and gay streamers, and is called the May-pole.

柱は何時も花輪だの色々の流旗で華美に裝飾され，メイポールと呼ばれて居ります。

A pretty girl is usually chosen to be the Queen of May who is decked with flowers and is seated near the May-pole to receive homage from the people. It is considered to be a great honor to become the May-day Queen.

春の女王として綺麗な小女か選擇さるゝが一般て，そうして此小女を花で飾り衆人の尊敬を受けるため，メイポールの側に坐はらさせます。此女王に選ばるゝは大そうな名譽としてあります．

Tennyson in his "The May Queen" describes beautifully the sentiment of a little girl who was elected to be the Queen.

テニソンの「ゼ，メイクイン」は此の名譽に預りし小女の感情をよく表はして御座います。

I wonder whether my dear readers know the poem. If not, please read it.

我が敬愛する讀者諸姉は此詩を御覽なりしや，未だとあらは是非御一讀あれ．

Undecided.

狐疑

"Mary, will you go out for a walk this after-noon with me, or will you stay at home to play

「メリーや，お前此の午後にわたしと一所に運動に行くか，それとも家に居って姉さんと御遊び

very soon, please.

Very sincerely yours,

Yoshi Mizuno.

かしく

水野よし子

The Answer.

Koishikawa, Tokyo,

May 2nd, 1905.

My dear Miss Mizuno,

How very kind of you to invit me to your picnic party! I have never been to Koganei and have been always wishing to visit there, and now I am perfectly delighted to accept your invitation. Yes, the eight o'clock train will take us there in good time. I shall not fail to meet you at the station next Saturday morning.

Thanking you repeatedly,

I am,

Yours most sincerely,

Tomi Hara.

同返事

小石川，東京，

五月二日

愛する水野様，

御遠足一行に私をも御招き下さるとは，なんと御親切でしよう。私はまだ小金井を尋ねた事は御座いませんで何時も參りたく思つて居りましたのに此御招きにあづかり誠に嬉しく存じます。左様です，八時發車なら，爲渡よい分刻にあちらに着きましよう。私は必らず來る土曜の朝停車場で御目にかゝります。

繰返して御禮申上ます。

かしく

原とみ子

May-Day.

In ancient days, the Roman youths used to go into the fields and spend the first day of May in dancing and singing in honor of the goddess of fruits and

五月一日。

大古，羅馬の青年が野山に出でゝ花や果實の女神を祭るため歌ひつ，踊りつ五月一日を遊び暮すが例でありました。此美優な風俗が後世に傳へられ今日もな

英　文

津田梅子閲　　河井道子述

Inviting a Friend to a Picnic.

Kojimachi, Tokyo,
May 1st, 1905.

My dear Miss Hara,

A friend of mine has just come to Tokyo from Hokkaido. We should like to take her about to visit the well-known places for the cherry-blossoms. We hope, if weather favors us, to go to Koganei next Saturday. We shall be most happy if you have time to go with us. The eight o'clock train from Shinjiku Station in the morning will be quite early enough. What do you think? Will you join us at the station, or come to our house the night before and start together? Let me hear from you

遠足に友を誘ふ文

麹町，東京
五月一日

愛する原様，

此度北海道より私の一友人上京いたしました。就ては，四方に伴ひ花の名所を見せてやり度く存じます。もし來る土曜日が晴天でしたらば，小金井に參りたう存じますが，あなたも御同行遊ばし下さる時間が御ありならば實に幸だと思ひます。朝八時の新宿發の汽車で充分早いと思ひますが，如何御思召てすか?。當日停車場で私共に御逢ひ下さいますか，それとも又其前日に私方へ御越しになり，翌朝皆と御一所に御出かけ下さいますか?何卒，早く御返事を御きかせ下さい

鹽井雨江先生序
西村醉夢先生著

文武堂新版

作文良材 續美辭寶典

《製本既成》

洋装袖珍美本 紙數五百余頁 價四拾錢 郵税六錢

本書は編者が數年來、東西古今の書を渉りて輯錄したる美辭麗句集にして、天地、春夏秋冬、動植物、人事感情、機器雜門の十二部に分ち、項を分つと更に數百、索引頗る便にして作文の士を利すること甚だ多かるべし。殊に本書の特色は美文韻文の二項に分ちて、晩近美文家及び詩人の名句を抜萃し、又泰西名詩の中より譯出したる所も少からざれば、全篇を通じて斬新勁抜世の同類の書と選を異にせり。希くは一本を購ふて座右に備へよ。

大町桂月先生序 西村醉夢先生編

作文良材 美辭寶典

(九版)

袖珍美製本 紙數四百頁 正價卅五錢 郵税四錢

發賣元 東京日本橋本町三 博文館

發賣元 東京神田表神保町 東京堂

文藝を見たりや!!!

●天下かくの如き不廉の雜誌もありませんが、又かくの如きコッタ、雜誌もないでせう。

●紙數僅に八頁定價金八錢 郵税二錢

●六回(一月、三月、五月、七月、九月、十一月各一日發行

●發行所 東京麻布區本村町二百四 大俗社

この雜誌は袋入ですからちよツと目につきません
東京市中の本屋でお買ひになるときはどうぞ文藝
といふ袋入の雜誌はあるかとおたづねください

文藝

文學雜誌

見本一冊拾錢なり

諸姉の投稿歡迎!!!

竹柏會は、清新なる歌文を研究すべく、佐々木信綱氏主任となりて、起されたる會なり。竹柏會は、毎月一回機關雜誌『心の花』を發行し會員の歌文を掲載す。竹柏會は、地方にありて良師につきがたき人々の爲に歌文の添削質疑に應ず。入會を希望せらるゝ諸氏は、郵券二錢を投せられよ。速に規則書を送呈すべし。

▲東京神田小川町一番地(電話本局千百十四番)

竹柏會

明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可

胃活

右は明治二十七八年戰役後我國民の體格に付て余等大に感ずる所あり即ち日本人の普通病なる胃病患者を救濟するの目的を以て學理と實驗とにより共同研究の結果發見したる胃病新藥にして効能確著誠に驚くべし之を廣く天下に弘布し世の胃病患者を救はゞ實に大日本國民の幸福なり

陸軍軍醫監正五位　長瀬時衡　印
陸軍藥劑監從六位　石塚左玄　印
海軍醫少監從六位　日向次作　印
海軍大軍醫正七位　横井太郎　印
海軍大軍醫正七位　門倉梅三郎　印

登錄商標

胃病新藥



効能

●溜飲●胃弱●慢性胃弱●胃加答兒●胃痛●胃痙●食慾不進●胸痞●宿醉●惡心嘔吐●呑酸嘈雜●腹滿●食傷等一般の胃病に著大の効能ある靈藥なり論より證據二三週間分を試めし玉へ

●官吏●教師●僧侶●學生●商人●銀行●會社員●婦人●店員其他座業に從事して、常に運動不足し、精神を勞する人は、平素に持藥として、少量宛の胃活を用ひ玉はゞ、食物の消化を助け、血液の循環を善くし身心を活潑ならしむ

注意

●藥は可成高きものを買玉へ●藥は可成思ひ立たる時に買玉へ●全國有名藥店にて請賣す●若し最寄になき時は發賣元へ注文あれ●全國無遞送料

定價	
一週間分	二十五錢
二週間分	四十五錢
三週間分	六十五錢
五週間分	一圓

發賣本舖　東京銀座一丁目廿三番地　大阪南久寶寺町境筋東　山田安民藥房

定價金拾錢　郵税壹錢

（東京秀英舍印行）